令和２年度

しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業

～大学連携による地域課題への取り組み～

研 究 成 果 報 告 書

令和３年(2021)年３月

しずおか中部連携中枢都市圏

令和２年度　しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業　成果報告書

1 幼児期における生物多様性学習プログラムの開発 ・・・ 1
（静岡大学　教育学部　教授　熊野善介）（静岡市環境創造課）

2 静岡県立川根高等学校の魅力化向上 ・・・ 6
（静岡大学　情報学部　准教授　永吉　実武）（川根本町教育総務課）

3 家庭や地域にある果樹を用いた地域創生 ・・・ 11
（静岡大学　農学部　准教授　松本　和浩）（川根本町企画課）

4 「多文化共生」への市民の理解促進に係るツール作成と情報発信の実践 ・・・ 15
（静岡県立大学　国際関係学部　教授　高畑　幸）（静岡市国際交流課）

5 新型コロナ感染拡大環境下での継続的な介護予防活動の展開 ・・・ 20
（静岡県立大学　　経営情報学部　講師　木村　綾）（静岡市地域ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ推進ｾﾝﾀｰ）

6 認知症ケア推進センターの有効活用に関する研究 ・・・ 24
（静岡県立大学　経営情報学部　教授　東野　定律）（静岡市地域包括ケア推進本部）

7 静岡県立川根高等学校の魅力化向上 ・・・ 28
（静岡県立大学　薬学部　講師　刀坂　泰史）（川根本町教育総務課）

8 人と理化学の融合分析により「しずまえの魚」の美味しさを可視化する ・・・ 32
（東海大学　海洋学部　教授　後藤　慶一）（静岡市水産漁港課）

9 幼児期における環境プログラムの開発 ・・・ 38
（常葉大学　健康プロデュース学部　准教授　中村俊哉）（静岡市環境創造課）

10 人生100年時代、高齢者の地域活動・社会参加を促進したい！ ・・・ 42
（常葉大学　教育学部　教授　猿田　真嗣）（静岡市高齢者福祉課）

11 ニューノーマル時代のテレワーク－新たな移住・定住スタイル、「交流」をベースとしたコワーキングスペース－のあり方に関する検討－ ・・・ 46
（常葉大学　経営学部　准教授　小豆川　裕子）（静岡市企画課）

12 静岡県立川根高等学校の魅力化向上 ・・・ 50
（常葉大学　外国語学部　准教授　鈴木　克義）（川根本町教育総務課）

13 Withコロナ時代に求められる駅前広場の将来像の提案 ・・・ 54
（常葉大学　教育学部　教授　佐瀬　竜一）（静岡市市街地整備課）

14 田代地域の自然環境保全対策のPR～エモマップ作成の取り組み～ ・・・ 58
（常葉大学　経営学部　講師　山田雅敏）（島田市環境課）

15 地域のことばの保存と継承を目指して（高齢者と学生の方言調査を通した交流） ・・・ 62
（静岡英和学院大学　人間社会学部　講師　大槻　知世）（静岡市高齢者福祉課）

16 図書館における英文多読・速読促進について ・・・ 66
（静岡英和学院大学　人間社会学部　准教授　遠藤　雪枝）（焼津市図書課）

17 魅力ある公園づくり－日本古典文学と藤の花－ ・・・ 70
（静岡英和学院大学　人間社会学部　准教授　畑　恵里子）（牧之原市都市計画課）

18 藤枝セレクションのブランド力向上と発信力強化 ・・・ 74
（静岡産業大学　経営学部　教授　柯　麗華）（藤枝市産業政策課）

19 温泉水を活用した水耕栽培モデルの探索 ・・・ 79
（筑波大学　生命環境系　教授　江面　浩）（静岡市井川支所）

幼児期における生物多様性学習プログラムの開発に関する研究

静岡大学 教育学部 理科教育講座　熊野研究室
教　　員：教授 熊野善介
参加学生：坂田尚子（静岡大学STEAM教育研究所・教育研究支援員）
角谷貴紀、田中豪、齋藤大斗、中谷みか

1　要約

静岡市は自然が豊かであるが、近年の家庭・労働状況の変化などから、親子で自然体験教室等への参加が難しく、自然と触れ合うことが苦手な保護者や子どもたちがいることが報告されている。幼児期に自然に触れあう体験機会を多く保証し、自然を大切にする心を育むために幼児教育の役割はますます大きくなっている。そこで、保育園・こども園等で、幼児でも体験できる生物多様性の保全につながる体験的な学習プログラムを開発する必要があると考えた。

市内の保育園・こども園から一園ずつ協力園を抽出して、開発したプログラムを実践し、活動結果の検証とさらなるプログラムの改善という研究過程を経て、市内の幼児教育の現場に、モデルプログラムとして提示することを目指している。今後、このプログラム提案を参考にして多くの園で実践されること、また別のテーマで生物多様性学習プログラム開発をして各園に提示することなどを通して、子どもたちが自然と触れ合う機会が増え、幼児教育の現場で環境教育的な活動が広がっていく可能性を模索した。

2　研究の目的

幼児期での自然体験の重要性が認知されており、保育園やこども園においては自然と触れ合えるような活動が行われている。そこでは、子どもたちの情意面の成長が見られ、成果を上げているように思われる。本研究では、情意面の発達や豊かさとあわせて、自然とのふれあいを通しそこに科学教育的な活動、STEM/STEAM教育的な活動を取り入れることで、自然体験を単なる体験にとどめず、学びの機会に変えていく方策を探っていきたいと考えている。環境教育は、自然科学に基盤をもつものでなくてはならないと考えるので、幼い時期に過度の負担なく自然科学的なものの見方、考え方に触れられるような、生物多様性の学習プログラム開発を目指す。また、開発したプログラムは、保育士・保育教諭の方々に周知し、子ども園などの支援を行いながら、現場での実践につなげていくことを目的とする。

3　研究の内容

保育園・こども園において、秋から冬にかけて実践可能と考えられる、生物多様性学習プログラムの概要を6つ示し(表1)、実践を希望する保育園・こども園を募った。各園の希望プログラムを検討して、今年度は2園、たんぽぽ保育園(駿河区池田)と横砂こども園(清水区袖師)で、ビーチコーミングのプログラムを実践することにした。両園では来年度へ向けて、プログラムを発展させたり、さらなる実践プログラムの検討をしたりしているところである。

まず、それぞれの園の状況やニーズを調査し、保育教諭たちとのミーティング、実施場所の下見などを経て、園にマッチするようにプログラムを再構成し、実践を行った。実践結果から課題点を明らかにして、プログラムの完成度を高め、どの園でも行えるようなものに仕上げていく。

研究方法は、計画、発案、実践、検証を繰り返しながらより良いものを作り出そうとする「実践型アクションリサーチ」で行う。

表1. 生物多様性プログラム（案）概要

タイトル・内容	ねらい
ビーチコーミング	生物の多様性や人が海に与える影響などを体験的に学ぶ
森・林でのお散歩と自然観察	秋から冬の木々の様子を体感し、そこに生きる生き物たちを観察する
種の作戦	「種」について観察し、その役割や戦略を探る
水辺の小さな生き物しらべ	水辺に生きる生き物たちが寒い季節をどう過ごすか観察する
ダンゴムシとミミズ	分解者たちの枠割と様子を観察し、自然界のつながりの大切さを学ぶ

4　研究の成果

(1)当初の計画

身近な自然物をテーマとして、これまでの研究から6つの生物多様性の学習プログラムを精選し、市内のこども園、保育園で生物多様性の学習に興味のある園に提示する（表1)。実践を希望するプログラムを選んでもらい、保育教諭たちとともに園の状況やニーズの洗い出し→実践計画立案→プログラムの再デザイン→実践→振り返り→プログラムの改善という研究過程を経て、幼児教育の場で実践可能なプログラムの開発に取り組む。実践する際は、大学側が主講師となり、保育士・保育教諭とともにティームティーチングの形態で行う。

(2)実際の内容（Aは予定どおり、Bは一部修正、Cは中止など）とその理由

A：コロナウィルス感染症拡大の状況を慎重に見極めながら研究を進めたため、研究着手から研究対象園での実践までに多くの時間を費やしたが、準備に時間をかけることができたため、実践から振り返り、プログラムの改善まではスムーズに行えた。園で希望するプログラムを、再構築してよりフィットする形で実践できたので、子どもたちの思いにも寄り添え、積極的に活動に取り組もうとする態度を引き出すことができた。プログラム内容としては満足のいく成果が得られた。

(3)実績・成果と課題

1)たんぽぽ保育園

実践計画立案の打ち合わせでは、強風のため現地の下見ができなかったが、実践当日の子どもたちの動きや移動のコース取りについても、地図を見ながら具体的に話をすることができ、時間などの微調整をして当日に臨んだ。当日は、風も弱く天候に恵まれた。活動はまず、海岸とはどんなところか五感を使って探検をし、その後気になるものを拾い集めて、シートの上に広げ観察をした。自然物なのか人工物なのかという視点で分類をして、「ここにない方が良いもの」はどうするのがいいのかなど、自然の多様性と人間のかかわりについてみんなで考えることができた。

表2. たんぽぽ保育園での実践研究の進め方

日付	内容	研究ステップ
1月18日	研究の概要説明、状況・ニーズ調査	状況・ニーズの洗出し
2月22日	ビーチコーミングプログラム案の提示（資料1)	実践計画立案
	園に合わせた調整：場所、人数、時間配分など	プログラム再デザイン
3月1日	ビーチコーミング:静岡市駿河区中島テニス広場近くの海岸 10：00～11：30　園児　21名　保育教諭　4名	実践
3月2日	プログラムの長所、改善すべき短所、不足した点の明確化	振り返り
3月15日	明確化した点をもとに改訂版を作成、報告書作成	改善

写真1. 最初の説明を聞く

写真2. 海岸について気がついたことを話す

写真3. 拾ってきたものをシート上で分類する

写真4. 人工物はゴミ袋に入れて持ち帰る

2)横砂こども園

実践場所（袖師の港付近）がいわゆる自然な形の砂浜(ビーチ)ではなく、船着き場があったり波打ち際も一部斜面をコンクリートで固めているいたりと変則的な海岸なのだが、そこも海と人間をつなぐ場所として環境教育プログラムを考えるところとしては興味深い場所である。下見では、子どもたちの動きと危険性をあらかじめ予想することができた。予定していた日程が雨天のため順延となったが、実践を行った日は天気も回復し、海の透明さや青さがよく観察できた。活動の流れは、上述のたんぽぽ保育園と同じだが、場所が違うと拾えるものが違い、自然物と人工物の分類においても、この現場では人工物の多さが目についた。「ここにない方が良いもの」をきちんとごみとして捨てるという考えが子どもたちから出されたが、年長児が積極的に自ら申し出てくれて、ごみ袋に分別しながら入れてくれた。

表3. 横砂こども園での実践研究の進め方

日付	内容	研究ステップ
1月25日	研究の概要説明、状況・ニーズ調査	状況・ニーズの洗出し
2月19日	ビーチコーミングプログラム案の提示（資料1）	実践計画立案
	園に合わせた調整：場所、人数、時間配分など	プログラム再デザイン
3月9日	ビーチコーミング：清水区袖師の港付近 9：45～11：15　園児　16名　保育教諭　6名	実践 （3月8日：雨天順延）
3月15日	プログラムの長所、改善すべき短所、不足した点の明確化	振り返り
3月16日	明確化した点をもとに改訂版を作成、報告書作成	改善

写真5. 波打ち際の観察

写真6. 気になるものを拾う活動をする

写真7. 缶と牡蠣殻が多く打ち上げられている

写真8. 人工物の分類をする

(4)今後の改善点や対策

他の園で実践する場合、この研究で行ったように、各園の実情に合わせた事前のプログラム微調整（アレンジ）は必ず必要であり、そうすることでより良い実践ができると考えるが、今回の振り返りで、至らなかった点、他の園で実践する場合の改善点として次の2点が明らかになった。まず、水筒など子どもたちが荷物をもって参加し活動を行う場合、場所を決めて管理できるように荷物置き（ステーション）を設置すべきであること、そして、拾い集めるものの中にはシーグラスや割れた貝がらなど、つかみ方によっては危険なものがあることを、あらかじめ子どもたちに注意事項として伝えておく必要があったことである。その他には、今回は、大学からの人員のサポートがあり、子ども3～4人に1人大人がつくことができたが、各保育園・こども園で独自に行う際は、道中の交通安全の確保や、海岸での見守りの密度などを考えると、数人のサポーターを用意することができると良いと思った。

5　地域への提言とこれからの展望

今回の研究、幼い子ども対象の「生物多様性学習プログラムの開発」は、ひとつのプログラムを実践・検証して確かな形にしたのみで、まだ始まったばかりである。この後も、自然につながる多くのテーマに沿ったプログラムを開発・実践し開発していくことを続けることで、子どもたちが自然と触れ合う機会が増え、幼児教育の現場で環境教育的な活動が広がっていく可能性が高まっていくことが見込まれる。

自然豊かな静岡市で育っていく子どもたちだからこそ、幼いころから自然を大切にする心を育み生物多様性の保全について考えられるような、自然体験・環境教育に触れることは大切なことだと考えられるだろうし、そのようなプログラムの開発はますます必要であると考えるのである。

【資料　1 】

こども生物多様性　プログラムチャート「ビーチコーミング」(案)

年月日	2021 年　　月　　日	時間	10：00～11：30
場　所	静岡市　　区　　海岸	対象	園児　　名　＋　保育教諭　　名
テーマ	ビーチコーミング		
ねらい	海岸で散策しながら、海と陸との境界を体感する。海岸への多様な漂着物などを観察することで、海の生物多様性と環境、人とのかかわりについて気付きを得る		

＜プログラムの流れと子どもの活動＞

海岸を散策する　　10:00

ごあいさつ
活動の説明・注意事項など
砂浜ってどんなところかな？何か落ちているかな？「観察してみよう」

↓

ビーチコーミング　　10:15

面白そうなものを拾い集めてくる

拾ったものを並べてみる　「どんなものがあったかな？」
　ビニルシートの上に並べる
　みんなで、 見てみよう、お話してみよう

なかま分け（分類に挑戦）…生き物、それ以外
「これから何が分かるかな？」

↓

ごみの分別　　10:50

そのままにしておいていいもの？
ちゃんとごみとして捨てたほうがいいもの？　→ゴミ袋に入れて持ち帰る
「気がついたことを言ってみましょう」

↓

砂遊び・お土産さがし　　11:10

ふしぎなもの
きれいな石
石英脈
シーグラス、貝がら　等　　（砂遊びをしたい子には砂遊びをさせる）

↓

片付け・お帰りの準備　　11:30

ごあいさつ

静岡県立川根高等学校の魅力化向上

静岡大学 情報学部 永吉研究
指導教員：准教授 永吉実武
参加学生：花谷すず菜、細貝光、大島友樹、山本拓未

1.要約

川根高校の魅力向上を通じて川根地域の活性化を目指すには、大学・大学生と連携しながら川根本町を題材としたテーマに、川根高校の生徒が主体的に取り組むことが有効であると考える。これは、生徒（川根本町出身者、川根留学生の双方）の地域への理解（新発見、深化）を促し、卒業後の自らの活躍の道を探索するきっかけとなるだけでなく、社会で活躍するための実践知を学び取るチャンスでもある。

本事業では、川根本町の観光資源をより効果的に観光客や地域住民に広報するための施策とその実現手段を検討する。具体的には、川根高校の生徒の制作物の魅力を向上させることを目指し、静岡大学情報学部の大学生がその活用方法の検討を重ねることによって、高校生が制作した寸又峡「案内板」の「ナゾ」を活用して、観光客向けのスマートフォン・アプリ（謎解きゲーム）の試作を行った。

これを活用し、来年度、川根本町のステークホルダーの協力を得て実証実験を実施する予定である。

2.研究の目的

川根本町が持続的にその魅力を維持・向上させ、川根高校の魅力向上による川根地域の活性化を達成するためには、長期的観点と短期的観点から川根高校のブランド力を高める戦略が必要である。長期的には、例えば、川根高校の生徒たちが主体的に企画を立てて推進するといった川根高校の自立心、地域愛を育む教育の特色を訴求した魅力づくりとその継続的な情報発信による認知度の向上が必要である。短期的には、川根本町地域を題材に川根高校が行っている総合的な探究の時間や課外活動をより充実したものとすることを通じて高校の活動の魅力を高め、川根地域内外からの入学率を高めていくことが必要である。

本事業の目的は、静岡県立川根高等学校の魅力を向上させることを目指し、これらの長期的観点と短期的観点の達成を目指して、バランスよい施策により支援することである。

3.研究の内容

本事業を通じて、2018年度および2019年度は、①川根本町「地域探求」の実施、②川根高校生徒向け動画編集講座の実施、③川根高校Webページのコンテンツ充実、④川根高校紹介動画制作を実施した。

2020年度においては、川根高校の生徒が総合的学習や課外活動等を通じて、地域の魅力をより主体的に発信できるための基盤を構築することを目標に、**スマートフォン・アプリLINEBotを用いた「謎解きゲーム」のプロトタイプ制作**を実施した。また、**プロトタイプには、川根高校の生徒が検討・考案した観光客向けの寸又峡を題材とした謎解き問題（「ナゾ」）を実装**した。

また、来年度は、このプロトタイプを用いて、寸又峡の観光活性化を目指した実証実験を行うこととし、その実行計画を立案した。なお、この際には、川根高校の総合的な探究の時間との連携性を深めることも念頭に議論を行った。

本事業の研究の実施に際しては、川根高校、川根本町教育委員会と協働するほか、川根本町観光課、川根本町町づくり観光協会の協力を得た。

4.研究の成果

研究の成果として、Ⅰ．本事業の直接的な成果（制作物）の観点、および、Ⅱ.本事業の成果物の活用法の検討の観点、から言及する。

I-①. 川根高校生と静岡大学情報学部の大学生と連携

(1) 当初計画：

川根高校の生徒と静岡大学情報学部の大学生が対面・オンライン等を駆使しながら交流することを通じ成果物の制作に取り組むことを予定していた。具体的には、川根本町の主要観光地などの地域訪問・探索、川根本町の魅力を語り合うことを通じた町の魅力の発見・再認識の場の設置、川根本町の魅力を発信するための方策検討、観光地案内板の協働デザイン、スマートフォン・アプリの制作などを予定していた。具体的には、図１を参照されたい。

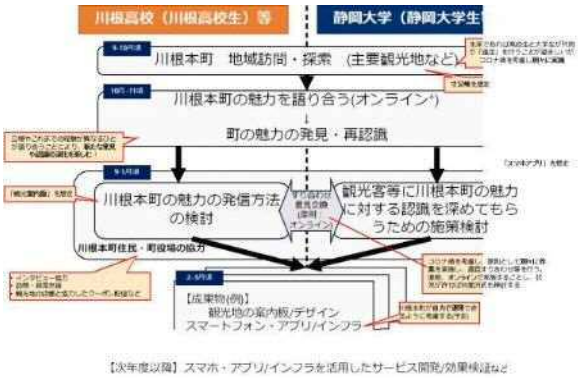


図1：当初計画（2020年9月時点）

(2) 実際の内容：【B：一部修正】

新型コロナウィスル感染症拡大防止(緊急事態宣言発出等) のため最小限の連携にとどめることとした。これに向けて、2020年11月に当初の目的を毀損しない範囲内で実施計画の修正を行い、来年度（令和3年度）に川根高校の生徒と静岡大学情報学部の大学生が本格的に協働することを可能とする基盤づくりを行うこととした。

(3) 実績・成果

紙幅の都合から詳細な記述は省略する。見直し版の計画と実績については、図2を参照されたい。

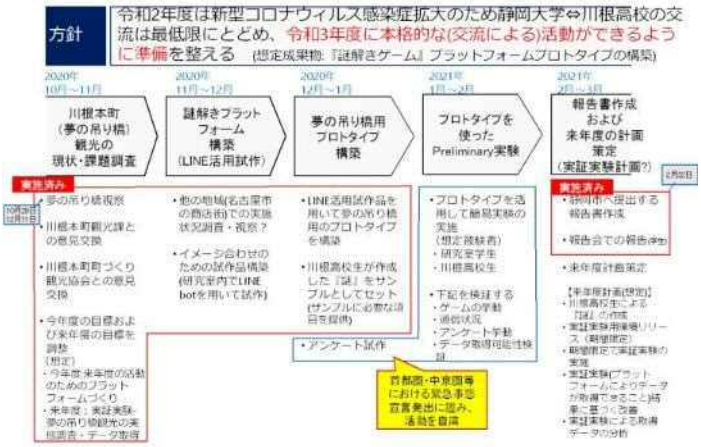


図2：修正版実施計画(2020年11月)と実績概要

(4) 今後の改善点や対策

オンライン環境等をより駆使することによって、川根高校生徒と静岡大学情報学部の大学生との

交流を促進することを検討する必要がある。

I-②.観光客向け寸又峡「案内板」のデザイン

(1) 当初計画：

川根高校の生徒と静岡大学情報学部の大学生が協同で、観光客向けの寸又峡「案内板」をデザインする。

(2) 実際の内容：【B：一部修正】

新型コロナウィルス感染症拡大防止のために川根高校の生徒が主体的に実施した。

(3) 実績・成果

川根高校の生徒が観光客向け寸又峡「案内板」を主体的に考案し、設置済である（図3参照）。

図3：川根高校生徒が考案した観光客向け寸又峡「案内板」デザイン

(4) 今後の改善点や対策

前項Ⅰ-①同様、オンライン環境等をより駆使することによって、川根高校生徒と静岡大学情報学部の大学生との協働を促進することを検討する必要がある。

I-③. スマートフォン・アプリなどの制作

(1) 当初計画：

LINE機能(LINEBot）を用いることによって川根高校の生徒によって考案された「ナゾ」を実装した「謎解きゲーム」(プロトタイプ）を制作する。また、制作したプロトタイプを活用して簡易実験を実施することを通じて、謎解きゲームの挙動、通信状況、付帯アンケートの挙動、データ収集試行等を行う。

(2) 実際の内容：【B：一部修正】

新型コロナウィルス感染症拡大防止(緊急事態宣言発出等）のため最小限の連携にとどめたため、LINE機能を用いて「謎解きゲーム」のプロトタイプを制作することに留めた。そして、プロトタイプを用いた簡易実験を中止し、次年度以降に実施することとした。一方で、川根高校の生徒による試用が行われ、フィードバックを得た。

(3) 実績・成果

図4：「謎解きゲーム」(プロトタイプ)

図5：操作説明書

図6：生徒による試用の様子

【川根高校生徒による「謎解きゲーム」(プロトタイプ)試用の感想（一例）

・「LINEで参加できる形になってるのがすごい！」

・「行きは特に上り坂も多くしんどいから、ゲームで気を紛らわせて面白い」

・「3択だと、3回答えたら絶対正解が見つかるから、もっと工夫したら面白くなりそう」

(4) 今後の改善点や対策

ユーザーからの返答を想定し、キーワード設定を充実させる必要がある。

II. 成果物の活用法の検討

(1) 当初計画：

本事業の開始時点での実施予定はなし。

(2) 実際の内容：【B：一部修正】

前述Ⅰ-③等の通り、プロトタイピングにより制作したスマートフォン・アプリ（LINE機能を用いた「謎解きゲーム」）を用いた簡易実験を行う予定であったが、新型コロナウィルス感染症拡大防止のために、これを中止した。これに代わり「謎解きゲーム」の活用方法について検討を行った。

(3) 実績・成果

川根本町教育委員会、川根本町観光課、川根本町町づくり観光協会や静岡大学情報学部の大学生が議論を実施した。議論の結果、制作したLINE機能を用いたスマートフォン・アプリ（「謎解きゲーム」）を活用することにより、川根本町の観光政策に有用な下記の施策（例）を実施できる可能性があることが導出された。ただし、実現可能性については、継続的に検証作業が必要であることも言及された。

例1）アンケートの電子媒体化による回収率向上

- 観光客等に対するアンケートをLINE「謎解きゲーム」の終了時に電子的に実施する
- 紙媒体によるアンケート回答の手間（筆記用具と用いた記入の手間など）や回収の手間等を回避することが可能であり、スマートフォン利用者等からの回収率の向上が見込まれる
- 食事・土産物屋で利用可能なクーポン等のインセンティブを付与することでさらなるアンケート回収率の向上の可能性もある
- 収集したサーベイデータを観光施策の検討に利用することが可能である

例2) 観光客の混雑緩和

LINE機能を用いた謎解きゲームが観光コースを推奨することにより、観光客が参加するコース分散を誘発させる。これにより夢の吊り橋へ到着するまでのタイムラグを発生させることが可能であるので、観光客の混雑緩和を促す。

- LINE機能を用いた「謎解きゲーム」に表示される、謎解きチャレンジ「ルート」を制御することにより、観光客の混交ルートの分散化実現の可能性がある
- 具体的には、寸又峡の駐車場から夢の吊り橋までのルート分散化させることにより、多客となる紅葉シーズン等の夢の吊り橋の待ち時間の短縮化や混雑の緩和を実現する

図7：オンラインでの議論

(4)　今後の改善点や対策

制作したLINE機能を用いたスマートフォン・アプリ（「謎解きゲーム」）を活用することを通じて、上述の例1）アンケート回収率の向上は比較的容易に実施が可能であると考え、次年度に実証実験に取り組みたい。例2については、実証に係る難易度が高いことが考えられるため、体制・予算等について慎重な検討が必要と考える。

5.地域への提言

川根高校は、川根本町活性化に向けた活動の中核となり得る重要な役割を担っている。川根高校は、生徒が豊かな自然に囲まれてのびのびとした高校生活ができる環境を有しているだけでなく、熱意のある教員指導、充実した寮生活・部活動など様々な魅力を有している。さらに、他の地域では見られないような川根本町役場等を中心として川根高校の生徒を応援しようとする具体的な活動がある。

これらは川根本町が有する「目に見えない」貴重な資産であり、これらを重層的に活用することによって「目に見える」資産である観光地をさらにアピールすることは、町全体が一体となって町を盛り上げようとする機運を加速させるものであると考える。

本事業では、今年度、川根本町の重要な「目に見える」観光資産である寸又峡の魅力を高めるために川根高校の生徒が主体的に活動できるように促すための基盤（LINE機能を活用した「謎解きゲーム」）を、静岡大学情報学部の大学生がプロトタイピングにより試作した。

来年度以降、この試作アプリを用いて、その可用性・信頼性などの観点で実証実験を行うことを通じて、「見えない資産」と「見える資産」の双方が有機的に相乗効果をもたらすような活動を進めていきたいと考えている。

6.地域からの評価

寸又峡でLINEを用いた「謎解きゲーム」を実施することは観光客にとって魅力的であると想定され、とても良いアイディアであると考える。また、アンケート機能を付帯させることにより観光客等からの意見を収集しやすくなるとも考えられる。さらに、多客時に寸又峡の夢の吊り橋の待ち時間が長時間になるため、混雑を多少でも解消したり、観光客への待ち時間に関する情報提供を行うためのプラットフォームとして活用することも考えられる。

また、これらを検討する際に川根高校の生徒が静岡大学情報学部の大学生と協働することはとても有意義なことであると考える。川根高校の生徒や静岡大学の大学生が積極的・主体的な活動を行うことによって、川根本町の活性化につながるようなアイディアを出してくれることは、町民が歓迎するところであると考える。今後も是非、協力していきたい。

家庭や地域にある果樹を用いた地域創生

静岡大学 農学部 園芸イノベーション学研究室
教　　員：准教授 松本和浩
参加学生：井関早弥香，井上元，岡愛香梨，中込光穂，岸田周士，湯澤孝哉，影山史弥

1. 要約

本研究は，川根本町久野脇地区において，「家庭や地域にある果樹」を用いた地域活性化を行うものである．久野脇地区に庭木として存在する果樹を，地域住民と都市住民にとって魅力のあるものに変換し保全するとともに，中山間地域と都市との交流のツールとすることを上位目標に掲げている．本研究室は2年間にわたり住民らが行っている「くのわき縁結びプロジェクト」のサポートを行っており，本研究も当プロジェクトの一環として実施した．庭の果樹を用いた地域活性を実現するために，久野脇地区の果樹をプロットした植栽地図を作製した．また，「聞き書き」という手法を用いて，庭の果樹にまつわる物語を収集した．

作成した果樹の植栽地図は新たに作成した「縁結びの村くのわき」公式ホームページに掲載した．また，カキ，カンキツ類など13品目の果実品質を調査し，品種同定を行った．また，「聞き書き」による地域活性化を行っている南伊豆町を久野脇の住民とともに訪問し，「聞き書き」の実施者からノウハウを学んだ．それらの成果を基に実際に久野脇地区の住民6名に対して「聞き書き」を行った．以上の活動の結果，久野脇地区の住民が我々に対して果物に関する質問をするようになり，庭の木を残すという思いが強まっていると感じた．ホームページが作成され，より多くの人に久野脇の庭の果樹を魅力に感じてもらえるように，庭の果樹の話や，「聞き書き」等を今後ホームページに掲載していく予定である．

2. 研究の目的

久野脇地区では自家消費用の様々な果樹が庭木として保存されてきた．その中には地域の風土と文化を背景に無意識に選抜された在来種も多い．しかし，住民の高齢化や都市部への移住により，それらの管理は行き届かず，放置され荒廃したり，野生動物侵入の原因になったりしている．貴重な遺伝資源を保全しつつ，里山の緑ある風景を守るためには，住民のみに管理の負担を強いるのではない新たな管理・活用システムの開発を目的とする．

未利用になってしまった既存の庭の果樹を久野脇地区の住民と都市住民にとって魅力のあるものに変換するとともに，中山間地域と都市との交流を促すツールにする．久野脇地区の庭の果樹には貴重な在来種が存在する．また，2年前から地域活性のために久野脇地区で行われている「くのわき縁結びプロジェクト」の一部としても活動する．

3. 研究の内容

庭の果樹を，中山間地域と都市の交流のツールとするという上位目標を達成するため，①久野脇地区にある庭の果樹をプロットした植栽地図の作製，②各果樹にまつわる物語の「聞き書き」を行った．①について，久野脇地区住民と共に庭木の植栽状況を調査した．久野脇地区の玄関口である「まきや」で配布されている「しおごう＆くのわきおさんぽMAP」に庭の果樹をプロットした．②について，「聞き書き」とは，住民の言葉を聞いたままに書き起こす手法である．本研究では住民の暮らしの中に存在していた庭の果樹について話を聞き，庭の果樹にまつわる物語として収集した．

これらの物語によって，地域住民に庭の果樹が久野脇地区の風土と文化に根付いた存在であることを

認識させ，果樹の保全を促した．現在，都市住民に対し久野脇地区を認知させる手段として「聞き書き」で作成した物語をHPに掲載するとともに本を出版する予定で準備を進めている．

これらの事業を円滑に進めるため，「聞き書き」を実践して地域住民の生き方を伝えている南伊豆町の「ききがきや」を訪問し，「聞き書き」のノウハウを学んだ．久野脇では，６名に対して「聞き書き」を行った．

写真1.「聞き書き」をしている様子

4．研究の成果

(1)当初の計画

① 庭の果樹の植栽地図を作成する．これを基に果樹の大まかな収穫期を予測し，果実品質の調査および品種同定のプランを作成する．作成したプランに則り，現地調査を実施し，果実品質は研究室に持ち帰り実験室で調査する．

② 「聞き書き」について，南伊豆町の実施者からノウハウを聞く機会を設ける．それぞれの果樹にまつわる「聞き書き」を住民３～４名に対して行い，原稿を作成する．

(2)実際の内容

① 庭木の植栽状況を調査し，植栽地図を作製した．果実の品質調査を行い，品種の同定を行った．A

② 先行して「聞き書き」に取り組んでいる南伊豆町の住民団体「ききがきや」を訪問しノウハウを学んだ．果樹にまつわる「聞き書き」を住民の6名に対して行い原稿を作成した．A

(3)実績・成果と課題

① 久野脇地区住民と共に庭木の植栽状況を調査した．久野脇地区の玄関口である「まきや」で配布されている「しおごう＆くのわきおさんぽMAP」に庭の果樹をプロットした．作成したマップは新たに作成した「縁結びの村くのわき」公式ホームページに掲載し，誰もが閲覧できるようにした．果実の品質調査を行い，カキ，カンキツ類など13品目の品種の同定を行った．

② 果樹にまつわる「聞き書き」を住民の6名に対して行い原稿を作成した．久野脇地区の住民2名と，静岡大学の教員，学生含めた計7名で南伊豆へ行き南伊豆で「聞き書き」を行っている2名からノウハウを学んだ．久野脇地区のホームページへ「聞き書き」の原稿の一部を掲載できるように枠を設置し，今後，随時追加できる体制を整えた．

③ 「聞き書き」を行ったことで，「さいらく」という在来種の存在や，果実を採りに地域外から人

が往来していたことが明らかになった．「聞き書き」を基に物語を収集し，今後は多くの人に読んでもらうために本の出版を計画している．来年度の出版に向け現在編集作業を行っている段階である．

④ 地域住民に本研究に協力してもらうために，久野脇地区では瓦版と呼ばれる回覧板に「さやか通信」として本研究の近況報告をしている．この瓦版を通して，地域住民に活動内容を知ってもらい，地域との交流を行いやすくなった．引き続き果実の品質調査，同定と，「聞き書き」を久野脇地区で続けていく予定である．

写真2．在来種「さいらく」を見ながら話を聞いている様子

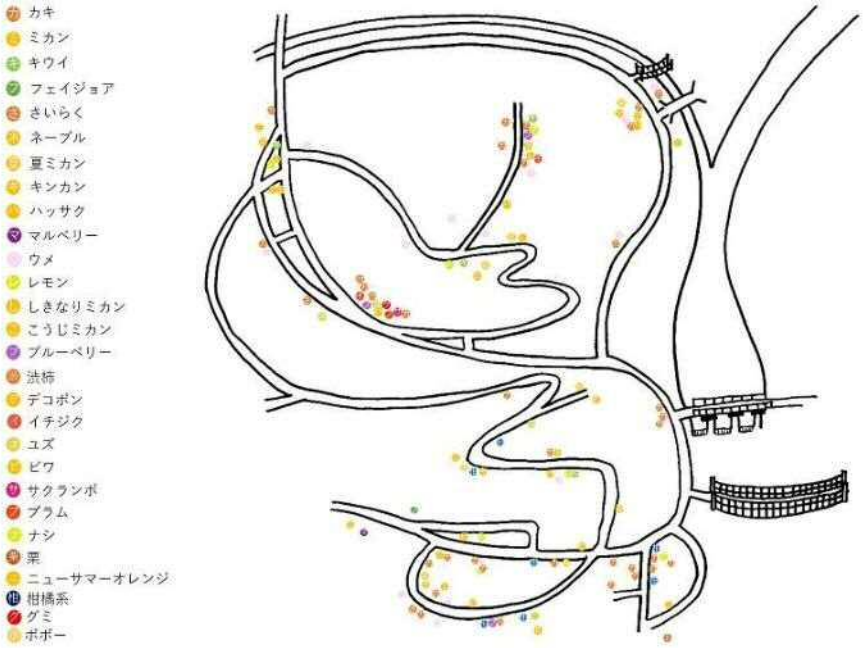


写真3．ホームページに掲載した果樹の植栽地図

(4)今後の改善点や対策

今後も地域が行っている「くのわき縁結びプロジェクト」との連携を大切に，本研究を続けていく．また，「聞き書き」をまとめた単行本を作成する予定である．

5．地域への提言

久野脇地区では，多くの庭の果樹があるが，特産品である茶ばかりに注目が集まり，庭の果樹にはほとんど目が向けられていない．中山間地域の庭の果樹には，地域の風土と文化を背景に無意識に選抜さ

れた在来種も多い．植栽地図の作製により，庭の果樹に注目を向けるとともに，「聞き書き」によって庭の果樹から久野脇地区の風土と文化を再認識し庭の果樹の価値を上げ，保全につなげるべきである．

6．地域からの評価

地域の方々と共に「聞き書き」や果樹の植栽地図の作製を行ってきた．果樹の植栽地図を，地域のホームページに掲載したところ，多種多様な庭の果樹の存在やその数の多さに対し，住民から驚きの声が上がった．また，瓦版により我々の取り組みが地域に広く認知され，訪問中に住民らが「うちにもあったよ」「庭に昔からあったけど何の品種だろう」と，各家庭の庭の果物を持参し，興味を示した．このような反応から，これまで注目されていなかった庭の果樹に対し，住民らの関心が高まっていることが伺える．庭の果樹を通し，地域外の存在である我々と地域住民の交流が生まれたことから，庭の果樹は我々の最終目標である久野脇地区と都市の交流を実現するためのツールとして利用することが可能である．今後は，「聞き書き」を基に収集した物語をホームページに掲載することで，地域住民に庭の果樹の風土･文化的な魅力を伝えていく予定であり，住民らのさらなる関心の高まりが期待できる．なお，連携して活動を行った「くのわき縁結びプロジェクト」からは高い評価を得ており，今後も継続して共同で活動していくことを確認している．

写真4．庭の果樹を見ながら話を聞いている様子

写真５．在来種「さいらく」の干し柿ひもに棕櫚を活用している

（成果報告書）

「多文化共生」への市民の理解促進に係るツール作成と情報発信の実践

静岡県立大学　国際関係学部 高畑研究室
教　　員：教授　高畑　幸
参加学生：福井早紀、中条彰英、Nguyen Thi Anh Dao

１要約

静岡市全域において外国人住民と地域住民との多文化交流活動が進むことを目的として、その拠点を視覚的に明らかにするため、市内のエスニックレストランおよび食材店を示したマップを紙媒体およびウェブ（Googleマップ）で作成した。コロナ渦のためマップを利用したウォーキングツアー実施は断念した。

２研究の目的

本研究の目的は、①静岡市全域における地域社会の多文化交流活動を促進するため、その拠点としてのエスニックレストランと食材店のマップ（紙媒体およびウェブ）を作成すること、②紙媒体は市内各公共施設、ウェブは関係各所のホームページやSNSを利用して拡散・普及させること、③静岡駅周辺においてマップに掲載されたレストランや食材店をめぐるウォーキングツアーを実施すること、の３点である。

静岡市においては2020年に外国人人口が１万１千人を超えるなど、市全体の人口減少と外国人住民の増加が同時進行している。しかし、外国人は概して市内に散在居住であり集住地区が認識されづらく、地域での多文化交流活動はいまだ活発とは言えない。そこで日本人住民と外国人住民の両者にとってアクセスしやすい場所であるエスニックレストランや食材店を多文化交流拠点と位置づけ、まずはそのマップ作成を行って場所「見える化」し、次に交流活動を促したい。

３研究の内容

2020年9月から12月にかけて、ゼミ学生３人（福井、中条、Dao）が、静岡市内のエスニックレストランや食材店（外国人経営者の店舗を中心に）をインターネットで検索し、所在地をリストアップし、4か所のレストランに取材を行った。

合計81カ所のレストラン等が存在することが明らかになり、それらを表示するGoogleマイマップを作成するとともに、全店舗の店名・所在地および取材した４店舗の詳細を示す紙媒体のマップを作成した。

ただし、コロナ渦で学生が外出を伴う活動の頻度は限られ、取材先は当初予定よりも少なくなり、予定していたウォーキングツアー実施は断念した。

４研究の成果

(1)当初の計画

静岡市における多文化共生への市民の理解促進を目的とするツール作成と情報発信のため、活動範囲を静岡市内に限定し、感染対策に十分注意した上で、

①市内（３区）で外国人が経営する（外国人がよく利用する）商店、レストラン、レジャー施設等を特定して取材を行い、それらを紹介するイラストマップ（紙媒体・ウェブ版）を作成する。マップは市

内公共施設に設置し、市のＨＰ等で公開する。

②イラストマップのウェブ版を、ゼミおよび各学生のＳＮＳを通じて拡散させる。イラストマップを利用して、マップで紹介した商店やレストランを利用した人がいる場合は、ゼミのＳＮＳに投稿してもらい、さらなる拡散と、マップを利用した多文化交流の推進をはかる。

③年度末に、マップで紹介した商店やレストランをめぐるウォーキングツアー（JR静岡駅を基点とし、静岡市役所周辺を歩く）を実施する。（実施の可否はコロナ感染状況により判断）

上記をもって、静岡市民が「地元にいながら世界を味わう」マイクロツーリズムを体験するとともに、コロナ感染収束後に対面的交流をより活発に行うことが可能になると思われる。

(2)実際の内容：A

当初予定どおり、学生が静岡市内のエスニックレストラン４か所に出向いて店主のプロフィールや出店経緯、店内で行われる多文化交流活動について取材を行い、マップ作成のための材料を収集した。完成したマップの普及は紙媒体に加えてウェブ版の利用が多かった。ただし、当初予定していたウォーキングツアーの実施は断念した。

(3)実績・成果と課題

2021年2月20日にマップは500部納品され、2月22日に静岡市国際交流課に送付の上、市内各区役所窓口、11カ所の図書館、静岡市国際交流協会において配架を依頼した。県立大学内においてもマップを配布している。

マップの完成について、静岡市の公式ホームページおよび静岡市国際交流協会の公式Facebookで告知していただいたほか、本研究室で運営し県内在住の外国人家庭の食卓を紹介するFacebookページ「The Migrant's Table in Shizuoka 2020」にも掲載した。また、紙媒体のマップにはウェブ版（googleマップ）へアクセスするためのQRコードを付している。2021年4月8日現在、表示回数は1525回を数えた。

ただしウォーキングツアーの実施を断念したため、このマップを利用しての街歩きや交流活動の実施は今後の課題である。

（参考）

Googleマップ版

https://www.google.com/maps/d/viewer?mid=1oonelDixXrlDoZ_kyaCV_POL7NvFnhkk&ll=34.99495295365948%2C138.39426563920895&z=12

静岡市ホームページ　https://www.city.shizuoka.lg.jp/799_000117.html

静岡市国際交流協会Facebook　https://www.facebook.com/welcometoSAME

The Migrant's Table in Shizuoka　https://www.facebook.com/TMTShizuoka2020

(4)今後の改善点や対策

静岡市内のエスニックレストランや食材店のすべてを取材できたわけではない。今後、このマップの改訂版を作成し、より多くの拠点や活動を「見える化」していくことが必要である。また、マップ作成の本来の目的は多文化交流の活性化である。次年度以降のゼミ活動では、マップに掲載されているエスニックレストランの休業日の店内を利用しての、外国ルーツの店主や店員さんとの交流活動等に取り組んでいきたい。

５地域への提言

第一に、今回作成したマップを活用して、静岡市内ではすでに多文化交流の拠点としてのエスニック

レストランや食材店が存在し、コロナ渦の前には音楽や芸術を通じた交流活動が行われていたことを知ってほしい。現在はコロナの影響で飲食店の利用が低迷し、対面的交流活動が難しくなっているが、ワクチンの普及等で感染状況が改善したら、それらの場所を訪ねて活動に参加して欲しい。

第二に、マップ作成の過程で、エスニックレストランは概して市内中心部ん（いわゆる「おまち」エリア）に集中しているものの、住宅地にも存在することがわかった。市内の公民館活動や自治会活動においてもこのマップを利用し、エスニックレストランの休業日等を利用して多文化交流を行うことを提言したい。店主や店員だけでなく顧客も外国ルーツであることが多く、交流活動を通じて地域行事や防災訓練への参加を促すことができるだろう。

６地域からの評価

完成したマップを取材先のレストランや食材店に送ったところ、「嬉しい。店内でお客さんに配布する」との声をいただいている。

取材先の店（オールド上海カフェ1930）（2020年11月20日）

取材先の店（モロッコカフェ＆ランチ Labass?）（201年12月15日）

おいしい多文化交流！静岡市エスニックレストランマップ

Googleマップ版（2021年4月8日現在、表示回数1525回）

https://www.google.com/maps/d/viewer?mid=1oonelDixXrlDoZ_kyaCV_P0L7NvFnhkk&ll=34.99495295365948%2C138.39426563920895&z=12

以上

新型コロナ感染拡大環境下での継続的な介護予防活動の展開

静岡県立大学　経営情報学部 木村研究室
教　　員：講師　木村　綾
参加学生：木村幸矢、志村友佳子、高梨亜美
西迫大志、古橋晧平、森暖

1　要約

健康寿命の延伸に向け、全国各地で高齢者の介護予防活動が展開されている中、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、活動が中止となった。その影響により、高齢者の筋力や活動意欲の低下が懸念されている。そこで、在宅高齢者の心身機能の変化について調査を実施した。調査結果から、地域の様々な活動が自粛になり、約７割の人が日常的な活動量が減少したと感じていた。また、活動自粛による身体及び精神的な不調を感じている人が３割を超えており、身体的な不調として「筋力の低下」や「目の疲れ」、「腰痛」、精神的な不調として、「不安を感じる」や「やる気が起きない」、「集中力が続かない」を感じる割合が高かった。

また、心身の不調に対し、約７割の人が継続的に対策を行えていた一方で、約２割の市民が個々人で継続的に行う方法や意欲を見出せずにいることがわかった。

今後も継続した感染症対策が求められる中で、高齢者の心身機能や活動意欲を維持・向上させるために、従来の集合型の活動に留まらず、様々な媒体を活用したアプローチを展開していく必要がある。

2　研究の目的

人生100年時代を見据え、健康寿命を延伸するため、高齢者の予防・健康づくりの推進が重要であることから、高齢者が要介護状態等となることの予防又は要介護状態等の軽減若しくは悪化の防止を目的して介護予防事業が全国各地で展開されている。介護予防事業では、単に高齢者の運動機能や栄養状態といった個人の機能改善だけでなく、心身機能の改善や環境調整などを通じて、個々の高齢者の生活機能（活動レベル）や参加（役割レベル）の向上をもたらし、それによって一人ひとりの生きがいや自己実現のための取り組みを支援して、生活の質（QOL）の向上を目指している。

静岡市においては、静岡市版介護予防体操「しぞ～かでん伝体操」に自主的に取り組む市民グループや定期的に「しぞ～かでん伝体操」を行う活動スペースがあり、約160箇所、3,600人の市民が介護予防に取り組んでいる。しかしながら、新型コロナウイルス感染拡大により、不要不急の外出を控える状況となり、地域で実施していた介護予防活動が休止や中止せざるを得ない状況になった。そこで、本研究では、新型コロナ感染拡大対策のため、介護予防活動の自粛を受け、在宅で生活する高齢者の心身機能に与えた影響を明らかにするとともに、感染症対策を踏まえた社会活動のあり方を検討することとした。

3　研究の内容

(1)研究方法

静岡市内の「しぞ～かでん伝体操活動グループ」を対象に、活動自粛後の活動量の変化（身体機能、生活行動、精神状態等）、継続するうえでの不安要因等について、アンケート調査を実施した。

(2)対象者

「しぞ～かでん伝体操」に継続的に取り組んでいる市民及び「しぞ～かでん伝体操」に関心のある市民

(3) 調査方法

「しぞ～かでん伝体操」の会場において、調査の概要を説明したうえで、調査票を配布し、無記名で回収した。また、静岡市地域リハビリテーション推進センターにおいて、介護予防体操ＤＶＤの無料配布を行った際に、調査の概要を説明したうえで、調査票を配布し、無記名で回収した。

(4) 調査項目

健康や新型コロナウイルスについての情報源、運動や日常生活の状況（新型コロナウイルス感染拡大前と比較して）、継続的に行っている地域活動、地域活動の必要性、利用しているICT　等

4　研究の成果

(1) 当初の計画

静岡市内の「しぞ～かでん伝体操」活動グループを対象に、活動自粛後の活動量の変化（身体機能、生活行動、精神状態等）、継続するうえでの不安要因等について、調査を実施することであった。

(2) 実際の内容（Ａほぼ予定どおり）とその理由

新型コロナウイルス感染拡大防止を受け、活動の休止及び中止するグループがあり、対象となるグループが制限されたが、新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急対策として、静岡市地域リハビリテーション推進センターにおいて介護予防体操ＤＶＤの無料配布を行った際に、ＤＶＤの受け取りに来所された介護予防に関心のある市民も調査対象に加え、調査を実施した。また、感染症対策を踏まえた地域活動のあり方を検討するため、日頃利用しているICT端末やその機能に関する項目を追加した。

写真１・２　アンケート調査の様子

(3) 実績・成果と課題

ア　活動自粛後の活動の変化

新型コロナウイルス感染拡大前（約１年前）と比べて、日常的な活動量が「減少した」69.5%、「増加した」4.0%、「変わらない」25.3%、「わからない」1.2%であった。

具体的な活動の変化をみると、「減少した」活動は、「ショッピングなどの長時間の外出」や「宿泊を伴う旅行」、「友人との会話」、「外で行うエクササイズや運動」、「趣味（体を動かす趣味）」が半数を超えていた。

また、「増加した」活動は、「テレビ視聴」、「読書」、「家事（料理や掃除など）」であった。

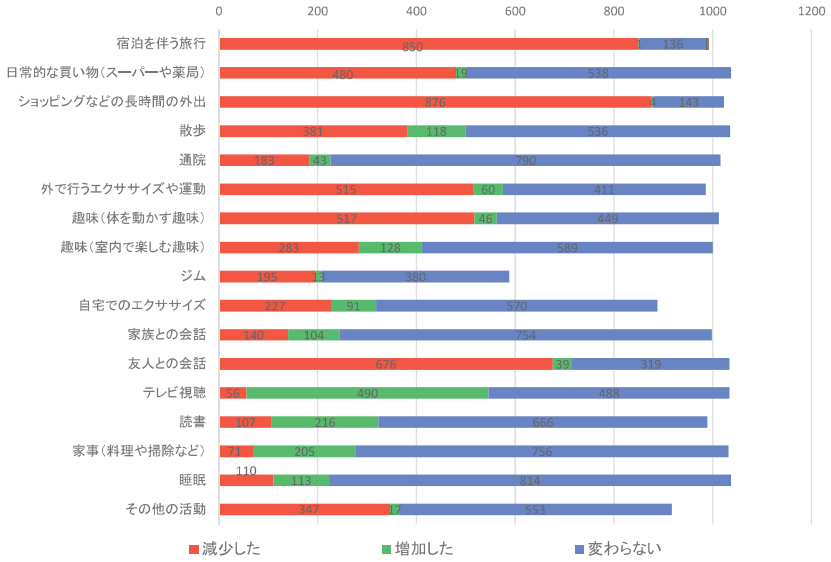


図１　日常的な活動の変化

イ　活動自粛後の身体及び精神の不調

新型コロナウイルス感染拡大前（約１年前）と比べて、「身体的な不調」を感じる人が42.0%、「精神的な不調」を感じる人が32.8%であった。

身体的な不調として、「筋力の低下」が最も多く、次いで「目の疲れ」、「腰痛」であった。また、精神的な不調として、「不安を感じる」が最も多く、次いで「やる気が起きない」、「集中力が続かない」であった。

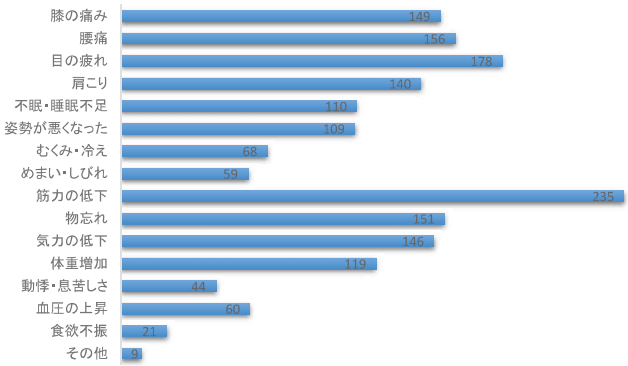


図２　身体的な不調

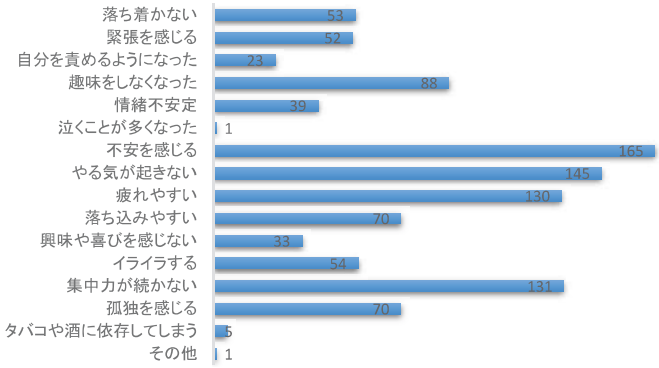


図３　精神的な不調

ウ　不調への対策

身体及び精神的な不調に対して、継続的に対策を行うことができた人は67.3%、できなかった人は20.6%であった。対策を継続的に行えなかった理由として、「マンネリ化してつまらなくなった」、「一人では頑張れなかった」、「やる気になれなかった」、「自分にあった対策が分からなかった」などの回答が挙げられた。

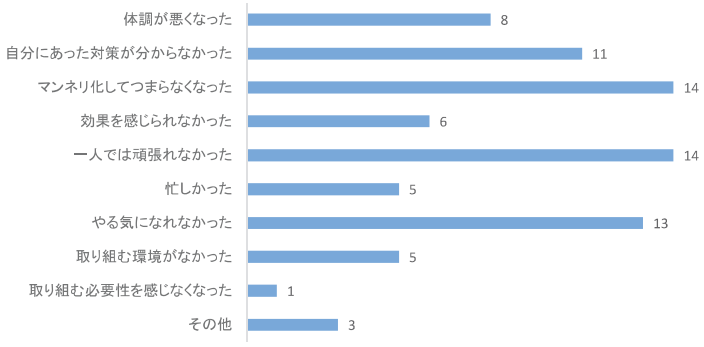


図４　継続実施が困難な理由

エ　利用しているICT端末

日頃利用しているＩＣＴ端末は、「スマートフォン」が最も多く、半数以上の人が利用していた。次いで「パソコン」、「フィーチャーフォン（ガラケー）」であった。また、ＩＣＴ端末で利用している機能として、「メールの送受信」が最も多く、次いで「ＬＩＮＥ（ライン）」、「カメラ機能」、「インターネット検索」であった。

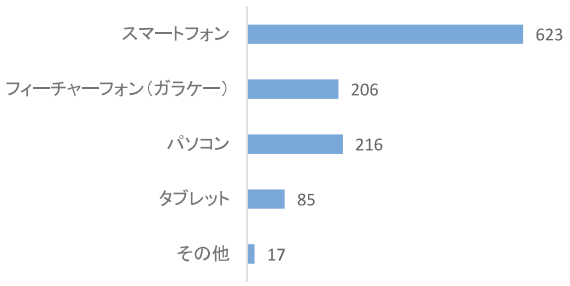


図５　利用しているＩＣＴ端末

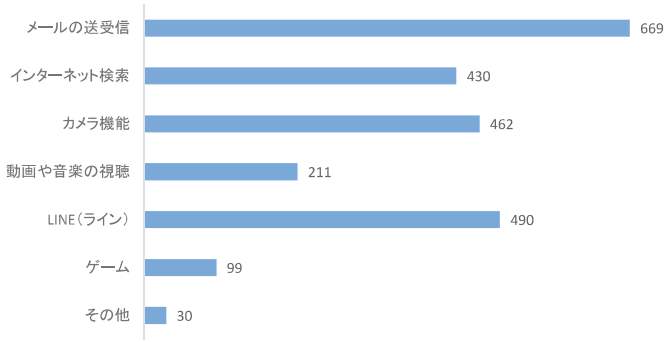


図６　利用している機能

写真３　学生による検討の様子

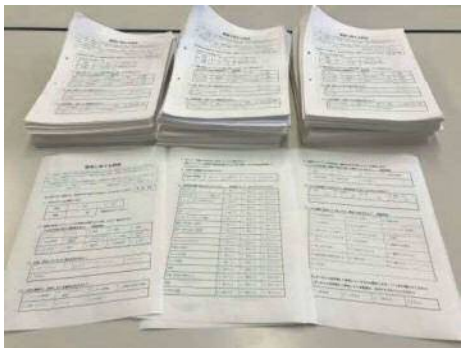


写真４　使用した調査票

5　地域への提言

活動自粛により、運動や趣味活動などの室内外での体を動かす行動や会話（コミュニケーション）の減少が顕著であり、それに伴う不調に対し、個々人で継続的に対策を行うことが難しい状況がみられているため、日頃の活動も含め、個々人の活動意欲を維持・向上し、継続的に取り組めるようなアプローチが求められる。アプローチの方法としては、調査結果から約半数以上の市民がスマートフォンを利用しており、ＬＩＮＥ（ライン）やインターネット検索などの機能を比較的活用している状況がみられたことから、多世代の人材活用による機能やアプリの利用促進を含め、ＳＮＳを取り入れた情報やコンテンツの提供も必要と思われる。こうした取組は、当事者だけでなく、高齢者を取り巻く家族や友人等からの間接的な働きかけにも有効と思われる。

6　地域からの評価

調査結果のデータに加え、自由記述にいただいた多くの市民の意見からコロナ禍における高齢者の心身機能の状況や健康及び生活、地域活動に対する意識を捉えることができ、個々の心身機能や活動意欲を高めていくアプローチをより一層展開していく必要性を感じた。今後も様々な制約が伴う状況は続くと思われるが、高齢者の潜在的意識や機能・能力を引き出しつつ、人や地域とのつながりを意識しながら健康な生活が維持できるよう新たな取組も検討していきたい。

成果報告書

認知症ケア推進センターの有効活用に関する研究

静岡県立大学 経営情報学部 教授　東野定律
経営情報学部 3年　石井利奈
経営情報学部 2年　小林明日香

１．要約

現在、認知症高齢者の増加は日本のみならず、世界各国において共通の課題となっている。我が国においても、軽度認知障害（Mild Cognitive Impairment；以下MCI）の人数を含めるとその数は約400万人と推計されており、65歳以上高齢者の約７人に１人が認知症と見込まれている。

団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に、住み慣れた地域の中で自分らしい暮らしを続けることができるような体制を作る地域包括ケアシステムの構築の中においても、認知症の方やその家族の暮らしを支えるサービスが多方面に展開され認知症の高齢者に対する支援体制整備がなされるとともに、認知症の発症を予防し、認知症になっても地域で過ごせるような「共生」と「予防」を両輪とした施策が推進されている。

2019年6月に策定された「認知症施策推進大綱」では、認知症の発症を遅らせるとされている運動不足の改善、生活習慣病の予防、社会参加による社会的孤立の解消や役割の保持など、予防に関するエビデンスの収集・普及、認知症への正しい知識と理解に基づいた予防を含めた認知症への「備え」としての取組に重点を置き、１.普及啓発・本人発信支援、２.予防３.医療・ケア・介護サービス・介護者への支援４.認知症バリアフリーの推進・若年性認知症の人への支援・社会参加支援５.研究開発・産業促進・国際展開の５つの柱に沿って施策を推進することとなっている。

一方、静岡市においては、令和2年3月末現在で、25,000人を超えており、65歳以上の高齢者の9人に一人が認知症である現状の中で、市が進める「健康長寿のまちの推進」の一環として、認知症の方やその家族への総合的な支援を行う中心拠点、「静岡市認知症ケア推進センター”かけこまち七間町”」が葵区七間町に令和2年10月31日にオープンし、健康長寿や生涯活躍のまちづくりだけでなく、移住支援や人口減少対策、経済効果、中心市街地活性化も期待する地方創生の取組のモデル地区の新たな施設として加わり、認知症に関する困りごとの相談対応や、脳の健康度、認知症に関する知識の普及啓発の役割を担うことになった。今後、センターの期待される役割としては、認知症高齢者の健康度や認知症予防効果の研究に取り組むとともに、健康産業（食品の開発や運動、趣味活動）と連携して認知症予防を進めていく認知症支援拠点の設置としての機能が求められるところである。

本研究では、静岡市において設置された「静岡市認知症ケア推進センター”かけこまち七間町”」において今後、求められる機能や展開する効果的な事業開発を主眼とし、オープンした「静岡市認知症ケア推進センター”かけこまち七間町”」に来訪した訪問者に対するアンケートを実施した。

研究の結果、静岡市において設置された「静岡市認知症ケア推進センター”かけこまち七間町”」は、認知症の正しい知識を得ること、利用者自身の状態を把握するための取り組みに関する関心が高く、地域の中での認知症普及啓発の拠点としての機能に対する期待が大きいことが明らかになった。一方で、センターで展開されている内容に関しての周知など情報発信については十分ではないこと、地域の中に存在する拠点として、これから多方面にわたる人々に認知症高齢者への理解や情報の発信が必要であること、認知症に関連する機関や施策などの情報発信、家族を含めた認知症への支援環境の整備の機能が必要であることが示された。

２．研究の目的

本研究では、葵区七間町に令和2年10月31日にオープンした「静岡市認知症ケア推進センター”かけこまち七間町”」において、市が進める「健康長寿のまちの推進」の一環として、認知症の方やその家族への総合的な支援を行う中心拠点がどのように機能すべきか、今後求められる機能や展開する効果的な事業開発における基礎資料の収集を目的とした。

３.研究の内容

静岡市において認知症予防を進めていくで、この静岡市に設置予定である認知症支援拠点を今後どのようなものにしていくのか、より多くの利用者を募るにはどのような内容を提供していくべきか、認知症予防を進める運営体制として現状ではどのような課題があり、改善が求められるのか等、事業の具体的な中身について、具体的な検討を行うために、本年度は以下の2点の内容を展開した。

（１）静岡市における認知症の予防に関する実態調査報告書の分析

2019年11月に静岡市が実施した市内の40歳から74歳までの要支援・要介護の認定を受けていない男女5,000人に対する郵送調査の結果を概観し、アンケート調査の項目内容の検討を行った。

（２）「静岡市認知症ケア推進センター”かけこまち七間町”」の調査データの分析

「静岡市認知症ケア推進センター”かけこまち七間町”」のオープン時である令和2年10月31日から収集しているアンケート調査の結果を分析することから、認知症支援拠点に期待されている機能の検討を行った。検討事項としては、認知症に関する情報として欲しい情報は何か、情報を入手する手段、日常の相談相手、センターの情報の入手手段、利用した理由とリピート利用の要因など、効果的な拠点として機能していくための基礎資料を収集した。

４.研究の成果

(1)当初の計画

当初の計画では、認知症支援拠点のオープンとそれ以降にアンケート調査を実施し、認知症支援拠点に期待されている機能の検討、拠点における今後必要な具体的なコンテンツ内容について検討することであった。

(2)実際の内容（Ａ：ほぼ予定どおり）とその理由

予定より若干遅れは出たものの、令和2年10月31日に「静岡市認知症ケア推進センター”かけこまち七間町”」が予定どおりオープンし、令和2年10月～令和3年2月にかけて静岡市健康長寿局地域包括ケア推進本部の協力のもと来訪者向けのアンケートを実施することができ、認知症支援拠点に期待されている機能の検討、今後必要な拠点のあり方について検討することができた。

(3)実績・成果と課題

研究で得られた結果についてまとめると主に以下の通りである。

① 認知症と周辺情報についての認識と課題

認知症についてのイメージを尋ねたところ、・周囲の負担が大きい・自分の意志ではどうにもならない・加齢にともなってだれにでも起こり得る・早期発見や生活習慣に気を付けたいという意見が寄せられる一方で、・漠然とした不安を感じる・よく分からないといった意見もあった。また認知症に関連する機関や施策について知っているものを尋ねたところ、地域包括支援センター以外の認知度は比較的低いことが示された。さらにセンターを利用した理由を尋ねたところ、「認知症について知りたい」が最も多く、次いで「認知症の人への接し方を学びたい」「通りすがり」が同数、そして「認知症関連の相談」と「その他（支援関連、自分の検査等)」という結果になった。再度利用したい機能については、多いものから「認知機能チェック」、「勉強会・講演会・セミナー」、「相談窓口」、「健康度チェッ

ク」、「DVD・書籍の閲覧」の順となっており、理由としては・不安・勉強したい・自分と周囲の為・小さなことでも相談できる気軽さが良いということが主に挙げられていたことから、センターの利用について認知症の知識を深めたいという理由が大きいことが示された。

以上の結果と昨今の状況を鑑みるに、認知症とその支援体制について、今までの広報に加えて情報通信手段も活用した情報発信が求められるだろう。また認知症に関する情報の浸透を目的として、街中の拠点としてのセンターの認知度向上と、センターでの実施内容を市民に広める工夫が必要だといえる。

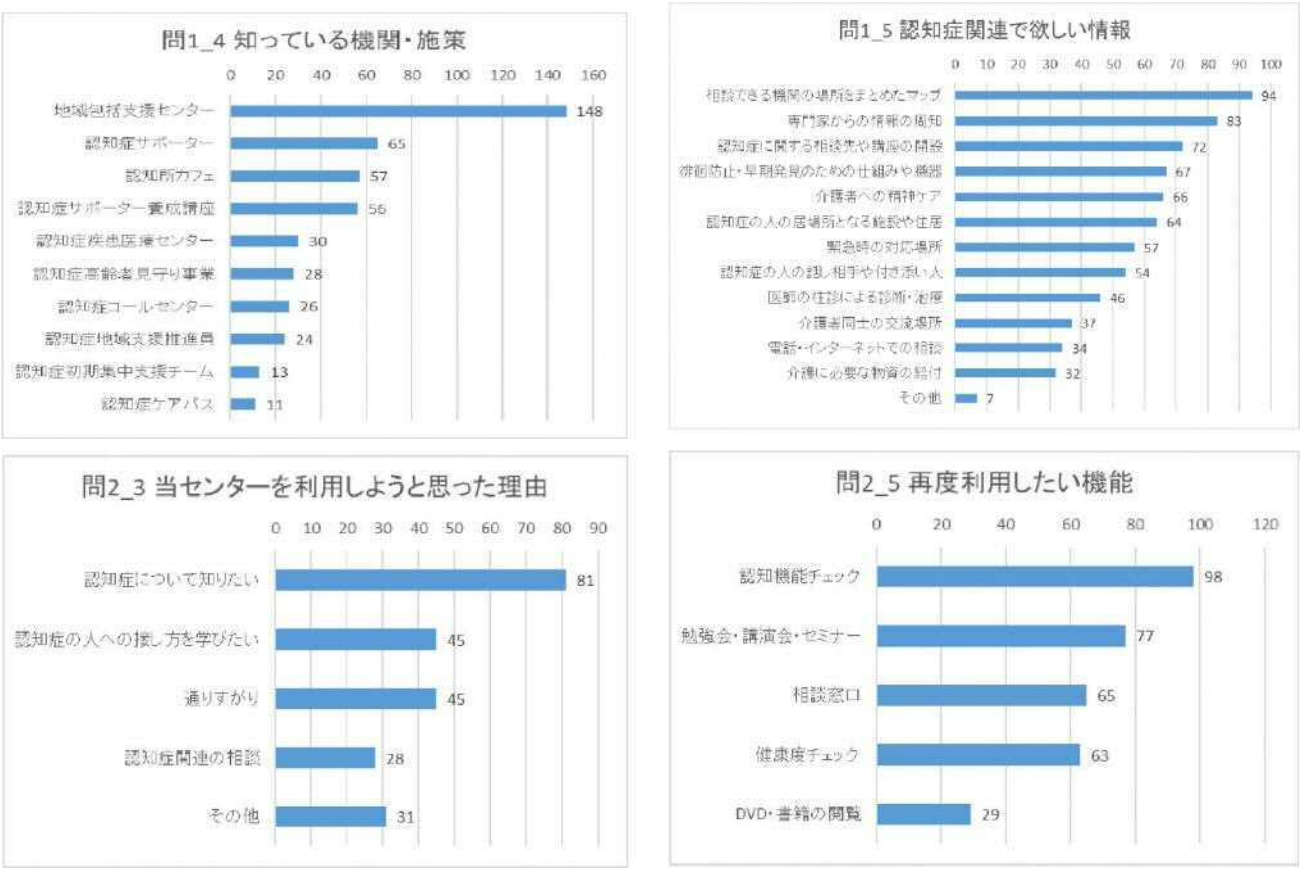


図1　「静岡市認知症ケア推進センター”かけこまち七間町”」の調査結果の一部

② 認知症支援拠点に求められる機能の検討

「静岡市認知症ケア推進センター”かけこまち七間町”」の調査で出てきたコンテンツに関する主な意見をまとめた。

認知症関連で欲しい情報を尋ねたところ、認知症についての知識や支援の内容が多く求められており、また介護者へのケアや居場所も必要とされているといえる。その他センターの内容の充実を図るための意見としては、・認知症の有無や進度を判定する機器・ネット相談・実例（認知症改善、順調な在宅介護、順調な遠距離介護）・経済的負担額・施設の情報（パンフレットや入居に必要な金額、近隣の施設や交流場所等）・認知症予防の講習・地域会議への出張という意見が得られたことから、認知症の正確な知識と対応が求められており、それらの情報を備えた拠点の必要性は高いと推察される。

またセンターに期待される役割として、・交流の場（世代間、支援者同士の話し合い、認知症の人や付き添いの人の居場所等）・初めての人でも入りやすくしてほしい・カフェ・他機関と連携したものというような意見が得られ、高齢者とその支援者の利用に加えて、認知症について関心の薄かった者でも利用しやすくなるような、幅広い世代の者にとって身近な拠点であることが求め

られているといえる。

以上より認知症高齢者と共生していくためには、認知症知識の普及啓発を行いつつ、まちなかの拠点として地元の産業を巻き込んだ取り組みが必要となるだろう。

(4)今後の改善点や対策

本研究の結果から、今回新たにオープンした認知症支援拠点のように、地域の中で認知症について理解できる拠点の必要性について高いことが明らかになったが、一方で地域包括支援センターの認知度に比べ、認知症の関連機関、認知症施策ついての情報の認知度は低く、まだまだ認知症に対する情報の浸透が必要であることも明らかになった。

また、今回の課題として、街中にある支援拠点ということから、地元の産業界をいかに巻き込み認知症の理解を進めていくことができるのか、これまで作業部会等で検討してきた内容を踏まえ、認知症への理解促進の取り組みだけではなく、今まで関心がなかった人などが支援する立場にする機会の創出についても期待される。

地域共生社会が話題となる中で、認知症高齢者と共生していくための機会を増やす取り組みとして、認知症への正しい理解の浸透と、だれもが経験する内容して情報を共有し、認知症の為ということにとどまらず、認知症を知ったきっかけとして健康的な生活を推進していくという観点からの地域のかかわり方について情報発信できる方法について今後検討していく必要がある。

図2「かけこまち七間町」オープン時の様子①

図3「かけこまち七間町」オープン時の様子②

５. 地域への提言

静岡市が昨年度末に実施した認知症支援拠点に関する市民への調査結果からも明らかであるが、認知症への正しい理解が浸透しているとはまだまだ言い難い。

高齢者自身の認知症予防も重要だが、それを支える家族をはじめとした支援者の相談などに対応してほしいという意見もあり、幅広い世代や対象を想定した拠点機能が求められる。

また、昨今の状況を考えると、終息の見通しがつかず、感染症拡大の懸念がある中で、なかなか人を収集した情報の拠点として、機能することが困難となることも考えられ、情報通信手段などを活用した情報発信の機能などが今後求められるのではないかと考えられる。

６. 地域からの評価

地域の中で認知症支援の拠点ができたことに対する満足度については、概ね高い評価を得ていること、気軽な利用ができそうなことなど期待も大きいことがアンケートの結果からも示されているが、認知症に関連する困りごとの相談対応や、認知症に関する知識の普及啓発の役割を強化するためにも、センターで実施されている内容を市民に明らかにし、センター自体の認知度を高め、市民に対して身近な拠点、初めての人が利用しやすい場所になるような工夫が必要であることが示された。

（成果報告書　記載方法）

静岡県立川根高等学校の魅力化向上

静岡県立大学 薬学部 分子病態学分野
教　　員：講師　刀坂泰史
参加学生：矢部晴海（薬学部5年生）

（以下本文）

1. 要約

川根高校では学生数の減少を改善するため「川根留学生」制度を立ち上げ、県内および県外から川根留学生を募集している。そこで多くの生徒から選ばれる高校となるよう、魅力向上を図り、高校荏続による川根地域の活性化を目指している。そこで川根地域・川根高校より大学との連携の企画提案と実施について提案をいただき、協力のもと本プロジェクトを実施した。

上記目的のため、静岡県立大学薬学部分子病態学分野の提案概要は「薬学部教員および薬学部生が高校生と一緒に取り組む実験実習授業を行い、現役高校生の理解意欲向上、県内大学および医療系学部への進学意欲向上に貢献する」ことを提案した。本プロジェクトの実施により中学生へアピールできる、魅力向上・ブランド化に貢献する。

川根高校理科教諭との打ち合わせを経て、高校生物の時間の1コマを高校生物の範囲を超えた実習を実施した。具体的には血圧測定と血圧変化を体験し、血圧変化のメカニズムを学ぶ実習である。砂川助教および薬学部5年生の学生と協力し、講義から実習を実施した。高校生には少し難しい内容を含んだが、実施後に川根高校教諭との話より学生の理解度も十分であり、本実習は下記の点で有意義であったと考える。

・大学（薬学部はじめ医療系学部）で学ぶ内容に触れることで、大学での学びにリアリティがでることで学習意欲が向上する。
・進路選択（進学、学部選択）に有意義である
・高校の学習範囲を踏まえての実習であり、高校学習内容の理解も深まる
・静岡県立大学を身近に感じることで、進学意欲が向上した

以上の内容より、川根高校生徒にとって有意義な実験実習授業であり、本プロジェクトの目的を達成できたと考える。最終的な目標である高校のブランド化については短期的には難しく、卒業生の進路や本プロジェクトを継続することで長期的な視野で考える必要があり、継続的な実施が望ましいと考える。

2. 研究の目的

学生数の減少により、高校存続が危惧される状況を鑑み、平成 26 年度から「川根留学生」制度を立上げ、県内全域を対象に生徒事集を開始した。平成30年度からは募集対象を県外にも拡大し、今年度、全校生徒数132名のうち71名、約半数以上が川根留学生になった。これまで以上に留学生または川根地域〈高校連携中学3校〉の生徒からも選ばれる高校となるよう、魅力向上を図り、高校存続による川根地域の活性化を目指す。

上記目的のため、静岡県立大学薬学部分子病態学分野の提案概要は「薬学部教員および薬学部生が高

校生と一緒に取り組む実験実習授業を行い、現役高校生の理解意欲向上、県内大学および医療系学部への進学意欲向上に貢献する」ことを提案した。本プロジェクトの実施により中学生へアピールできる、魅力向上・ブランド化に貢献する。

3．研究の内容

川根高等学校の魅力向上･ブランド化を目的として､高校生を対象とした授業連携･実験実習を行う。薬学に関する実習を行うことで、学習内容のより深い理解、大学研究への理解と進学意欲向上、また薬学・医学領域への興味を持ってもらうことで学生の進路決定に重要な機会となると考える。静岡県立大学との密な連携をとっていることは県内大学への進学を目指す高校生にとってアピールにもなり、魅力向上につながると期待する。

具体的提案としては､｢薬学部教員および薬学部生が高校生と一緒に取り組む実験実習授業｣である。当教室は医学薬学生物学を中心に研究、さらに大学教育を担当しているため、高校生が学習した内容を中心に応用発展的な課題について取り組む。さらに以降、継続的に授業連携を実施することで定着化、ブランド化につながると考える。″

4．研究の成果

(1)当初の計画

血圧とは、心臓のポンプ作用によって全身に血液が送り出されるとき、血管の内壁にかかる圧力のことで、心臓が収縮したときの血圧を最高血圧（収縮期血圧)、心臓が拡張したときの血圧を最低血圧（拡張期血圧）という。高血圧を発症すると脳卒中、心筋梗塞、心不全、慢性腎臓病といった疾患の発症リスクが増大するため、定期的に血圧をモニタリングすることは大切である。

血圧は疾患以外にも運動、温度変化、体位変換、深呼吸といった要因により生理的に変化する。本実習

では血圧測定法の体得と合わせて、生理的な要因で変化する血圧の測定及び、血圧変動の作用機序を考察する。

(2)実際の内容（Ａは予定どおり、Ｂは一部修正、Ｃは中止など）とその理由
Ａ：予定通り実施した。

(3)実績・成果と課題
高校2年生16名のクラスを対象に1コマ（50分）の講義と実習を行った（前項写真参照)。川根高校理科教諭との打ち合わせを経て、高校生物の時間の1コマを高校生物の範囲を超えた実習を実施した。具体的には血圧測定と血圧変化を体験し、血圧変化のメカニズムを学ぶ実習である。砂川助教および薬学部5年生の学生と協力し、講義から実習を実施した。高校生には少し難しい内容を含んだが、実施後に川根高校教諭との話より学生の理解度も十分であり、本実習は下記の点で有意義であったと考える。
・大学（薬学部はじめ医療系学部）で学ぶ内容に触れることで、大学での学びにリアリティがでることで学習意欲が向上する。
・進路選択（進学、学部選択）に有意義である
・高校の学習範囲を踏まえての実習であり、高校学習内容の理解も深まる
・静岡県立大学を身近に感じることで、進学意欲が向上した

(4)今後の改善点や対策
実習実施後、高校教諭、川根本町教育委員会、大学の3者にて改善点と対策について協議した。実施内容・講義については大きな問題はなく、高校生の満足度も高く、継続して実施することで長期的目的が達成できると考えられる。最も大きな課題は高校授業との兼ね合いと日時調整であり、1コマでは時間が不足したことから次回以降は2コマ連続での実施を検討することとした。2コマでの実施が可能となれば、講義および実習結果の考察の時間を十分に取ることができ、より充実した内容とできる。
さらに、2コマ実施で時間の余裕を持つことで、大学生が実験などでメンター的な役割で関わり、コミュニケーションをとる機会を増やしていき、県内大学および医療系学部への興味関心の向上を期待したい。

５．地域への提言
「川根留学生」制度は一定の成果を挙げており、地域活性化において大変素晴らしいプロジェクトであると考える。静岡県立大学はCOC事業をはじめ、地域貢献を重要事案として進めており、静岡県内市町村や企業の魅力化向上のために貢献している。高校の魅力は多様であり、またこれまでの歴史があるため新たなブランド化は短期間では困難であると考える。今回のような大学との連携プロジェクトを継続することで、高校生の進路選択（特に県内進学希望、医療系学部志望者の増加）に寄与し、次に続く学生の高校選択に影響を与えることができると考える。またこのように高校が魅力的になることで地域そのものの魅力向上、地域医療の充実、など川根地域の活性化につながると期待する。

６．地域からの評価
高校の授業内で、大学と連携した授業実施を行うのは初めての取り組みであったが、オンラインでの高校教諭・大学間での打合せなどを重ね、授業の準備ができた。高校教諭からは、自分たちだけではで

きないより専門的な知識提供や解説による授業や、高校では用意できない実験器具などを活用した実習により、生徒の興味関心を高められたことに、高い満足度を得られた。今回は初めての試みで、限られた授業の中で実施したが、成果を感じられたことから、時間数を確保しより大学との連携を強め充実した授業実施を、継続して行いたいという意向を受けた。

（成果報告書　記載方法）

人と理化学の融合分析により「しずまえの魚」の美味しさを可視化する

東海大学 海洋学部 後藤ゼミ（食品工学研究室）
教　　員：教授 後藤慶一
参加学生：西村響揮、荒木和哉、水野加寿樹、上野夕都、新居田祐介

１.要約

清水名産マグロをテーマに、目利きが特別美味しいマグロ（スペシャルマグロ）と、一般的なマグロの食味の「違い」を、客観的、かつ消費者が共感できるような可視化図として表すことを目的とした。メバチマグロの中トロについて、スペシャルマグロと一般物を総計19個体分入手し、それらの刺身について官能評価と、理化学分析を行い、多変量解析により図示した。なお、官能評価は静岡市の経済局農林水産部水産漁港課およびしずまえ振興協議会メンバーと連携した。その結果、スペシャルマグロは、一般的なマグロや特徴が強いマグロと区別され、脂味、旨味、甘味など好印象の項目がバランスよく備わっていることが分かった。また、理化学分析の結果をもとにスペシャルマグロの定義を策定した。この定義が検証できれば、根拠をもってスペシャルマグロを販促することが可能となる。

２.研究の目的

清水港は冷凍マグロの水揚量が日本一の漁港であり、総供給量は日本全体の32.8％（2019年）を占める。水揚取扱数量では、清水は9万5千t（2020年）と、日本で5、6番目の水揚げされていないが、水揚取扱金額は、清水は716億円（2020年）で、日本で1番目という結果になっている。これは、単価の高いマグロを中心に多く取り扱っているため、取扱金額においても日本一の漁港なのである。中でもメバチマグロに関しては、清水港での取扱量が最も多く、魚種別水揚比率は42.4％（2020年）を占める。ところが、大間のクロマグロなどに比べ、清水のメバチマグロは知名度が低くブランド力がない。そのうえ、水っぽくあっさりとした食味の印象のため、おいしいマグロとして認知されていない。しかし、メバチマグロの中にも脂が程よくのった、一際おいしいとされている個体が存在すると、清水港の船主の人や市場の人、仲卸の方々が口を揃えて仰っている。清水港では、メバチマグロの物流量が多いため、スペシャルなメバチマグロに当たる確率も高いと考えられる。

そこで、メバチマグロを題材に、清水でスペシャルなメバチマグロの可視化を行う。清水のスペシャルマグロを定義し、ブランド化することができれば清水の地域活性化につながる。清水のスペシャルなメバチマグロをブランディングするため、一般消費者への指標を作成することを今回の目的とする。

３.研究の内容

一般的な冷凍メバチマグロと特別おいしいと推定される冷凍メバチマグロを事業者から入手し、プロの調理人（割烹若杉）により刺身を調製する。この刺身を静岡市の経済局農林水産部水産漁港課員、しずまえ振興協議会メンバー、学生および教員で評価する。別途、大学にて理化学分析を行う。官能評価の結果と理化学分析の結果を集計し、多変量解析の主成分分析を行い、可視化図を作成する。官能評価の結果から、どのマグロがスペシャルなメバチマグロであるかを決め、可視化図中で示す。また、理化学分析の結果をもとに、スペシャルメバチマグロの成分範囲を求め、定義を策定する。

４.研究の成果

(1)当初の計画

事業者から10個体分のメバチマグロ（2～5kg/個体）を入手し、これらについて官能評価と理化学分

析を行い、得られたデータを用いて可視化を行う。

(2)実際の内容（Aは予定どおり、Bは一部修正、Cは中止など）とその理由

評価：A

理由：事業者から入手した一部のマグロの質が悪く、追加試験をすることとなった。また、マグロの熟成が不十分で本来の美味しさが出なかった場合があり、これについても追加試験をすることとなった。しかしながら、総計19個体の分析を行うことで、スペシャルなメバチマグロを可視化、定義することができた。

(3)実績・成果と課題

研究に使用したメバチマグロの情報を右の表に示す。A､BおよびCは各5個体(総計15検体)、Dは3個体（4検体）を使用した。官能評価については、色調、香り、食感、味の総計38項目について評価した。1検体について12名で評価した。理化学分析については、コラーゲン、タンパク質、脂質、水分､。灰分、炭水化物、pH、塩分、色調、物性について調査した。多変量解析の主成分分析は2σ法で異常値を除去、また検体間で特徴がない項目を除去して行った。また、検体Cは熟成不良のため、解析には用いなかった。その結果を図1に示す。また、官能評価の結果、スペシャルマグロに値するといった検体はA2、A3、A4と決定され、それを図1中に示した（青丸)。図中、右側には美味しさに寄与する項目が集まり、左側には不味さに寄与する項目が集まった。検体D2のように特徴が強すぎるものは、逆に美味しい評価にはならなかった。

	漁場	緯度・経度	漁期	サイズ（kg）	全長（cm）
A	太平洋（チリ沖）	S30～29 W85～81	2018年6月	約32	約95
B	太平洋（チリ沖）	S29～35 W84～80	2018年7月	約31	約95
C	太平洋	N13～17 W160～170	2019年9月5日～11月24日	6.0※	-
D	-	S2.8 W95.6	-	D1：95 D2：89 D3：51	D1：130 D2：120 D3：110

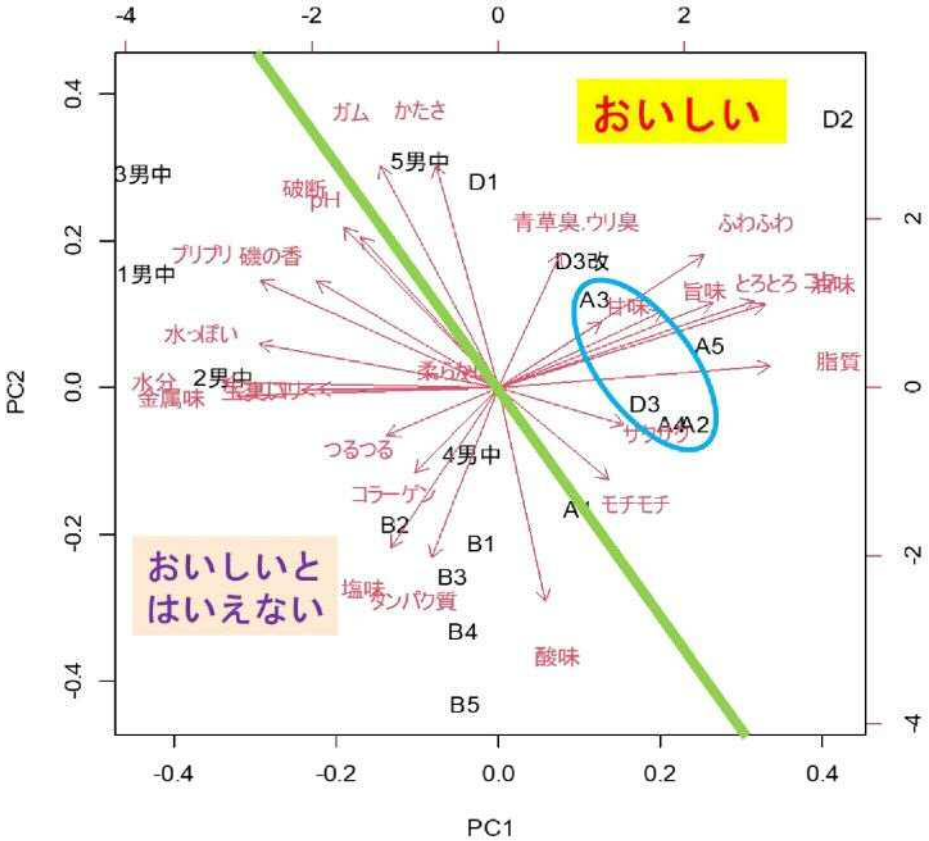


図1　A、B、Dおよび男中の主成分分析図

主成分分析の結果をより消費者にわかりやすくした図を図2に示す。一連の結果から、スペシャルメバチマグロは、**「ほどよく脂がのり、甘みや旨味が感じられ、臭みや水っぽさがなく、歯ざわりが少しあるメバチマグロ」**と表現できた。この表現を数値として表すと、図3、図4、図5のようになる。特に脂質、タンパク質および水分がスペシャルメバチマグロには重要な項目であることが分かった。具体的にそれらを示すと、脂質：13.9±0.6%、タンパク質：24.2±0.3%、水分：63.7±1.7%となった。この範囲をスペシャルメバチマグロの定義と策定した。

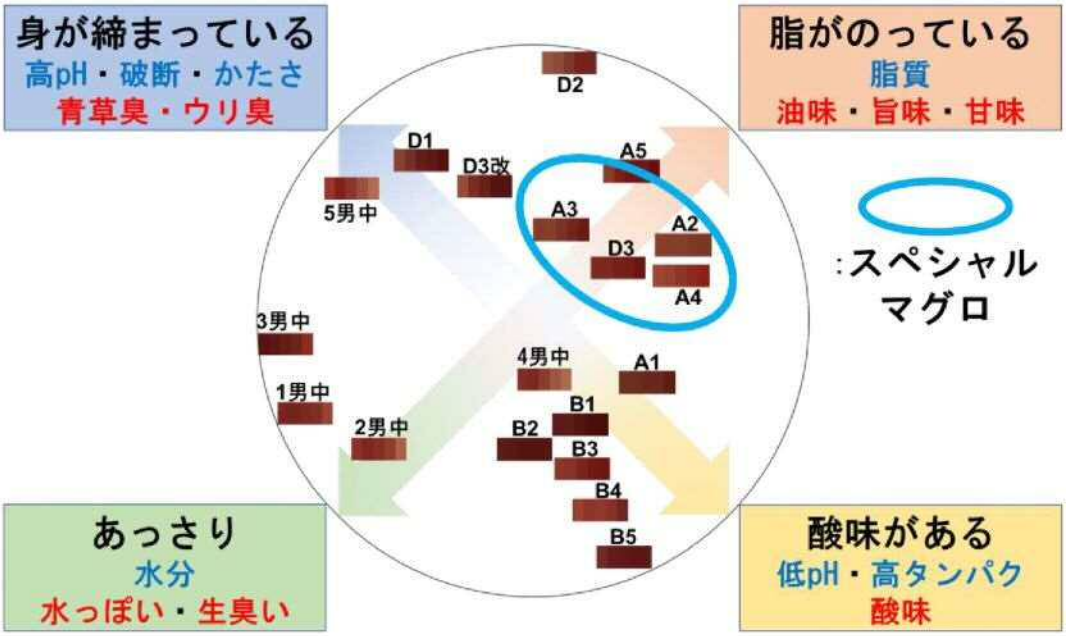


図2　A、B、Dおよび男中の可視化図

（注）青文字で示したのは理化学分析の項目、赤文字は官能評価の項目

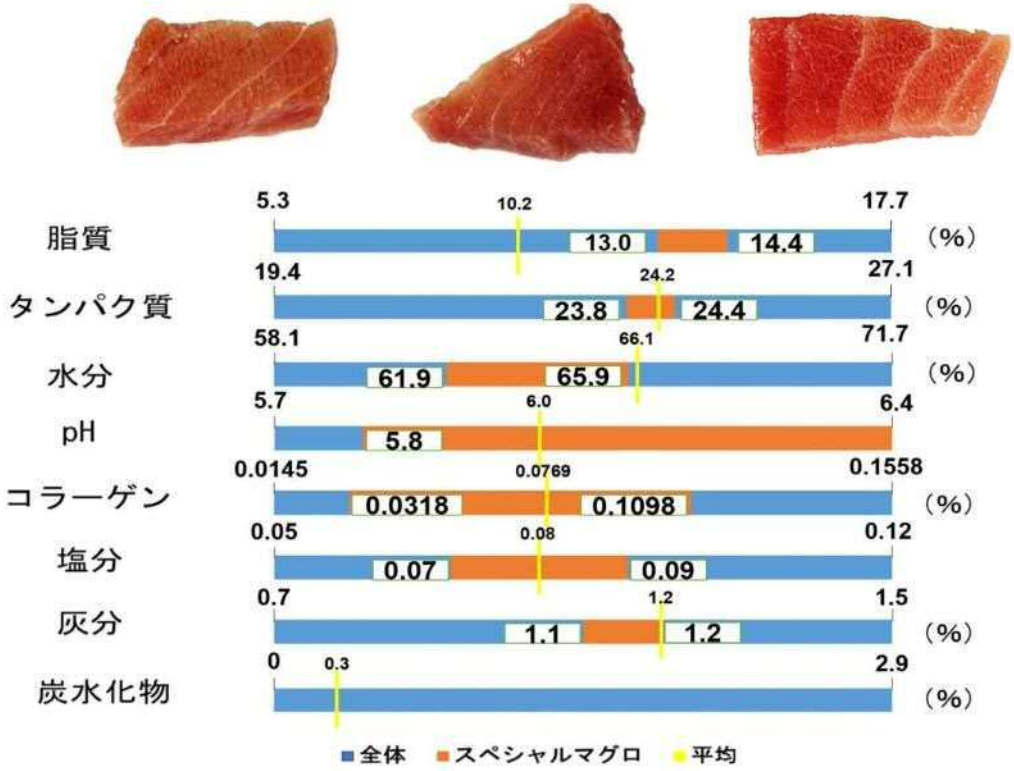


図3　スペシャルメバチマグロの刺身の写真と成分範囲（オレンジ色）

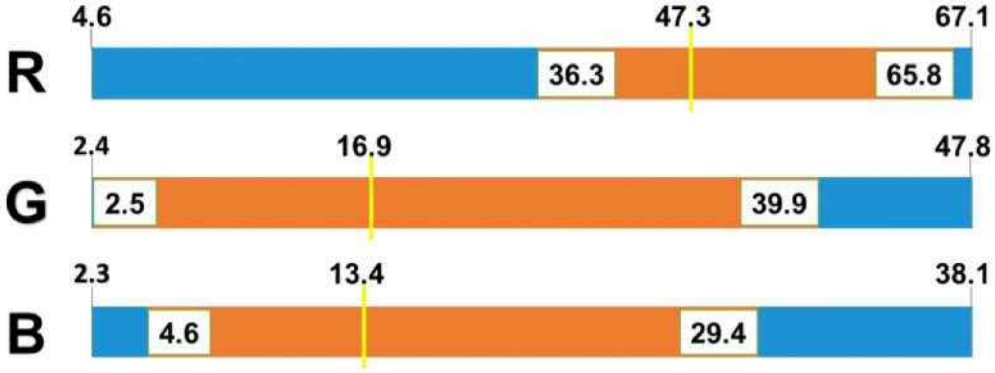


図4　スペシャルメバチマグロの刺身の色調範囲（オレンジ色）

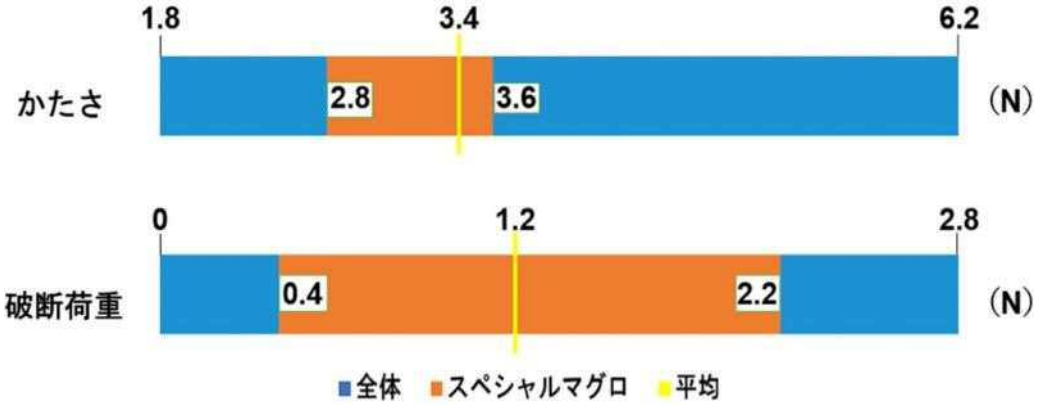


図6　スペシャルメバチマグロの刺身の物性範囲（オレンジ色）

(4)今後の改善点や対策

マグロの解凍方法と時間は大きく刺身の食味に影響するため、調理人任せではなく、仲買人にも協力してもらい、官能評価の時間に合わせた解凍を依頼する必要がある。この点に関しては、既に事業者により調整が完了している。

官能評価の項目について、事前にもっとしっかりと評価者間で目線を合わせておく必要があった。官能評価の実施方法に関しては、既知の情報を基に項目に具体的なニュアンスなどを加えるなど、わかりやすくする工夫が必要である。

策定した定義が本当に正しいのかを検証する必要がある。その結果が良好であれば、スペシャルメバチマグロの定義に入るマグロをブランド化し、スーパーや料理店などでプロモーション販売することが可能となる。関係者で協議を行い、プロモーションに関して具体的な策を検討してきている。

清水港は確かに水揚げ取扱金額が日本一である。しかしながら、水揚げでは一番目の銚子港の1/3、焼津の1/2程度である。駿河ブルーラインのエリアである焼津との協業により、よりPRができるのではないかと考える。

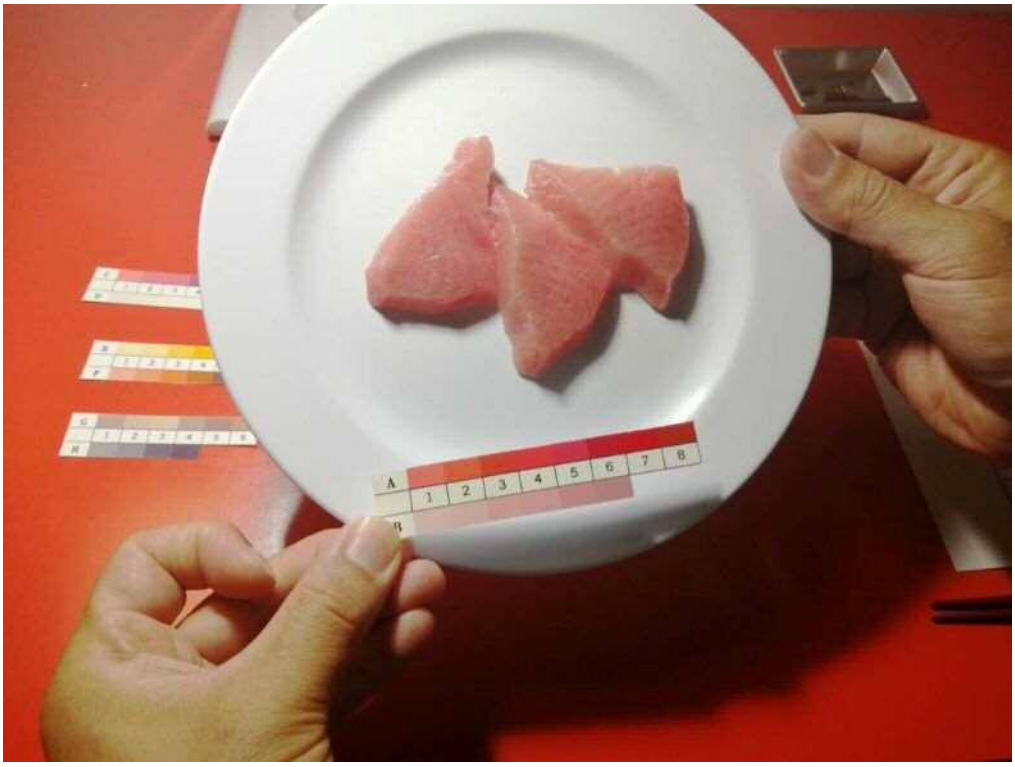
５．地域への提言

清水が日本一の水揚げ取扱金額を誇る港であることを認知し、マグロの消費を一層盛んに、かつただ食べるだけではなく、このマグロはどのような香味・食感のマグロなのかということを意識しながら食べることで、食への興味とありがたみを感じてほしい。

６．地域からの評価

客観的な評価は得ていないが、今年度得られた成果を次年度生かしていきたいとのことであり、高評価が得られたのではないかと考える。また、中日新聞と朝日新聞に掲載され、NHKでも本取り組みが紹介され、静岡県民に周知できたことは有意義であった。

官能評価風景の写真



刺身の色調測定風景の写真

刺身の物性測定、写真撮影、塩分測定風景の写真

幼児期における環境プログラムの開発に関する研究

常葉大学 健康プロデュース学部　こども健康学科
中村研究室・sun&leaf有志
教　　員：准教授　中村俊哉
参加学生：井本　優子、梶田　実希、黒川　紗椰
杉本　理緒、茂川　香歩、八木田　沙椰

１要約

保育者を対象とした環境プログラムや自然や生き物について学ぶ機会をつくるという保育の質を高めるための援助を行うことを目的として、静岡市のインターネットシステムを使用するデジタル媒体のプログラムを作成した。このプログラムは、2021年度から春夏秋冬の季節ごとにA3裏表１枚程度の量を配信予定である。季節ごとに保育現場で活用されやすいプログラムとして、春は「モンシロチョウ」、夏は「カブトムシ」、秋は「草木染め」、冬は「大豆栽培からの味噌作り」のプログラムを作成した。アンケート調査、ヒアリング調査を行い、静岡市の幼児教育現場の実態に沿った保育者に知ってほしい情報を入れるよう配慮した。

２研究の目的

本研究は、保育者を対象とした「環境プログラムや自然や生き物について学ぶ機会」をつくることで、保育の質が高めるための援助を行うことを目的としている。

生物多様性や生き物についての教材性を知りたいという保育者の需要は、すでに環境局環境創造課により明らかになっている。しかし、具体的な伝える内容やプログラム、伝える方法、伝えるタイミングなどについての調査は行われていないため、まずは保育者からのヒヤリング調査を行う。環境局環境創造課の調査結果とヒアリング調査から、静岡市の幼児教育に沿った幼児期における環境プログラムの開発を行う。2021年度に実践を促していくために、インターネットシステムを使用し配布予定である。この取り組みを通し、幼児教育現場での園内外での活動は、多くなり、園児や保護者が自然や生き物に愛着をもつことができるという成果が見込まれる。また、将来的には、静岡市民の自然環境の大切さの認識やライフスタイルの転換が図られると考えられる。そして、事業の継続や発展等が、静岡市の自然の保全活動や静岡市への愛情に繋がる効果を期待している。

３研究の内容

静岡市環境創造課の調査によると、生物多様性や自然を生かしたより深い取り組みを行いたいという声はあるが、冊子による配布であると数が限られ埋もれてしまうなどの理由の他、日常の保育、事務処理、研修等の多忙化から、紙媒体の配布は望まれていないことが分かった。そこで、時期に合わせた静岡市のインターネットシステムによるファイル配信を行うことで、環境プログラムを全園に配布できるだけでなく、必要に応じた数を印刷できるようにと計画されている。配信時期は、2021年度から春夏秋冬の季節ごとに適量だと考えられるA3裏表１枚程度の量を配信する予定である。

季節ごとに保育現場で活用されやすいと考えるプログラム作成を行った。そのため、春は「モンシロチョウ」、夏は「カブトムシ」、秋は「草木染め」、冬は「大豆栽培からの味噌作り」のプログラムを作成することにした。「モンシロチョウ」と「カブトムシ」は、保育現場のヒアリング調査により、すでに多く行われているということで、発展的な実践を多く載せ、「草木染め」、「大豆栽培からの味噌作り」

は、静岡でも染物、味噌作りは昔から行われていた文化的側面もあったため、歴史的背景も載せることにした。

４研究の成果

(1)当初の計画

静岡市は面積も広い政令指定都市のため、広域の公立、私立の園にヒアリング調査を行ってからプログラムを作成する予定だった。またプログラムを実践できるものに関しては、実践を行うこととした。

(2)実際の内容（Ａは予定どおり、Ｂは一部修正、Ｃは中止など）とその理由

Ｂ：多くの園にヒアリング調査を行う予定であったが、コロナ禍のため、学生も対面での課外活動が禁止されていたことや園も安全対策のため、対面による調査を行えないこともあった。そのため、主に文献調査とし、電話で対応していただけるところは電話でヒアリング調査を行った。

Ｂ：プログラムに関しては、コロナ禍ということと、10月から3月までの期間の研究だったため、大学内でできる取り組みを行うようにした。

＜作成したプログラム＞

①モンシロチョウ

モンシロチョウの視覚や、幼虫時の住処やフンの特徴など、人と違うところから生物多様性に繋がるような内容や科学的興味関心を促せるような特徴を記載した。また、卵から成虫までの一生とその時の保育を行うことができる配慮などを記載した。例として、サナギから成虫時になる所を見せたいときには、数日間サナギを冷蔵庫に入れ、出した後は30度程度に温めることや、サナギになった時に月日を近くに掲示しておくことで、何日で成虫になるか興味関心をもたせるなどの実践を紹介した。また、なぜモンシロチョウがアブラナ科の植物にいるかということや、モンシロチョウの幼虫に卵を産むアオムシコマユバチを紹介することで生態系理解に繋げるように工夫した。

写真1　モンシロチョウのサナギ

②カブトムシ

カブトムシは幼児教育で多く扱われている昆虫である。幼虫時の大きさで成虫の大きさが決まるという事実やカブトムシの持ち方、カブトムシが出す興奮時にお腹を使って出す音などの若い保育者にも役立てるような基本的事項なども記載した。モンシロチョウ時と同じように、サナギから成虫になる時を見せるときに実践方法なども記載した。卵から成虫時の産卵までの飼い方なども載せることで、園の中で生命の循環が実感できるような取り組みを記載した。

写真2　カブトムシの幼虫

③草木染め

縄文時代から染物が行われていると言われ、静岡でも染物は盛んであった。これは、今でも安倍川沿いに「麻機」「賤機」「服織」など布に関した地名が多く残っていることもわかることであり、具体例の一つとして紹介した。そして、なぜ染物が盛んだったかという理由の一つとして、綿は、静岡のような日照時間が長い所が栽培に適しているという地理的背景も説明した。植物によって、様々な色に染めることができる紹介とともに、幼児教育でもできる模様のつけ方や、草木染めを行うことによって終わりでは

なく、染物をした布を使ったを保育の事例も複数紹介した。

写真3　媒染

写真4　乾燥

写真5　草木染めしたハンカチ

④冬：大豆栽培からの味噌づくり

味噌は地域によって、何で発酵させるか、その他、時間、麹の量など、様々な違いによって特色が出てくる。つまりこれが地域性になるため、静岡の歴史ある相白味噌、金山寺味噌の紹介を行った。そして、食農保育として、食農保育のねらいとともに、種から行う栽培、収穫、脱穀までの方法と収穫した大豆を煮て、潰して、麹を混ぜて保存する味噌づくり、幼児でも可能と考えられる団子づくりの作り方を掲載した。大豆を種まきから紹介したのは、大豆から大豆という生命の循環を子どもたちに感じてほしいからである。

写真6　大豆の乾燥

写真7　桶につめる味噌

写真8　袋につめた味噌

(3)実績・成果と課題

計画通り、A3裏表のプログラムを春夏秋冬の4つのプログラムを作成した。コロナ禍であったことや、研究期間が10月から3月だったことで園での実践ができなかったことで、保育者や子どもたちの声を聞くことができなかったことが課題である。

(4)今後の改善点や対策

実際に作成したプログラムの活用は、2021年度からになる。保育者からの声を聞き、改善することが必要であろう。また、写真と文字だけでは伝わりにくい部分もあると考えられるため、動画などの補助資料の制作も考えられる。何をねらいとして自然を活用したり、生物を育てたりするかにより、保育者が行う環境の整え方や援助が異なってくるということを具体例を通して伝えていくことも必要であると考える。

５地域への提言

子どもたちがただ園の中で生き物の成長を見るだけの飼育をするだけでは、子どもたちの成長は限られる。生き物はその生きる環境に適することで生き続けてきた。人と他の生き物の違いを知ることやそ

の生き物の特徴について、五感を通し主体的に、考えたり、気づかせたりすることで、子どもたちは、生命に対する興味関心や探求心が育ってくる。また、昔からの静岡の地理的・歴史的要因により育まれた文化を踏まえた実践の方法として、地域の方々と一緒に教わりながら取り組んだり、地域の特色を体験したりする活動がある。このような活動を通して、子どもたちの地域への愛着や、地域アイデンティティは育まれてくる。保育者は子どもたちが考えたり、実感したり、感動したりできるように環境を整えたり、声掛けしたりすることが必要になってくる。

生き物に関しても、文化的取り組みに関しても保育者がそれぞれの教材をより深く知り、活用することで、環境の整えることや助言、援助が変わってくると考える。子どもたちが育つためのねらいを実現するための効果的な保育を行うことで、静岡の子どもたちがより素敵になってほしいと考える。

６地域からの評価

静岡市環境局環境創造課の方とは、話し合いながらプログラム作成をしてきた。作成したプログラムは2021年度から配布のため、園からの評価はこれからである。

「人生100年時代、高齢者の地域活動・社会参加を促進したい！」に関する研究

常葉大学 教育学部 生涯学習学科（猿田ゼミ）
教　　員：教授　猿田　真嗣　　講師　那珂　元
参加学生：木下奈津季、川原崎玲己、小鍋香菜、山下舞ほか
（計16名）

１．要約

高齢者の地域活動・社会参加を促進するための交流プログラムを開発・試行し、事業効果を検証することを目指したが、コロナ禍の状況の中で事業計画の策定にとどまった。その中でも、参加学生の地域課題への理解が深まるとともに、自分たちの交流ニーズを見つめ直すなど、多くの副次的効果を得ることができた。次年度以降も活動・取組を継続する予定であり、地域に還元できる成果を得たい。

２．研究の目的

本研究事業は、静岡市の地域課題（高齢者の地域活動・社会参加の促進）を解決するためのきっかけとなる交流プログラムを開発・試行し、当該事業の効果を検証するとともに、今後の継続的な事業化の可能性を探ることを目的とする。

３．研究の内容

プログラムの開発にあたっては、生涯学習を専攻する大学生（ゼミ生）の問題意識を尊重した上で、申請者の専門的知見（研究視点）による方向付けを加味する。また、静岡市によるアンケート結果など、高齢者の地域活動・社会参加の現状と課題にかかわるデータ分析、関係者（高齢者や担当課・関係施設の職員の方々など）への聴き取り調査から得られた情報なども参考にする。事業化に際しては、（コロナ禍の状況の中で）運営側ならびに参加者側の双方が無理のない形で、安全に遂行・参画することのできる規模・内容となるよう留意する。

４．研究の成果

(1) 当初の計画

研究事業は関係機関（担当課、関連施設等）と大学（学生、担当教員等）との緊密な連携・協働のもと進める。当初計画における日程は、下記のとおりである。

a）申請者と担当課との事前協議（10月）
b）静岡市の地域課題・ニーズの把握：高齢者・関係者からの聴き取り（11月）
c）大学生のニーズの把握：高齢者の知識・経験に関するアンケート調査（11月）
d）交流プログラムの企画・立案（12～１月）
e）交流プログラムの試行、事後アンケート（２月）
f）報告書の作成・実施報告（３月）

(2) 実際の内容：Ｂ（一部修正）

実際の活動・取組は**表１**のとおりである。

表１　実施した活動・取組

2020年　10月 7日	助成事業仮採択
10月26日	静岡市高齢者福祉課との事前協議
10月29日	番町市民活動センター（パネル展）見学（学生１名参加）
11月20日	連携事業ミーティング①（静岡草薙キャンパスD320：静岡市高齢者福祉課２名、教員２名、学生16名参加）
11月25日	清水船越老人福祉センター見学・インタビュー（教員・学生各１名参加）
12月 4日	連携事業ミーティング②（D320：教員１名、学生12名参加）
12月11日	連携事業ミーティング③（D320：教員１名、学生10名参加）
2021年　1月 6日	企画コンセプト案提出（学生12名）
3月 2日	連携事業ミーティング④（オンライン：教員２名、学生５名参加）
3月10日	連携事業ミーティング⑤（附属図書館：教員２名、学生４名参加）
3月18日	連携事業ミーティング⑥（附属図書館：教員１名、学生３名参加）
同日	連携事業ミーティング⑦（附属図書館：静岡市高齢者福祉課２名、教員２名、学生３名参加）

当初計画に盛り込んだa)～f)の活動の中で、最大の目標である「e）交流プログラムの試行、事後アンケート」を実施するすることができなかった。年末・年始からのコロナウイルス感染拡大状況（第３波）を受けて、約２ヶ月の間、活動の中断を余儀なくされた。もともと、活動期間が半年に満たないことに加え、この中断期間が生じたことにより、大学生の参加意欲にも少なからず影響が及び、再開後の活動に参加したゼミ生は少数に留まった。

本来、高齢者・関係者からの聴き取りなどを通して得られた課題やニーズを企画に生かすため、12月および１月の「ハッピーシニアライフ事業」に学生が参加して情報収集を行うことを想定していたが、年末からの感染拡大の状況を受けて、学生の校外活動に制限が設けられたこと、事業自体が中止となったことなども計画未遂の要因となった。また、大学生のニーズを把握するためのアンケート調査（授業内で実施予定）を計画していたが、当該授業がオンライン授業になったことなどを受けて、ワークショップを通じてのニーズ把握への変更を余儀なくされた。

以上の経過を受けて、２月には連携先（静岡市高齢者福祉課）の了解のもと、高齢者の地域活動・社会参加を促進する事業の企画立案に今年度の目標を修正し、その発表会（３月18日）をもって、研究事業としての成果報告に代えることとした。交流事業の実施に至らなかったが、高齢者・学生の双方の安全を確保することを最優先にしなければならないことを考慮すれば、やむを得ないことと総括できる。

写真１　静岡市高齢者福祉課による講話

(3) 実績・成果と課題

① 本研究事業の成果

上述のとおり、当初計画から大幅な修正・変更を迫られたが、限られた活動・取組からも、いくつかの成果をあげることができた。

第１に、参加したゼミ生の高齢者ならびに高齢者福祉に関する理解が深まったことである。11月20日の１回目のミーティング（キックオフミーティング：**写真１**）で、静岡市高齢者福祉課の職員から講話

をいただいた際には、参加学生から下記の感想が寄せられた。

・静岡市の高齢化の現状や政策について知ることができました。
・静岡市の高齢化問題は深刻である。私たちはこれから向き合っていく必要がある。
・高齢者を社会参画させる方法は思っているよりも多くあるのだと感じた。
・定年が延長し「余生」という概念から生涯現役へと変わりつつある社会において、高齢者のニーズを可視化すると、かなり多くのものが見られそうだ。
・高齢者にとって金銭的利益が出なくても、参加するやりがいがあるような事業が増えたらよい。

ここに示されるように、「高齢者の就労、ボランティア活動、生涯学習等の社会活動の促進」という地域課題に関するデータに基づく講話は、生涯学習を専攻する学生の既有知識や問題意識とも結びつき、高齢者のニーズへの的確な理解に結びついたものと考える。一方、番町市民活動センター、清水船越老人福祉センターを訪問した代表学生は、見学・聴取をもとに卒業論文を執筆し、高齢者の社会参加の課題を、①交通手段の確保、②社会参加への不安の解消、③的確な宣伝活動、の３点にまとめ考察を深めている（木下2020、p. 11）。

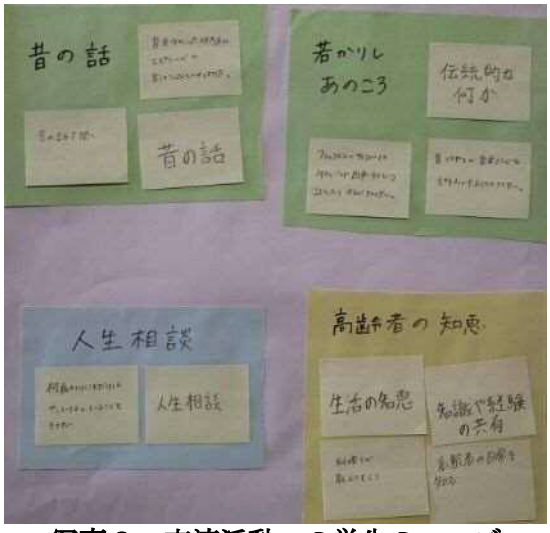


写真２　交流活動への学生のニーズ

第２に、社会参加・地域活動にかかわる地域課題や高齢者のニーズを学ぶと同時に、学生の交流ニーズについても見つめ直すことができた。既述したように、アンケート調査こそ実施できなかったものの、ラベルワークによる話し合いを通して、高齢者にかかわる学生側の意識が可視化され、自分たちの潜在的なニーズへの気づきが得られた（**写真２**）。教員からも、参考文献（堀1999）をもとに「高齢期特有の教育的ニーズ」について学術的な解説を行い、高齢者と若者の互恵的な関係性・交流の重要性に関する共通理解が形成された。

写真３　交流事業の企画立案

第３に、交流プログラムの企画立案を目的としたワークショップに取り組み、実施を想定した企画案を立てることができた（**写真３**）。ゼミ生は授業で学んだ生涯学習事業の企画立案の経験を応用し、下記のような交流事業のアイディアを生み出した（１月６日提出の企画コンセプト案より）。

・昔を思い出しながら（振り返りながら）高齢者同士の交流
・若者と高齢者間で行う運動（ウォークラリーなど）や対話（お茶会など）
・散歩を通じた高齢者と学生の交流
・高齢者から若者に知識や技術の伝承（ものづくりなどを通して交流を図る）
・オリジナル体操を作ろう！
・タイムスリップフォト（昔の写真を見てどこかを当てるクイズ。実際にその場に行って答え合わせをする）

これらをもとに、コンセプトを「健康面から笑顔あふれる交流」に絞り、スポーツ大会を中心とする交流プログラム（**表２**）を企画し、静岡市高齢者福祉課の方々を招いて成果報告を行った（**写真４**）。

表２　企画した交流プログラムの概要

項目	内容	備考（競技：目的）
人数	シニア20名前後	学生は参加者に応じて
場所	常葉大学草薙キャンパス	アリーナ、校舎
競技	準備体操 でん伝体操（創作あり）、ちゃきちゃき体操	共同創作活動 市の健康維持増進活動PR
	障害物競争（例：スプーンでホイ、玉入れ、釣り） 投てき運動（例：モルック、輪投げ、ボーリング、ボッチャ等）	体を動かす交流
	宝探し（校舎内） クイズ・ミッション	知識・知恵の習得（交流） 自己開示の機会
	創作ビンゴ	共同創作作業 頭の運動（交流）

② 本研究事業の課題

すでに述べたとおり、本研究事業の最大の課題は、交流プログラムの実施と効果の検証にまで辿り着けなかった点にある。また、企画案を練り上げる時間的な余裕がなく、計画の細部に詰めが甘い部分が散見される点も課題として残されている。

写真４　成果報告

(4) 今後の改善点や対策

上記の諸課題への対応を図り、次年度以降、本研究事業が設定した当初の目標を達成したいと考えている。そのためには、①静岡市高齢者福祉課との連携の維持、②下級生を含めた新たな学生の参画、③高齢者のニーズならびに関係者の意見などを踏まえた企画の練り直し、などの対策を図る必要がある。

５．地域への提言

当初の目標を達成できなかったことにより、地域課題を解決するための具体的な提言を行うことができないが、申請者は、高齢者の地域活動や社会参加を促すためには、「表現的ニーズ」「貢献的ニーズ」「影響的ニーズ」（高齢期特有の教育的ニーズ）を充足することが効果的である、との仮説をもっている。このような研究仮説をもとに、地域ならびに学生との協働による実践活動を通して、地域に還元できる知見（課題解決の方策）を生み出したい。

６．地域からの評価

成果報告の際に、静岡市高齢者福祉課の皆さんから、企画の実現可能性に関する一定の評価が得られた。併せて、高齢者のニーズを踏まえることの重要性など、数多くの助言もいただいた。交流事業の実施、効果の検証に至らなかったことに理解を示していただいた上に、今後の連携の継続についての前向きなお話もいただいた。関係各位のご指導・ご協力に対し深甚なる感謝を表したい。

参考文献

木下奈津季（2020）「高齢者に活力を与える支援について――しずおかハッピーシニアライフ事業を踏まえて」（常葉大学教育学部生涯学習学科：卒業論文）

堀薫夫（1999）「高齢者の特性を生かした学習援助の視点」同編『教育老年学の構想――エイジングと生涯学習』学文社

ニューノーマル時代のテレワーク
-新たな移住・定住スタイル、「交流」をベースとしたコワーキングスペースのあり方に関する検討-

常葉大学　経営学部　小豆川ゼミ
教員：准教授　小豆川裕子
参加学生　2年：◎伏見拓哉　稲垣安衣子　大石唯斗　川口藤馬　坂井媛香　永戸健太　橋村利来
保坂侑希　森岡修也　良知幸都　◎ゼミ長

1. 要約

静岡市内には静岡駅を中心に、コワーキングスペース・シェアオフィスが複数立地している。令和元年度事業では、『2020年版 静岡市まちごとテレワークマップ』の制作によって、市内コワーキングスペースの特徴把握ができた。その後、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、首都圏等からの企業移転、移住者の活用への期待が高まり、テレワーク移住・移転に取り組む静岡市にとって、コワーキングスペースのあり方の再構築が求められている。令和2年度事業は、コワーキングスペースだけでなく、静岡を訪れるコワーキングスペース利用者がまちを楽しみ、まちの魅力を発見し、生活の便利さを知り、交流していただくことを目的に、『2021年版 静岡市まちごとテレワークマップ』を制作した。具体的には、昨年度のコワーキングスペース情報をアップデートするとともに、３つのエリア（「鷹匠・安東エリア」「静岡駅・青葉公園エリア」「七間町・人宿町エリア」）に分かれてゼミ生が取材したお薦めの飲食・サービス店等や周辺のワーケーションエリア[1]を紹介することで、さらなる関係人口の増加に資するものである。

2. 研究の目的

テレワークを活用した新たな移住・定住スタイルを調査し、首都圏企業等の静岡市への移転、移住促進策を検討する。その成果として、『2021年版 静岡市まちごとテレワークマップ』を制作し、事業のプロセス、成果発信の際に、「交流」をベースとしたコワーキングスペースの利活用のあり方の検討も行う。

3. 研究の内容

インターネットを用いて、テレワークを活用した新たな移住・定住スタイルを調査し、ワークショップを開催。静岡市を訪れた人たちが、まちの楽しさ、静岡市の魅力、生活の便利さについて「認知・興味」「関心・検討」「行動」「共有・拡散」を促すような『2021年版 静岡市まちごとテレワークマップ』を制作し、静鉄のコワーキングスペース/シェアオフィス「＝ODEN」（静岡鉄道株式会社）にて成果報告会を実施した。調査対象の選定やアウトプットイメージについては、適宜、静岡市企画局企画課移住・定住推進係の担当者と打ち合わせさせていただいた。

(1) ターゲット・イメージ：

本事業のターゲット・イメージは、図表1のとおりである。

図表1　ターゲット・イメージ

[1] ワーケーション：Work（仕事）＋Vacation(休暇)の造語。テレワークを活用し、普段の職場や居住地から離れ、リゾート地や温泉地、さらには　全国の地域で、仕事を継続しつつ、その地域ならではの活動を行う」（ワーケーション自治体協議会：Workacion Alliance Japan(WAJ) の設立趣意）

(2) 調査項目

コロナ禍の状況のなか、コワーキングスペースのアップデートについては、静岡市企画局企画課が確認作業を実施し、支援いただいた。

①コワーキングスペースの調査項目

・施設名、主な特徴、運営会社、住所、Wi-Fi・電源の有無、アクセス、営業時間、席数、会議室の有無と内容、利用者像、料金体系、特徴（コンセプト、オプション、ゾーニング、その他魅力的な点）

②飲食・サービス店等の調査項目

・基本情報：店・施設名、住所、営業時間、定休日、近いコワーキングスペース

・特徴：コンセプト、お薦めメニュー、コワーキングスペース利用者目線にたったアピール

(3)スケジュール

スケジュールは以下のとおりである。

2020年

11月：

プロジェクト全体の目標の共有、進め方に関する検討

首都圏企業に向けてのテレワーカー誘致施策の検討、ワークショップの開催、まとめ

12月：

飲食・サービス店、施設のリストアップと評価、アポどり、取材の実施

2021年

1月：取材結果の発表・講評

2月～3月：『2021年版 静岡市まちごとテレワークマップ』原稿のとりまとめ、版下作成、校正、完成報告会の開催

4. 研究の成果

(1) 当初の計画　2020年11月スタート時より静岡移住・定住施策の検討にはじまり、取材を行い、2021年3月に成果物を完成、完成報告会の実施を行う。

(2) 実際の内容　A:予定どおり。コロナ禍で取材条件に制約があったが、3グループに分かれて効率的に取材を実施し、特徴を整理して利用者目線にたったマップ制作を行った。

(3) 実績・成果と課題

①実績・成果

本調査研究の実績・成果として『2021年版 静岡市まちごとテレワークマップ』（A3版両面カラー）を制作し、静鉄のコワーキングスペース/シェアオフィス「＝ODEN」（静岡鉄道株式会社）の協力を得て、同地で成果発表会を実施した。当日は大型版マップも制作し、冊子に掲載された飲食・サービス店をプロットするとともに、当日参加者のオススメスポットも追加して、情報交換を実施した、今後は同コワーキングスペースにて、大型版マップや本冊子により、利用者間の情報共有を行って頂き、交流、ネットワークづくりの一助としていただくこととした。

ゼミ学生の感想は以下のとおりである。

- アポ取りから取材に至るまで大変だった。また、電話対応や取材する際には社会人マナーが必要となったため、もっと社会人マナーを身に付けておくべきだと思った。
- 静岡市の良さを発見でき、県内の人にもおすすめしたいお店がたくさんあった。取材を通じて、静岡の人の温かさをとても感じた。少しでも取材先にコワーキングスペースの利用者の来客が増えるよう、尽力したいと思った。
- 沢山の魅力的なお店があることを知るのと同時に、まだ知らない人も多いことを勿体なく感じた。静岡市には隠されている魅力がたくさんあると思った
- それぞれのお店の消費者のニーズに応えるための工夫や考え方を知ることができた。
- 自分が人と接する時や仕事の中で今回の経験を活かしていきたい

②課題

取材・インタビュー調査実施後、学生からは課題として、以下があがっている。

- お店の方の時間を配慮し、段取りよく行うために事前に整理、考えておく。
- （取材・インタビュー調査実施後）、時に敬語の使い方が悪い場面も多々あったので、相手に失礼に思われてしまった可能性がある。よって、今後は敬語などの社会人基礎力を向上させたいと思う。

(4)今後の改善点や対策

今後の改善点や対策として（取材・インタビューの際）、前もって相手のことを調べ、その上でどのようなことが気になるのかを書き出しておく等が考えられる。

5. 地域への提言

地域への提言は、以下のとおりである。

- まずは多くの市民が静岡市の魅力を発見し、地元愛を育み、街の魅力を知ってもらうための活動を積極的にするべきだと思う。
- 県や市内全体で自分の静岡市のコワーキングスペースや、移住定住についての正確な情報を増やし、ホームページ、YouTubeなどからも発信して首都圏の方々にアピールする。

＜アイデア例＞

休みの日にも来てもらえるようなオススメ観光ルートの制作

スタンプラリー、ポイント、割引チケットなどによるマップの浸透

6. 地域からの評価

地域からの評価は以下のとおりである。

このたびは、テレワークを活用した移住・定住に関する調査を実施していただきましてありがとうございます。

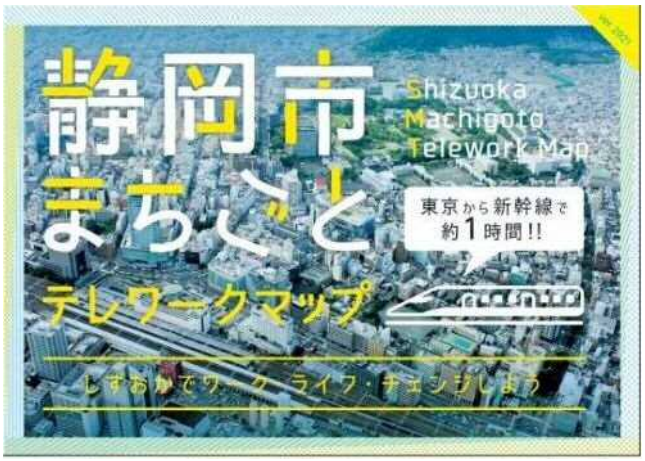
市内コワーキングスペースの周辺地域の魅力等について、店舗にアポイントをとり実際に訪れてヒアリングするなどきめ細かな調査をしていただきました。

本調査の成果物である「まちごとテレワークマップ」を本市への「移住・移転の促進」や「関係人口の創出」等に大いに活用させていただきます。（静岡市企画局企画課　移住・定住推進係）

＜謝辞＞

年末の大変ご多忙のなか丁寧にヒアリング調査にご協力いただいた飲食・サービス店等の皆様、誠にありがとうございました。また、本事業において、静岡市地域おこし協力隊小林大輝氏には、多大なご支援・ご指導を賜りました。心よりお礼を申し上げます。

図表2 『2021年静岡市まちごとテレワークマップ』表紙



図表3　完成報告会の模様

図表4　『2021年版 静岡市まちごとテレワークマップ』:テレワーク拠点近隣オススメショップおよびワーケーションエリア

静岡県立川根高等学校の魅力化向上

常葉大学 外国語学部英米語学科
教　　員：准教授 鈴木 克義
参加学生：森脇 優香ほか

１ 要約

令和元年度まで外国人のクルーズ客が訪れるなど、順調にインバンド需要を捉えていた静岡県だが、想定外のコロナ禍で２年度は観光需要が急落、それでも密にならない山間部のキャンプ場には客が訪れ、大井川沿いの県道にはサイクリングを楽しむ外国人客の姿も見られた。

感染者急増の首都圏から静岡へ、移住を希望する人向けのツアーも行われ、人口減少に悩んできた地域にも若者や外国人が移住してゲストハウスを開くなど、新たな動きが見られる。

本プロジェクトではこのような状況で、全国の過疎地域にある高校で行われている魅力化プロジェクトに着目し、本県の川根高校ですでに行われているプロジェクトに加え、外国人観光客や移住者向けの魅力度向上プランを高校生と大学生、地元の外国人移住者も一緒になって考察し、カフェ等の英語メニューを作成するとともに、国際観光科を設置して次世代のグローバル人材育成を図っている長野県白馬高校の魅力化プロジェクトを視察した。

２ 研究の目的

日本の大きな地域課題の１つに人口減少に伴う若者の流出、学校の閉鎖があるが、全国の過疎地にある高校で「魅力化プロジェクト」が行われ、特色のある教育を行うと共に寄宿舎や公営塾等を整備して県外からの入学者を集めている。本研究では常葉大学外国語学部に在籍する川根高校卒業生を中心に、グローバル化の観点から魅力度を高めるアイデアを出し合い、魅力度を高める方策を実施した。

３ 研究の内容

この研究ではまず、常葉大学外国語学部英米語学科に在籍する川根高校OBとOGを中心に、学生による川根高校魅力化についてアイデアを出し合う、ブレインストーミングを行った。出てきたアイデアは、次のようなものである。

・カヌー部の生徒たちが観光客にカヌーを教える
・川根の水と川根のお茶っ葉で高校生がお茶を入れる。茶銘館で行われる献茶会などに参加する
・制服の変更。女子はリボンかネクタイどちらでも良くする。男子はネクタイなしか２色展開にする

いずれもユニークな、学生らしいアイデアだったと思うが、実質１０月からの半年間で企画立案、実

施し、報告書作成となると、時期的に実行不可能なアイデアもあり、魅力化プロジェクト側からオファーされた「学生による英語授業への参加」という案を呑まざるを得なかった。

実施内容については、昨年のプロジェクトからお付き合いのある、川根本町のゲストハウスオーナーから「食堂やカフェのメニューを英語化しては」という提案があり、それを採用した。

印刷・製本については川根本町の知り合いの業者を使ってほしいという、魅力化コーディネーターからの強い申し入れがあったが、学生がたびたび入稿や校正で訪れる必要があるため、大学からも学生リーダーの下宿からも近い、静岡市清水区の印刷所から、複数の見積りを取って依頼した。

最後に、全国的に行われている高校魅力化プロジェクトの中でも、国際観光科の設置というユニークな試みを行政主導で行っている、長野県白馬高校魅力化プロジェクトを視察することとした。

４ 研究の成果

(1) 魅力化プロジェクトの計画

ア　川根高校の２年次「英語表現」の授業に常葉大学外国語学部生が参加

イ　地域に移住したカナダ人夫妻と米国人ALTを加え、地元の食堂・カフェメニューを英語化

ウ　国際観光科を設置した長野県白馬高校の魅力化プロジェクトを視察

(2) 実際の内容

アの常葉大生による授業参加は予定どおり実施した。（評価Ａ）

当該学生は教職履修者ではないため、コーディネーターから授業プランの事前提出を要求されて困惑していたが、初回のアイスブレイクのミニゲーム、カナダ人夫妻を交えた川根の好きなところ、嫌いなところのグループディスカッションなど、無難にこなしていた。

ただこれが川根高校の魅力度向上に繋がったかというと、普段からオールイングリッシュでALTとの授業をされている、ご担当の先生に失礼な気がしないでもない。

なお今回のプロジェクトでは、研究報告のために写真撮影の許可をお願いしていたが、最後までコーディネーターから許可が得られず、町役場側が撮影していた写真も提供されず、残念ながらここに掲載することはできない。

Kawane High School Lesson Schedule
Nov.13　13:15~14:05

- Guidance
- Introduce Laurence and Saori
- Discuss in groups likes and dislikes of Kawane

1. 概要
   形態：川根高校二年　普通科　英語表現選択者 17 名　1.2 組合同
   場所：22HR(要確認)
   ファシリテーター：Laurence 夫妻　森脇美優（外国語学部３年、川根高校卒業生）
   生徒の持ち物：筆記用具

2. 全体の流れ
   先生が決めてくださったグループごとに座り授業開始
   ① 導入(森脇)：自己紹介
      Laurence 夫妻の自己紹介
   ② 展開：ミニゲーム（グループごと円になって名前、出身地、好きな食べ物、趣味など前の人が言ったことと自分のことを言って進めていく）
      ローレンス夫妻からなぜ川根本町に住居を決めたのか。
      各グループで川根の好きなところ嫌いなところの話し合い
      グループで話し合ったことを発表
   ③ まとめ
      本授業の振り返り
      次回予定

イの英語メニュー作成については、学生の頑張りもあって、完成させることができた。（評価Ａ）

高校生が授業中に書き込んだメニューの英語は、カナダ人夫妻やALTのサポートもあり、それなりの完成度に達していたが、同じ具材でも表現がバラバラだったり、価格の表記が税抜きだったり税込みだったり、１つのメニューとして統一感を持たせるのが大変だったが、その作業を学生たちが夜を徹してやってくれた。この研究は文字どおり地域と学生のコラボレーションになっている。

印刷所の担当者は、入稿時の挨拶で学生を伴って訪れた際に、常葉大学短期大学部の卒業生だったことが判明し、途中での写真の入れ替えなど、こちらからのリクエストにも快く応じてくれて、非常に仕事がしやすかった。

ウの高校魅力化プロジェクトについては、白馬村役場内で感染症クラスターが発生したため、予定より約1カ月遅れることとなったが、白馬高校支援局長の配慮で実施することができた。（評価Ｂ）平塚局長と、隣の小谷村から出向しているという柴田補佐から、魅力化プロジェクト発足の経緯や、外国人観光客対応の状況、全国から出て来ている国際観光科生の苦労話など、貴重なお話を伺った後、実際に白馬高校の男子寮、女子寮を局長自ら案内してくださり、寮生と接している寮監の職員からも、ホームページには書かれていない貴重な話を聞くことができた。

静岡から出て来ている寄宿生もおり、この春静岡文化芸術大学に進学が決まったというので、常葉大学外国語学部でも観光英語を教えていると宣伝させてもらった。その後入学センターから大学案内が局長宛に送られているはずである。

(3) 実績・成果と課題

今年度はコロナ禍で事業の正式決定が１０月にずれ込んだため、長期にわたるプロジェクトが行えず、学生が必ずしも本意でない英語授業への参加を余儀なくされるなど、せっかく川根高校OGの学生が参加してくれたメリットを生かし切れなかった面があるが、たまたま川根高校近くに移住した友人のカナダ人夫妻が積極的に協力してくれたこともあって、メニュー英語化プロジェクトに関しては一定の成果を挙げられたと思う。とくに高校生が前向きに参加してくれて、ネイティブとのワークショップ形式の授業を楽しんでいた様子がアンケートからも伺えたのは良かった。このアンケート結果の詳細などは今後、紀要論文等で発表するつもりである。

(4) 今後の改善点や対策

１０月からの半年間でプロジェクトを企画立案し、予算を執行して事業を完結させるというのは不可能に近いことが分かったので、今後もし機会を与えてもらえるなら、学生が動きやすい夏休み中から準備を進めるなど、早めに取り組めるようにしてもらいたい。

今回、当初予定していた予算を使い切れなかったのは、白馬高校魅力化プロジェクト視察に学生も同行予定だったが、コロナ禍で学生の宿泊を伴う学外活動が制限されたためである。それに本来、先行事例の視察はプロジェクトに先がけて行い、その成果を踏まえて企画立案すべきだと思うが、今年度に関しては特殊事情で、いたしかたない面もある。

また行政側の委託職員の協力は結構だが、撮影の制限など研究の妨げになる行為や、実施内容に関して、自分たちに決定権があるかのような振る舞いは遠慮してもらいたい。

５ 地域への提言

風光明媚な茶畑や、SLが走る大井川鐵道など、観光資源に恵まれたこの地域は、今後も密を避けた観光客が国内外から訪れることと思う。メニューの英語化など小さなことでも、これまで取り組む動きはなかったとのことなので、ゲストハウスに関心を持つ学生や、移住してきた外国人などを中心に、グローバル対応を進めて行ってほしい。川根高校から本学へはほぼ毎年進学者がおり、外国語学部で観光英語を学ぶ学生が、その一助となれば幸いである。

６ 地域からの評価

わずか数千人の人口規模の自治体で、元気に活動している若手の皆さんから、私たちの活動が評価され、快く受け入れてもらえたのは非常にありがたかった。とくに川根高校OBの学生は、自分たちの活動が静岡新聞などで取り上げられ、昔の同級生からコンタクトがあったのは嬉しかったと言っていた。

末筆ながら、私たちのプロジェクトを快く受け入れてくれた川根高校の教職員と生徒の皆さん、川根本町教育総務課の皆さん、caféうえまると先頭館のオーナー、川根高校の近くに昨年移住し、Kanata Mountain Lodgeを開いたLaurence夫妻に心より感謝を申し上げたい。

Withコロナ時代に求められる駅前広場の将来像の提案に関する研究

常葉大学 教育学部 佐瀬研究室
教　　員：教授 佐瀬竜一
参加学生：大塚航瑠、亀井幸多、小林咲葵、齊藤安澄、宮田優

１ 要約

本研究では、①静岡駅前に関する認識調査を行い、静岡駅前広場がどのように映っているのか、静岡駅前広場にはどんな強みがあるのか、今後何があるとよいと思うのかなどについて分析する、②類似の規模、地理的条件の駅前の担当者に対面もしくはオンラインインタビュー調査を行う、の２つを行った。

集めた情報を基に駅前広場の役割や将来像について学生・社会人・市職員で対話するワークショップを行った。これらを通して、利用者の視点から駅前広場に何が求められ、どのようにするのがよいのかについて具体的に可視化することができた。

２ 研究の目的

静岡駅は一日乗降客数が約12万人で、市内のみならず、市外・県内からの利用客も多い静岡県内の主要駅である。このように、人々の移動や交流の拠点であった駅前広場が、新型コロナウイルス感染拡大による生活様式の変化に伴い、今後どのような役割を担うべきかを見出すことが課題となっている。

このような課題に対応するための知見を得るために、本研究でアンケートおよびインタビュー調査を通して得た情報を元に静岡駅の現状や役割を分析し、分析結果を活用しながらWithコロナ時代に求められる駅前広場の役割や将来像について対話するワークショップを開催し検討した。検討結果を踏まえて「Withコロナ時代に求められる駅前広場の将来プラン」を取りまとめた。これらにより、利用者の視点から駅前広場に何が求められていて、どのようにするのがよいのかについて具体的に可視化することができ、利用者の利便性や質向上につながる提案を行うことができると考えられる。そして、静岡駅前広場の活性化に寄与することが見込まれる。

３ 研究の内容

１）研究１：静岡駅前を利用する大学生やその関係者を中心に幅広い年齢層に対して静岡駅前に関する認識調査を行い、利用者にとって静岡駅前広場がどのように映っているのか、静岡駅前広場にはどんな強みがあるのか、今後何があるとよりよいと思うのかなどについて分析する。

２）研究２：類似の規模、地理的条件の駅前の担当者に対面もしくはオンラインによるインタビュー調査を行い、提案につながるような情報を得る。

３）研究３：上記２種の調査により集めた情報をまとめて、まとめた情報を基に駅前広場の役割や将来像について学生・社会人・市職員で対話するワークショップを行う。ワークショップではペルソナ（架空の利用者）を想定し、利用者の満足度や心の動きを考慮しながら対話を行っていく。最後に「Withコロナ時代に求められる駅前広場の将来プラン」として取りまとめる。

４ 研究の成果

(1)当初の計画

研究１では、令和３年１月から２月中旬にかけて、静岡駅の利用者にGoogleフォームを用いたオンライン形式および紙媒体形式にて約100名にアンケート調査を行う計画を立てた。Googleフォームの作成

においては、消費者心理学に関する文献を参考に作成することにした。

また、研究２では類似の規模、地理的条件の駅前の担当者１～２名を選定し、連絡調整後に対面形式によるインタビュー調査を教員および学生が行う計画を立てた。

研究３では、上記２つの調査の分析結果を活用して３月中旬に駅前広場の役割や将来像について学生・社会人・市職員で対話するワークショップを静岡駅近くの会議室を借りて行う計画を立てた。

最後に「Withコロナ時代に求められる駅前広場の将来プラン」として取りまとめ、印刷製本する計画を立てた。

(2)実際の内容

研究１はほぼ予定通り実施することができた（A）。令和３年１月から２月中旬にかけて、下記Googleフォームを用いたオンライン形式にてアンケート調査を行い、静岡駅を利用している大学生および社会人88名から回答を得ることができた。コロナ禍を踏まえて紙媒体形式のアンケートは行わなかった。

静岡駅前広場に関するアンケート調査

【本調査の目的】
本調査は、静岡市都市局市街地整備課と常葉大学・佐瀬研究室が共同で行っている「令和2年度しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業：Withコロナ時代に求められる駅前広場の将来像の提案」とプロジェクトの一環で、静岡駅前の現状と今後の課題について調べることを目的としています。調査結果の分析を通して、静岡駅の利用者の利便性や生活の質向上につながる有益な情報を提供できればと考えています。

【調査倫理にかかわる注意事項】
・この調査への回答は強制ではありません。回答するかどうかはあなたが自由に決めることができます。
・アンケートへの回答（協力）は、アンケート調査の送信をもって同意されたものとみなします。
・回答したくない質問がある場合には、回答しなくても構いません。
・回答をしなかったり、回答を途中でやめたりしても構いません。回答しないことで不利益が生じることはございません。
・回答は、研究目的のみに使用し、それ以外の目的には一切使用しません。
・回答を使用する際には、すべての回答をまとめて統計的に処理したうえで用いるため、皆さんの情報がそのままの形で利用されること、プライバシーが明らかになることはありません。
・回答の処理からデータの保管と処分まで、回答は実施者のみが閲覧する形で厳重に保管されます。

【回答方法】
・他の人と相談などはせずに、あなたの率直な考えをお答えください。
・不明な点等ありましたら、以下の実施調査者のE-mailアドレスにご連絡ください。

【結果のフィードバックについて】
この調査の結果を知りたい方は、実施調査者のE-mailアドレスにご連絡ください。調査結果は、ファイルを添付する、もしくは郵送するなどの形にてお伝えする予定です。

【調査実施者】
常葉大学教育学部心理教育学科 佐瀬 竜一
問い合わせ先：sasedra@sz.tokoha-u.ac.jp

*必須

アンケートでは下記４問の自由記述形式の質問を設定し、入力を求めた。

・設問１：あなたが思う静岡駅前広場（北口、南口）の良さや強みを可能な限り挙げてください。

・設問２：あなたが思う静岡駅前広場（北口、南口）の課題や弱みを可能な限り挙げてください。

・設問３：新型コロナウイルスによって静岡駅前広場（北口、南口）へのあなたの見方や利用の仕方についてどのような変化がありましたか。可能な限り挙げてください。

・設問４：今後の静岡駅前広場（北口、南口）について、こうであったらもっといいのに、こうなると嬉しい、こんな物や情報があればいいのに、と思うことを可能な限り挙げてください。

研究２は一部修正して実施した（B）。コロナ禍の影響で対面形式のインタビューは行わずに、静岡市役所都市局都市計画部市街地整備課の方を通じて、姫路市役所都市拠点整備本部姫路駅周辺整備室の方にインタビューを行っていただく形で２月下旬に実施した。

研究３は一部修正して実施した（B）。上記２つの調査の分析結果を活用して３月20日に駅前広場の役割や将来像について学生５名、静岡市役所都市局都市計画部市街地整備課２名が参加して対話するワークショップを対面形式ではなく、Zoomを活用したオンライン形式にて行った。

「Withコロナ時代に求められる駅前広場の将来プラン」として取りまとめて印刷製本する計画については、得られた情報が過程の情報であり、広く公表することで誤解を生む危険性があると静岡市役所都市局都市計画部市街地整備課と研究担当教員の間で協議、判断して中止した（C）。

(3)実績・成果と課題

研究１のアンケートで得られた情報についてKJ法を援用してまとめた。以下では各質問の回答結果と代表的な回答例について報告する。

「設問１：あなたが思う静岡駅前広場（北口、南口）の良さや強みを可能な限り挙げてください」の回答内容は、「待ち合わせのしやすさ」、「雰囲気、景観」「バスターミナルの存在、利便性」、「商業施設の多さと駅からの近さ」の４種に主に集約された。

待ち合わせのしやすさ	雰囲気、景観	バスターミナルの存在、利便性	商業施設の多さと駅からの近さ
待ち合わせがしやすい	地面のLEDがかわいい	バスターミナルが広く、利用しやすい	駅北口はデパートなどの商業地域に近く、県内の買い物客に便利な位置にある。
北口はバス乗り場やタクシー乗り場が広くて、待ち合わせにも便利だと思います。	鳩がいたり胴像のようなものがあるのもかわいい。	バスターミナルが分かりにくい。	駅と街中が近い
待ち合わせがしやすい、家康像がある	モニュメント配置などの個性があり、降りた時にあたたかい雰囲気がある。	バス停がたくさんある。	飲み屋など飲食店が多い、交番がある、ロータリーがある
待ち合わせ場所としてわかりやすい	広々としていて景色が明るい。	バス停がわかりやすい、広くて歩きやすい	お店が沢山ある　人通りが多く明るい

「設問２：あなたが思う静岡駅前広場（北口、南口）の課題や弱みを可能な限り挙げてください」の回答内容は、「交通の便の悪さ」、「シンボルの不在」「お手洗い、衛生面」、「南口のイメージの悪さ」の４種に主に集約された。

交通の便の悪さ	シンボルの不在	お手洗い、衛生面	南口のイメージの悪さ
北口に行くまでに渋滞にかかりやすい。	待ち合わせのシンボルとなるものがない	マック側のトイレが汚い	南口の方は遊びの用事のある学生の利用が少ないイメージがあり、それほど馴染みがないため、それ自体が弱みなのではないかと思う。
交通の便がわるい。	分かりやすいシンボルマークが無く、印象に残りにくい	綺麗なお手洗いがない	南口には魅力的なものがない。
バスターミナルがあるため、地上から反対側に行くには遠回りする必要がある	閑散としている 特に目玉となるものが少ない、弱い	南口が北口に比べて狭くて活気がない	南口:ある時間帯は送迎の車が並んでいて混雑している、全体的に古さを感じる

「設問３：新型コロナウイルスによって静岡駅前広場（北口、南口）へのあなたの見方や利用の仕方についてどのような変化がありましたか。可能な限り挙げてください」の回答内容は、「変化なし」、「利用の減少」、「ソーシャルディスタンスの意識」の３種に主に集約された。

変化なし	利用の減少	ソーシャルディスタンスの意識
特にない	利用がかなり減った	ベンチはあまり使わないよう意識していた
特になかった	人混みを避けていたので、駅前広場を利用すること自体が少なかった	長居しなくなった、なるべく人と距離をとりながら歩くようになった、車の乗降場所の利用率が上がった
特になし	アルバイトに向かうために静岡駅を利用することはあったが、プライベートで利用することは少なくなった。	閉鎖空間よりオープンスペースを通行する
特になし	あまり電車を利用しなくなったので広場に降りることもなくなった	いままでは、ずっと地下を通っていたが、コロナがはやってからは地上（広場）を通るようになった

「設問４：今後の静岡駅前広場（北口、南口）について、こうであったらもっといいのに、こうなると嬉しい、こんな物や情報があればいいのに、と思うことを可能な限り挙げてください」の回答内容は、「交通整備」、「地図、掲示」、「スペース、施設」、「イベント、エンタメ」の４種に主に集約された。

交通整備	地図、掲示	スペース、施設	イベント、エンタメ
さらに乗降場が増えれば良いと思う。	・静岡駅周辺の観光情報(徒歩圏内) ・天気の掲示板	バスターミナルに冬も寒くない待合室があるといい	イベントがあると良い
シェアサイクルの設置	・コワーキングスペースやゲストハウスなどア ・地下から商業施設に向かう際の案内表示がもっとわかりやすいといいかもしれない	バスターミナルのベンチの数	サッカースタジアムやフットサル場、スケートリンクなどの施設、大画面のモニターやプロジェクションマッピングがあればもっと盛り上がると思いま
タクシーの駐車スペースを削減し、自家用車が渋滞しないようにしてほしい。	・北口と南口両方バスがあり、慣れていない人はどっちにあるか分かりにくいので、わかりやすい表示、静岡駅周辺のわかりやすいマップ(電	ベンチがもっとほしい	ストリートピアノの設置
タクシーの駐車場を減らして、自家用車の送迎スペースを増やす。臨時の観光バスの駐車場は、移転する。	おすすめのカフェなど気軽に行ける場所の情報。	ベンチや屋根をつけて休憩や飲食ができる環境があったらよい。	ロータリーを止めやすくして欲しい、飲食店以外の充実化、若者の交友を増やす場の提供など
もっと車を停めやすい駐車場があればいいです。	バスの運行状況や周辺地図のデジタルサイネージがほしい。	ベンチをもっと増やしてほしい 屋根をつけてほしい 南口は特に魅力がない	観光施設の誘致。滞在するスペースやイベントをやるスペースの確保。
安心して停められる一般車駐車場。	バスの運転状況の電子掲示板。利便性が高まると思うので。	モバイルバッテリーレンタルサービスが駅のタリーズにしかないのでもっと増やして欲しい。	広場で催し物などをしたら楽しそう。
一般車、バス、タクシーなどそれぞれの利用者にとってより使いやすい駅前広場になれば良いと思う、、南口はベビーカーやお年寄りの買い物カートなどを押す一般送迎用のロータリーが混み合うことが多いので、もっと広くなると嬉しい。	バスの標識？（どこどこに行きたいなら、この路線を使う）をもっとわかりやすくしたら利用しやすいと思います。 バスの標識？（どこどこに行きたいなら、この路線を使う）をもっとわかりやすくしたら利用しやすいと思います。	雨の日でも休憩できるような場所 駅の近くに主要な建物があるとよい	広場を活用したイベントの開催 子供達が遊べる遊具や場所があったらよい。静岡駅前広場とは直接関係ないかもしれないが

次に、研究２のインタビューで姫路市役所　都市拠点整備本部　姫路駅周辺整備室から得られた情報について下記の情報が得られたことを報告する。

姫路駅周辺の市街地が線路によって南北に分断されており、慢性的な渋滞が発生していたことから、高架化と線路沿いの開発事業を併せて進めた事業の中に駅前広場の再整備が計画された。平成20年に市の計画案を公表したところ、地元や商店街等から反発が挙がった。その後、各所でワークショップや勉強会を開催し、様々な計画案が提案された。そして、行政・地元・専門家等が集まって整備計画を検討

する推進会議が結成された。行政が進めていた当初の考え方は南北交通の渋滞解消や駅前の交通集中を解決することが主眼におかれていたが、多様な主体が議論に加わる中で、周辺の商店街との繋がりや憩い空間の整備も重要視されるようになった。

新型コロナの感染拡大により、姫路駅北駅前広場においてはイベント使用申請件数が減少した。一方で、ライブハウスを使用できなくなった影響で新規の音楽イベント利用が増加するという現象が起きた。駅前広場については、例年と比べると平日は人通りが少ないが近隣の飲食店でテイクアウトしたお弁当を広場で食べる人が増えた、打ち合わせなどで広場を活用する人が増えた、飲食店時短営業要請期間中は飲食店閉店後に人が集まるようになったといった変化がみられる。

研究３のワークショップでは、静岡市働き盛りの社会人をペルソナとして想定して、ペルソナから見た理想の駅前色場をカスタマージャーニーの手法を用いて考察した。自然や情報が目につくようにして朝にリラックスできる、「今日も頑張ろうと思える」仕掛けが欲しいという意見が聞かれた。

(4)今後の改善点や対策

本研究の実施に当たっては、コロナ禍という状況により他地域への訪問調査、インタビュー調査が十分にできなかった。本研究を通して得ることができた知見を基に他地域との比較分析を進め、より多くの年齢層の声を聞くことができると「Withコロナ時代に求められる駅前広場の将来像」についてより明確になることができると考えられる。

５ 地域への提言

まずは、静岡駅前広場にある強みを言語化し、発信する必要性を強調したい。「設問１：あなたが思う静岡駅前広場（北口、南口）の良さや強みを可能な限り挙げてください」の質問については、「待ち合わせのしやすさ」、「雰囲気、景観」「バスターミナルの存在、利便性」、「商業施設の多さと駅からの近さ」の４種の回答が主に得られた。一定のスペースが存在し、自然と密になりにくく様々な施設への行き来がしやすい静岡駅前広場はWithコロナ時代に必要な駅前広場の要素の一部を既に有していると考えられる。このことを管理者および利用者が自覚する、自覚できるような働きかけや広報があると、静岡駅前広場のイメージが「ただの移動地点」からコミュニティー活動の場に変化していくと思われる。

次に、視覚・聴覚・嗅覚などを活用してリラックスできる情報（空間）や実用的な情報（アルコール消毒の設置場所、お手洗いの場所）、駅施設位置やイベントの分かりやすい情報が提示すること、および提示されていることを利用者に認識してもらうことを提案したい。駅に降りた瞬間に「来てよかった」「今日も頑張ろう」と思える雰囲気づくり、静岡を感じられて自然と触れ合える非日常空間づくりが重要となるであろう。

さらに、駅前広場について語る、振り返る場の設定について述べる。今回、アンケート調査、ワークショップを行う中で、研究の参加者、協力者が静岡駅前広場を人ごとから自分ごととして考えるようになっていたように感じている。駅前広場について紙面上や本研究で実施したような対面、オンライン形式で語る、振り返る機会があることで、Withコロナ時代の駅前広場の利用や生活の在り方について自分ごととして考えることに繋がり、駅前広場の活性化の一助となることが期待できる。また、駅前広場を題材にして様々な年齢が語り合う、交流するきっかけにもなり、そのような交流が駅前広場の活性化にもつながるであろう。

６ 地域からの評価

視覚や嗅覚、人の細かい心情に沿って考えるという手法および提案が「ひと中心の空間づくり」につながる可能性があるとの評価をいただいた。

田代地区の自然環境保全対策PRに関する研究
～　エモマップ作成の取り組み　～

常葉大学 経営学部 情報学ゼミナール・山田雅敏研究室
教　　員：講師　山田雅敏
参加学生：伊藤遼也，根上麗音，河野茜音，堀井円華，山西隆博

1　要約

本研究は島田市田代地区の「自然環境保護対策」に関して，エモマップを作成することにより可視化し，PRすることを目的とする．エモマップの「エモ（い)」とは，emotional（エモーショナル）に由来した言葉で，「感情が動かされた状態」「感情が高まって強く訴えかける心の動き」という意味を持つ．情報学ゼミナールでは，田代地区の自然環境保護対策の具体的な実施内容や地元住民の方々のストーリーについて「エモい」をキーワードにマップとして表現したいと考えた．エモマップ作成に関しては，島田市地域生活部環境課，島田市在住のイラストレータ・デザイナー，そして常葉大学情報学ゼミナールが連携し行った．また，マップ作成の取り組みはホームページやSNSにより情報発信された他，3月末には島田市長の表敬訪問も実施されたことにより，PR戦略として一定程度の効果があったことが示唆された．

2　研究の目的

人間が生活を営むための必要な施設を開発するにあたり，自然と開発とのバランスが重要となる．島田市田代地区も例外ではなく，第二東名高速道路建設開発に伴う発生土の処理・土地利用計画された際，その開発途中で複数の貴重な動植物が発見され，特にクマタカやオオタカのような大型の猛禽類が生息していることが明らかとなった．この発見によって田代地区の自然環境保全に対する流れが加速し，早い段階から専門家を交えて自然環境を守るための自然環境保全対策がなされてきた．この長年に渡る調査の継続性や自然環境保全対策は，静岡県ワシタカ類保護対策検討委員会で高く評価されるなど，田代地区の生態系や生物の多様性を可能な限り残すことに成功した．

しかし一方で，これらの保護対策活動に関して上手く情報発信がなされておらず，自然豊かな里山として専門家・一般市民に広く認知してもらうことが残された課題となった．そこで本研究では、島田市田代地区の「自然環境保護対策」をPRするために，その保護活動をエモマップとして可視化し，さらにはエモマップ作成の取り組みをホームページやSNSにより情報発信することを目的とする．

3　研究の内容

本研究では田代地区の自然環境保護対策に関する活動のPRストラテジーとして，「エモい」をキーワードに表現したいと考えた．エモマップの「エモ（い)」とは，emotional（エモーショナル）に由来した言葉で，「感情が動かされた状態」「感情が高まって強く訴えかける心の動き」という意味を有し，若者や大学生を中心に多く使用されている若者語となる．情報学ゼミナールでは「エモい」を表現するための試みとして，レンズ付きフィルム「写ルンです」に注目した．昔流行した「写ルンです」は，エモい画像が撮影できることから，InstagramやFacebookを利用する大学生や若者を中心に人気が高まっており，この「写ルンです」で撮影された画像を使用してエモマップを作成した．なお，マップ作成にあたっては「島田市ファースト」をモットーに，調査からイラスト・デザイン作成・印刷までの工程をすべて島田市民・企業に依頼することで市民へのPR効果を狙った．具体的な研究の内容は，以下の通りである．

3.1　事前打ち合わせ

2020年11月16日，田代環境プラザにおいて田代地区の自然環境保全活動をPRするための事前打ち合わせを実施した．島田市環境課の職員の方から，現地の環境保全に関する説明が詳細に行われた（図1参照）．その後，今後のスケジュールやマップ作成などについて，島田市環境課の担当者の方と検討を行った．

図1．島田市職員による説明

3.2　事前調査・インタビュー調査

2020年12月25日に田代環境プラザで実施された事前調査では，指導教員とゼミナール代表2名が参加した．当日は，撮影場所の選定や時間帯，撮影方法などの検討を行った（図2上参照）．

続いて，島田市田代地区の歴史的背景と開発当時の状況を調査するために，島田市在住の佐野幸治氏からインタビュー調査（約40分程度）を行った．佐野氏によると，その昔，地区周辺は落武者の集落であり，居場所を知られたくないという理由から凧揚げや花火ができなかったことや，墓地など寺外といわれる場所があったこと，さらに地区の人達は結束力が強く，協働作業を通じて「結」の制度が自然に出来上がったことなど貴重な情報を得た（図2下参照）．

図2．調査風景（上）／インタビュー調査（下）

3.3　本調査

2021年1月6日，情報学ゼミナール5名と島田市在住のイラストレータとデザイナー4名，計9名が参加して本調査を実施した．，田代地区を西エリアと東エリアに分け，それぞれ調査･撮影を実施した（図3参照）．なお，当日は田代環境プラザの施設見学も行われた．調査後には「写ルンです」を現像し，エモマップ用の画像を収集した（図4参照）．

図3．田代地区における本調査の様子，および施設見学

図4．「写ルンです」による画像

3.4　エモマップの作成

「写ルンです」により撮影された画像を使って（図4参照），エモマップ作成に取り組んだ．「エモい」という暗黙知的性質を持つ感覚的な事象に対して，いかにイラストや言語で表現するのかが課題となった．そこで，Zoomにより各担当者間で連携を密に図り，エモマップを作成した（図5参照）．作成したエモマップに関しては，4月以降に島田市内や大学内に配布が計画されている．

図5．島田市田代地区自然環境保全対策エモマップ（左：表面，右：中面）

3.5　SNS・ホームページによる情報発信

PRの一環として，SNSやホームページによって情報発信することを試みた．広報しまだ（1月8日付）の公式Facebookに掲載された他，常葉大学公式ホームページにニュースがアップされた（図6参照）．また，ゼミナール学生の個人SNS（Instagram，Twitter）への投稿を促した．

- 島田市公式Facebook「広報しまだ」（閲覧日2021年3月14日UTC）
  https://www.facebook.com/kouhoushimada/posts/1829192357256173
- 常葉大学公式ホームページ（閲覧日2021年3月14日UTC）
  https://www.tokoha-u.ac.jp/news/210112-2/

図6．広報しまだFacebook（左）／常葉大学公式ホームページ（左）

3.6　島田市長への表敬訪問

島田市地域生活部環境課に依頼して，島田市役所にて3月30日（13:30～13:50）に島田市長への表敬訪問を実施した（図7参照）．今後，静岡新聞社・広報しまだに表敬訪問の記事が掲載される予定である．

図7．島田市長への表敬訪問の様子

4　研究の成果

4.1　当初の計画

① 11月～12月：事前打合せ・事前調査として自然環境保全活動に関するエモマップ作りを検討

② 1月上旬：常葉大学生と島田市在住のイラストレータ・デザイナーが同行し，本調査を実施

③ 3月末：収集した画像・データから最終成果品としてエモマップ地図を作成・納品する．そして，作成の最終報告として，島田市長への表敬訪問を実施した．

4.2　実際の内容

A：研究は計画通り，実施された．

4.3　実績・成果と課題

実績・成果として，エモマップが完成し納品された．また島田市のFacebookや常葉大学公式ホームページにより情報が発信されたことに加え，島田市民が直接参加したことにより，田代地区の自然環境保全対策に関する認知が市民に広まったと考えられる．今後の課題としては，エモマップの配布が挙げられる．

4.4　今後の改善点や対策

改善点・対策は，次の通りである．エモマップを作成する過程において，「エモい」という暗黙知的性質をもつ感覚表現に対して，共通性・一般性を見出すのかが改善点として挙げられた．また，今後の対策として，当該領域における学会発表や学内の紀要論文などへの投稿などを行い，専門家や一般市民に知見を広めることを視野に入れている．

5　地域への提言

田代地区には「田代の郷温泉・伊太和里の湯」や多目的スポーツ・レクリエーション施設「島田ゆめ・みらいパーク」など市民が利用できる魅力ある施設がある．そのため，エモマップを活用して広報を行うことにより，環境との調和がとれた自然豊かな里山としての田代地区の認知が促進されると考えられる．

6　地域からの評価

オール島田をモットーに島田市民に作成協力を得たこともあり，地域からの評価は一定程度得られたと期待される．今後は市長表敬訪問のプレスリリースを行うことで，より評価が得られると考えられる．

謝辞

本研究は，令和2年度しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業「田代地区の自然環境保全対策のPR」の研究助成の採択を受けたものです．本研究を遂行するにあたり，島田市地域生活部環境課の皆様，島田市在住の佐野幸治様，天野良太様，櫻井唯様，ご協力頂いた方々に謝意を表します．

【参考文献】

■ 北雄介，山田雅敏：「全史地図」とその作成を通じた地域学習；第66回日本デザイン学会春季研究発表大会予稿集（2019）

■ 北雄介，荒牧英治，山田雅敏：GIS位置情報付言語データを用いた都市の様相の可視化；日本地域学会第54回年次大会予稿集（2017）

（成果報告書）

地域のことばの保存と継承を目指して（高齢者と学生の方言調査を通した交流）

静岡英和学院大学 人間社会学部 日本語学ゼミ（研究室）
教　　員：講師 大槻知世
参加学生：阿部瞳（学生代表）、大澤佳起、杉山智彦、
高山裕生、野田智恵美、森井輝、横山諒、
パトリシア コー ワン イー

1　要約

本稿は、「しずおか中部連携事業中枢都市圏地域課題解決事業」に応募し採用された研究課題において、静岡英和学院大学日本語学ゼミのメンバーによって行われた調査活動について報告するものである。

本研究課題は2020年11月に採択され、2021年1月まで調査準備を行った。同月末に静岡市中山間地域である葵区井川で調査を行い、学生はオンラインで参加した。（写真撮影・提供：静岡市高齢者福祉課）

また、2021年2月には、静岡市葵区中心部で民話の語りや方言劇などの活動を行っている、かたかご会の定例会に報告者（大槻）が参加させていただいた（写真撮影・提供：静岡市高齢者福祉課）。

続く3月にも、番町市民活動センターにおける定例会に参加し、報告者の興味・関心の対象である日本の方言に関するこれまでの研究成果や、日本の言語学・方言学における最近のトピックを扱った口頭発表を行なった。今後定例会に定期的に参加させていただく上で相互理解を深める機会となった。

井川方言調査も、かたかご会の定例会への参加も、今後も継続的にご協力をお願いして活動をさせていただく予定である。

図 1 Webミーティングを併用した井川方言調査

図 2かたかご会の定例会

図 3報告者の自己紹介を兼ねた口頭発表

2　研究の目的

静岡市が掲げている課題の一つ「人生100年時代、高齢者の地域活動・社会参加を促進したい！」において、高齢者の地域活動・社会活動への参加の減少傾向が指摘されていた。応募に当たり報告者は、問題の要因は、参加するモチベーションが意識されに

くいことにあると考えた。これに対して、シニア世代が自分のご経験を下の世代に伝え、それにより下の世代が育つのを感じて生きがいを得られるような施策が必要であると考えた。

そこで、日本語学・言語学・方言学ゼミである本ゼミでは、学生が方言を調査し、それにシニアの方々にご協力いただくという提案を行った。地元の方言や習慣などを学生に語り伝えることで、シニアの方々も学生も、地域社会とのつながりを再発見し、地域の人との関わりを広げることができる。その土地で生まれ育った人が母語として持っている方言は、地域社会の文化や風習を伝える重要なものであるだけでなく、話者個人の精神的な支柱でもある。シニアと学生が方言について語り合うことで、自らのルーツを見直し、改めて居場所を見つけ、地元への誇りを持つことにつながることが期待された。

2.1 井川方言調査の目的

ここからは、2021年1月に葵区井川で行なった井川方言に関する方言調査について報告する。

方言はその土地で生まれ育ち、長く暮らしてきた人々にとって、アイデンティティの根幹を成す重要なものである。しかし、現在、日本各地の方言は、いずれも往時ほどには使われなくなり、衰退の一途をたどっていると言える。新聞、ラジオ、テレビに加え、インターネットやSNSといった、地理的制約から脱したメディアが浸透している現在、井川方言も変化の波を受けて、伝統的なすがたを留めることは難しくなりつつあると考えられる。

そこで、当地のシニアの方々に方言で生き生きと土地の事などを語っていただき、方言を記録・保存したい。本調査は、その目的の足掛かりとなる予備調査として位置づけられる。

3 研究の内容

3.1 調査

調査は 2021 年 1 月 30 日（金）13 時～15 時に井川生涯教育交流センター（葵区役所井川支所庁舎に併設）にて行なわれた。内容は主に基礎語彙調査である。単語単独の聴き取りと、語法を知るための例文採取も行った。同センターには市高齢福祉課職員の方と報告者の 2 名が伺い、学生 8 名はオンラインで参加した。中継による方言調査の実施は、報告者にとっても井川の方々にとっても初の試みである。

3.2 調査にご協力くださった話者の方々

本学日本語学ゼミの調査参加者に方言を教えてくださったのは、井川地区在住の 60～80 代の方々である。皆様に深く御礼申し上げます。

3.3 調査方法

調査協力者1, 2名に対して調査員が3名となるように班を分け、語彙調査と例文翻訳式調査を行なった。

項目	調査員（敬称略。左端は調査票提出責任者）
自然談話観察	全員
基礎語彙（ID0001—0070）	森井、杉山、大槻
基礎語彙（ID0071—0138）	阿部、高山、野田
基礎語彙（ID0139—0202）	横山、大澤、パトリシア

3.4 **調査の様子**（写真撮影・提供：静岡市高齢者福祉課）

図 4井川方言調査ではシニアの方々にオンライン参加の学生がお話を伺った

全員にとってオンライン調査は初めての試みであったが、調査協力者の方々は楽しんでご協力くださり、冷静な内省と、鋭敏な言語感覚を発揮してくださった。1時間半ほどで、160あまりの基礎語彙と、それに対応する160本あまりの例文をお教えくださった。学生も、方言調査自体が初めてであったにもかかわらず、落ち着いて授業の内容や教員のアドバイスを応用し、シニアの方々のお話を傾聴しつつ、積極的に調査を進めていた。調査直後も自発的に意見交換する様子が見られた。

4　研究の成果

(1)　当初の計画

当初は、次のような調査を計画していた：

A　日本語学ゼミ所属の学生17名の参加見込

B　市内の公民館を延べ5回程借りて調査を行う

C　調査協力者は延べ10名（1回の調査につき調査協力者は2名）

D　井川方言の伝統的なすがたを記録する。

(2)　実際の内容

実際には、当初の計画のAは達成できず、学生の参加は8名に留まった。

Bについては、コロナ感染対策もあって、井川生涯教育交流センターを約2時間お借りして1回の調査

を行う結果となった。

Cについては、当初の計画に比べ、1回当たりの調査協力者は4名と多く、実り多い調査となった。

Dについては、データ量がまだ小さいこともあり、達成率は高いとは言えないが、少ないながらも井川方言に固有の方言形や形態音韻論的な特徴などを捉えることができた。

(3) 実績・成果と課題

実績として、井川方言調査にご協力くださった皆様からは、「話ができて面白かった」とご好評いただき、調査後にも、「あれから単語をたくさん思い出したのでお知らせしたい」という追加のご連絡をいただいた。

また、番町活動センターにおけるかたかご会の定例会でも、本学日本語学ゼミの方針・研究内容をご紹介したところ、とても興味深く、今後互いに交流して活動していきたいというお言葉をいただいた。

課題として、今回はオンライン調査が主たる参加方法であったため仕方のない面はあるが、本学ゼミの学生がより自発的に参加できる工夫が必要であると考える。

(4) 今後の改善点や対策

学生が自発的に参与できるようなイベントをゼミで考え、地域のシニアの方々と、互いに楽しんで活動することができればと思っている。

そのためには、既存のイベントを参考にしつつ、本ゼミの特色や、学生の興味・関心も取り入れた催しを企画・実行したいと考える。（方言による朗読会、方言劇、井川方言の追加調査など）

5　地域への提言

シニアの方々が地域活動、ボランティア活動に参加するモチベーションを抱くための方策が必要である。年代に関わらず、人は話を聞いてもらうことに喜びを感じることが多い。特に人生経験の豊富な方の場合、それを下の世代の若者に話して聞かせ、若者が納得した時に、受容と自己肯定の感覚が満たされると考えられる。そうでなくとも、過去を見直すことで、昔の思い出や感情（喜びだけではないかもしれないが）を、臨場感をもって再び味わうことができる。それにより、今つらいことがあったとしても、それとは関係なく心が充実し、外の活動へ心を向ける気力の湧く方もいらっしゃると予想される。

6　地域からの評価

井川方言調査では次のような評価をいただいた：

「改めて自分たちのことばについて考える機会を得て新鮮だった」「学生たちと話して楽しかった」

かたかご会の定例会に報告者が参加した際は、次のような評価をいただいた：

「世界の中の日本、静岡、という視点が新鮮で面白かった」「日本語学、言語学の視点を知ることができ興味深かった」

謝辞

調査にご協力くださった方々に心より御礼申し上げます。

また、静岡市役所高齢者福祉課の山本輝様、横山将光様には、調査場所の選定から井川支所との調整・仲介、調査の実施まで、辛抱強く励ましながら伴走していただきました。大変お世話になりました。

井川支所の皆様にも、準備段階から調査当日まで、懇切にご協力いただきました。ここに記して心より感謝申し上げます。

図書館における英文多読・速読促進について

静岡英和学院大学 人間社会学部 遠藤ゼミ
教　　員：准教授 遠藤雪枝
参加学生：遠藤亜美

１　要約

多くの方に英文多読・速読に興味を持ってもらうきっかけを作るため、焼津市教育委員会事務局図書課と協働し、「英文多読入門講座」を3回開催した。また、遠藤雪枝ゼミ所属の学生が講座に参加し、講座準備やワークショップでのヘルプに携わることにより、地域貢献にも参画した。

２　研究の目的

多くの方に英文多読・速読に興味を持ってもらうきっかけを作るため、焼津市教育委員会事務局図書課と協働し、「英文多読入門講座」を3回開催した。焼津図書館では、平成30年度から英文多読入門講座を開催し、多くの方に参加して頂いた結果、英文多読入門講座のニーズが高いことがわかった。令和2年度も引き続き、英文多読を実施すると共に、講座内容の幅を広げて速読に関しても実施し、英語教育の場の提供と、関連図書の貸出冊数及び貸出者の増加を図りたいとのことであった。

「英文多読入門講座」により、より多くの方に英文に触れてもらう機会を作り、英文多読・速読に親しんでもらうきっかけを作ることを目的とし、また英語教育の場を身近な図書館で提供することにより、英語に対して苦手意識を持っていた人の意識が変容し、将来的に英語を使って何かをしたいという欲求の波及効果も見込まれた。

さらに、遠藤雪枝ゼミ所属の学生である遠藤亜美（学生代表）ほか10名の学生が参加し、講座準備やワークショップでのヘルプに携わることにより、地域貢献にも参画することも目的とした。

３　研究の内容

「英文多読入門講座」を、以下の3回開催した。英文多読とは、絵本のような簡単な英語の本から始め、楽しみながら読み進めるうちに英語を英語のまま理解できるようになる勉強法である。

第１回目と第２回目は、焼津図書館所蔵の英文多読向きの絵本を使用し、講座後、受講者が英語の本を借りることができるようにした。第３回目では、音声ＣＤ付きの英文の絵本を使用したため、遠藤が自分の絵本を持参した。

■第１回目

タイトル：「見る、聞く、読む、観る―英語で！」
講師：酒井邦秀さん（ＮＰＯ多言語多読理事）
開催日時：２０２１年１月３１日（日）　１４時～１５時半
開催場所：焼津図書館２階研修室
参加数：１１名
講座内容：講師が「多読３原則」を説明し、それに沿って、受講者は焼津図書館所蔵の英文の絵本を、一人２冊ずつ読んだ。「多読３原則」とは、① 辞書は引かない、 ②分からない単語は飛ばす、③ 自分

に合わないと思ったらやめて次の本に移る、の３つである。

■第２回目

タイトル：「多読＝『た』『読』→たのしく読みましょう」

講師：中野達也さん（駒沢女子大学人文学部国際文化学科教授）

開催日時：２０２１年２月２８日（日）　１４時～１５時半

開催場所：焼津小泉八雲記念館多目的室

同行者：遠藤雪枝ゼミ学生１名

参加数：９名

講座内容：英語の本を楽しむための本選びのコツや読み方のポイントなどを学ぶため、受講者は焼津図書館所蔵の英文の絵本を、一人２冊ずつ手にし、それぞれの本に関する帯やポップアップを思い思いに作った。

■第３回目

タイトル：「多読の次は、速読！」

講師：遠藤雪枝

開催日時：２０２１年３月２０日（土）　１５時～１６時半

開催場所：焼津小泉八雲記念館多目的室

参加数：５名（＋６歳の子供）

講座内容：講師が、第１回目と第２回目の講座内容を簡単に復習し、その後、速読に関する説明をし、受講者は時間を計測しながら（１分間で何語の英語を読むことができるかを測る）、英文の絵本を読んだ。計測読みをした後は、ＣＤの後に続いて、音読した、音読は、オーバーラッピングとシャドーイングという手法を使用した。取り上げた絵本は、「シンデレラ」である。

第１回目講座の様子

第２回目講座の様子（受講生作成のポップアップを講師に提示している場面）

第３回目講座の様子

焼津図書館所蔵の英語の本

４　研究の成果

(1) 当初の計画

講師３人に焼津図書館に出向き、講座を直接レクチャーしてもらう予定だった。

(2) 実際の内容（Ｂ：一部修正）とその理由

コロナ禍のため、第１回目と第２回目の講師２名は遠隔からオンライン（ZOOM）参加となり、同行する学生も予定を大幅に変更し、第２回目の講座のみに同行させ、人数も1名だけにした。

(3) 実績・成果と課題

第２回目と第３回目の講座終了時に、以下のアンケートを実施した。

Q1.　年齢　（回答は、任意です）

a.　20歳以下　　b.　20～40歳　　c.　40歳以上

Q2.　今までの英文多読入門講座に参加されていましたか？

a.　第１回目参加　　b.　第２回目参加　　c.　いいえ

Q3.　この講座に参加されたきっかけは何ですか？

Q4.　この講座の感想を教えて下さい。（複数回答可）

a.　楽しめた　　b.　ためになった　　c.　わかりやすかった　　d.　資料が見やすかった

e.　その他（　　）

Q5.　今後も英文の本を読んでみたいと思いましたか？

a.　はい　　b.　いいえ

Q6.　次回参加してみたい講座はありますか？　あれば、どのような講座ですか？

Q7.　その他何かありましたら、自由にご記入下さい。

それぞれの回におけるアンケート設問Ｑ３～Ｑ７の回答結果は以下の通りである。

■第２回目実施アンケート（回答数９名）

Ｑ３：面白そうだったので / 絵本に興味があったので / 英語の本を気軽に手に取るきっかけにしたかった / 本を読みたいから / ホームページで見て

Ｑ４：楽しめた（８名）/ ためになった

Ｑ５：はい（９名）

Ｑ６：多読の講座を続けてほしい

■第３回目実施アンケート（回答数５名）

Ｑ３：英語の楽しさを知るため / 英語に興味があったので / 英語（英会話）を勉強中 / 英語の本を読んでみたいから / 知人より紹介された

Ｑ４：楽しめた（５名）/ ためになった（２名）/ わかりやすかった（３名）/ 資料がみやすかった（１名）

Ｑ５：はい（５名）

Ｑ６：次回も英語にちなんだ講座をしてほしい / 英会話の講座があれば参加したい / 英会話

Ｑ７：英語の本の読み方が理解できてよかった。先生の説明は大変わかりやすかった。再度先生の英語に関しての講座を受講したい / 発音の事をまた聞きたい

(4) 今後の改善点や対策

・より多くの受講者に参加して頂きたいが、受講者の英語に対する学習歴がさまざまで、それぞれの受講生の英語力に合った講座を提供することは容易ではない。そこで、講座開始数日前までに、受講生の英語力がわかるようなアンケート等を事前にとることができたら、受講者にとって非常に有意義な講座になると思う。

・今回はコロナ禍下での開催となり、第１回目と第２回目の講座において、講師が遠隔からのオンライン参加となったため、開催場所においてインターネット環境が必要となった。しかしながら、インターネット環境が十分でなかったため、モバイルwifiを遠藤が借りることになった。可能であれば、インターネット環境を整えて頂きたいと思う。

５　地域への提言

英語に対して苦手意識を持っている人もいるかもしれないが、英語を恐れず、親しんでもらえればと思う。まずは、例えば、今回の講座のように、絵本のような簡単な英語の本から読み始め、楽しみながら読み進めると、英語を英語のまま理解できるようになると思う。英語教育の場を身近な図書館等の公共施設で提供することは意義のあることであって、今後もこのような企画があればいいと思う。提言として「英語に触れると、世界が変わる！」というスローガンを掲げたいと思う。

６　地域からの評価

上記「４　研究の成果（3）成果」において記述したように、受講生のアンケート結果から見ると、今回の「英文多読入門講座」は、受講生の英語学習への動機付けにもなり、受講生にとって有益であったと言えよう。

牧之原市「魅力ある公園づくり」に関する研究
－日本古典文学と藤の花－

静岡英和大学　人間社会学部　畑ゼミ（研究室）
教　　員：准教授　畑　恵里子
参加学生：橋本、岡田、勝俣、柴、野田、加藤、魏、
NGUYEN、陳、中村（舞）、中村（優）、西村

１　要約

静岡県牧之原市には 30 箇所程度の公園が設置されている。地域に根ざした公園が多く、大都市の公園に比して、手つかずの自然がひときわ身近に感じられる。一方、牧之原市が過年度に実施した市民アンケート等では「公園そのものがない」「子供が遊べるものがない」等の回答が大半を占めている。つまり、認知度向上活動と利用者の要望の収集とが課題となる。今年度は、牧之原市内にある東光寺（とうこうじ／旧榛原郡榛原町）の長藤を取り上げて、チラシ・ポスター・ポケットティッシュ制作に注力して、活動を行った。

２　研究の目的

本事業は、静岡県牧之原市内の公園に焦点を当てた上で、効果的な周知活動を検討することを目的としている。今年度は、牧之原市内にある東光寺の長藤（ナガフジ）を取り上げて、自然と古典文学との観点から、長藤の認知度を高めるようにする。

その際、前年度の継続事業である点を鑑みて、勝間田公園のツツジ・秋葉公園のアジサイに続く、いわば「花めぐり」をひとつの基軸とした周知活動を実施することにする。

３　研究の内容

本課題の基軸は牧之原市内公園の周知活動である。よって、牧之原市民を対象とするチラシ・ポスター・ポケットティッシュの作成・配布が主な内容である。

４　研究の成果

（１）当初の計画は、以下の通りである。

１　『源氏物語』等から藤花の意味性を分析して公園散策マップを制作する（令和２年 10 月～令和２年 12 月）。

２　同市産業経済部観光課等と協働体制を整えて、学生たちと配布活動を通じて周知する（令和３年２月）。

３　イメージキャラクターを新規開発して、既存の市内キャラクターとコラボする。同市出身の少女漫画家の花森ぴんく氏へデザイン依頼を行ってある。

４　同市内でマップ・ポスター等の制作・配布を行う（新聞折込、公民館等／令和３年２月）。

５　記者クラブやマスコミを通じてプレス活動を行う（令和３年２月）。

（２）実際の内容は、以下の通りである。

・実施内容：「Ｂ（一部修正）」に相当する。

・理由：上記１、３、４は遂行したが、上記２、５は遂行できなかったため。

図１　ポスター・チラシ（同デザイン）

実施内容は以下のとおりである。

１　『源氏物語』の叙述や歌舞伎等の演技技法を通じて藤花の意味性を分析した。

２　長藤散策ポスター・チラシ、ポケットティッシュデザインを作成した。キャッチコピーは全ゼミ生で作成した上で検討、選出した。（図１～図２）。

「ほっと一息、繊麗な藤の花に心癒されていきませんか？」（ポスター・チラシ）を選出した理由は、以下のとおりである。

・藤の花の薄紫が癒しをイメージさせ、繊麗というワードも藤の咲く様子を連想させるから。

・藤の花とキャッチフレーズに入っていることで自分たちが何を紹介しているのかが伝わりやすいから。

「藤の花、見に行こっ！」（ポケットティッシュ挿入チラシ）を選出した理由は、以下のとおりである。

・キャッチコピーとは、短くてインパクトのあるものがいいと思ったので、テーマとなる藤を入れてできる限り短いものを考えました。

・簡潔でインパクトがあり、印象に残りやすいから。

・簡潔で、一目で意図が伝わり、頭に残るから。

・藤の花とキャッチフレーズに入っていることで自分たちが何を紹介しているのかが伝わりやすいから。

・キャッチコピーらしい短く分かりやすい文章であったから。

３　新聞折込や牧之原市広報誌を通じて、上記マップを牧之原市民へ広く効果的に周知した。また、牧之原市長面談を実施して、本事業の活動内容を花森氏と報告した。同日、長藤保存会会長との面談を実施して、本事業の活動内容を報告した。

４　イメージキャラクターを新規開発して、既存の市内キャラクター（チャーフィン／新デザイン）とコラボした。その際、同市出身の少女漫画家の花森ぴんく氏へデザイン依頼を行った。

（３）あらたな実績・成果としては、以下のとおりである。

・前年度に比して、ポケットティッシュ配布数を増量することによって、公園周知活動を広く実施した。

・牧之原市長だけではなく、当初の予定にはなかった長藤保存会会長との面談が実施できたことによって、本学学生の活動を直接地域住民に直接伝えることができた。

・公園には自家用車で訪れる人が多いため、目印などを掲載して、「駐車場完備」等、設備の認知度向上に留意した。今回はＱＲコードを新たに挿入して、周辺地図へ簡易にアクセスできるように工夫した。

図２　ポケットティッシュ挿入チラシ（同デザイン）

・市内幼稚園の保護者宛にチラシが挿入されたポケットティッシュを配布して、日常的に公園を想起する機会を持ってもらうことができた。

・モチーフキャラクターの名前を１年ゼミ学生で検討、決定した。採用名は「ふじまきちゃん」である（図３）。

理由は以下のとおりである。

・藤の花の「ふじ」と牧之原市の「まき」から付けた。

・親しみやすさを感じてもらうため「ちゃん」付きにした。

候補に「ふぢまきちゃん」「ふぢなみ」があり、「ぢ」を使うと古風な感じが出る、新しいという意見もあったが、最終的には誰でも藤や牧之原市を連想できる様なより分かりやすく親しみのある名前が良いと言う意見でまとまった。

・別案は「ふぢまきちゃん」「ふぢなみ」「紫色部」「ニキノさん」などであった。

あらたな課題としては、新型コロナウイルス感染症のため、今年度は、当初予定していた学生引率を実施することが困難であった点である。そのため、ポスター・チラシ・ポケットティッシュ作成に注力した。

本活動に携わった学生のコメントは、以下のとおりである。

・コロナウイルスの影響で、全員と顔をあわせての作業を行うことはできなかったが、工夫してゼミ生全員で１つのパワーポイントを完成させることができたのは、とても貴重な経験でした。

・藤の花から自分の好きな源氏物語に繋がり、紫の色のイメージは源氏物語の中でも重要なものだということが分かった。

・古典文学に対する知識が深まり、ただ綺麗だからと藤の花や日本特有の植物を眺めるだけでなく、この植物に関わる古典文学はなにかあるのだろうか、と考えるきっかけになりました。

・藤の花は綺麗なだけでなく、日本古典に深く関わる植物である、と知れました。

・多くの人たちの目に触れることを考えて名前を考えたりスライドの文字サイズや色等を考えることは今までなかったためとても良い経験になった。

図３　イメージキャラクター「ふじまきちゃん」

５　地域への提言

・開花時期（４月下旬～５月上旬）を迎える前に、ポスターやチラシ等を集中的に配布することによって、効果的な集客を見込む。

・日本古典文学とのつながりがあることを PR する。

たとえば、『源氏物語』で光源氏が憧れの人とした藤壺の宮は著名であり、学生からは以下の原文が提出されている。

『源氏の君は、御辺り去り給はぬを、まして繁く渡らせ給ふ御方は、え恥ぢあへ給はず。いづれの御方も、我、人に劣らむ、と、おぼいたるやはある。とりどりにいとめでたけれど、うち大人び給へるに、いと若う美しげにて、切に隠れ給へど、おのづから漏り見奉る。

母御息所も、影だにおぼえ給うはぬを、「いとよう似給へり」と、内侍のすけの聞こえけるを、若き御心地に、いとあはれ、と思ひきこへ給ひて、常に参らまほしく、なづさひ見奉らばや、と、おぼえ給ふ。

上も、限りなき御思ひどちにて、「な疎み給ひそ。怪しくよそへ聞こえつべき心地なむする。なめしとおぼさでらうたくし給へ。

面つき、まみなどは、いとよう似たりしゆゑ、通ひて見え給ふも似げなからずなむ」など、聞こえつけ給へれば、幼心地にも、はかなき花紅葉につけても、心ざしを見え奉る。』(ビギナーズ・クラシックス 日本の古典 源氏物語 P29, 30 より引用)

歌舞伎の『藤娘』も現在も愛好されている作品である。1826 年に江戸中村座で初演が行われ、現在に至るまで公演が続いている人気「歌舞伎舞踊」のうちの一つの曲名であり、初演では「哥へす哥へす余波大津絵」という演目の一部であったが、その中の藤娘だけが独立し、現在も上演されている。

特に東光寺の長藤は能楽の『熊野(ゆや)』に由来するとされていて、日本古典文学との接点が深い。

6　地域からの評価

牧之原市民から直接反応を得る機会は、残念ながらほとんどなかった。ただし、長藤保存会会長との面談によって、本学への希望事項を把握することはできた。長藤を守り、育てるために、相当の労力を要していることが理解できた。

7　学生による参考文献

- The Shizuoka Shimbun and Shizuoka Broadcasting System、東光寺の長藤[牧之原市]、アットエス静岡新聞ＳＢＳ、2020 年、https://www.at-s.com/event/article/flower/119907.html、(参照 2021-1-9)
- SHIZUOKA EIWA GAKUIN、人間社会学科・畑ゼミ（日本古典文学）で作成した静岡県牧之原市の公園広報用ポスター・チラシ・ポケットティッシュが完成しました（２月 15 日)、2021 年、http://www.shizuoka-eiwa.ac.jp/news/kikaku073/、(参照 2021-2-19)
- SHIZUOKA EIWA GAKUIN、人間社会学科・畑ゼミ（日本古典文学）の成果を牧之原市長へご面談して報告しました。、2020 年、http://www.shizuoka-eiwa.ac.jp/news/kikaku056/、(参照 2021-2-19)
- SHIZUOKA EIWA GAKUIN、人間社会学科・畑ゼミ（日本古典文学）で作成した静岡県牧之原市の公園広報用ポスター・チラシ・ポケットティッシュが完成しました、2020 年、http://www.shizuoka-eiwa.ac.jp/news/kikaku055/、(参照 2021-2-19)
- 紫式部 角川書店編 「ビギナーズ・クラシックス 日本の古典 源氏物語」(角川ソフィア文庫 平成 13 年)
- 日本芸術文化振興会　文化デジタルタイブラリー　舞台芸術教材で学ぶ　歌舞伎　藤娘 (https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/modules/kabuki_dic/entry.php?entryid=1256) 2021/03/14 確認
- 日本芸術文化振興会　文化デジタルタイブラリー　舞台芸術教材で学ぶ　歌舞伎　藤娘
- （ https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/modules/kabuki_dic/entry.php?entryid=1256) 2021/03/14　確認
- コトバンク　藤娘 (https://kotobank.jp/word/%E8%97%A4%E5%A8%98-124508) 2021/03/14 確認

以上

（成果報告書）

藤枝セレクションのブランド力向上と発信力強化に関する研究

静岡産業大学 経営学部 柯研究室
教　　員：　教授　柯　　麗華
教授　天野　利彦
講師　内藤　旭惠

１　要約

本研究は、藤枝セレクションのブランド力向上と発信力強化に関する研究であり、2021年度の藤枝セレクション事業に向けた改善を目的としたものである。藤枝セレクション事業は長きにわたり、毎年11商品を認定し、現在まで継続してきたが、その優位性と競争力が低下しつつある現状を踏まえ、テコ入れするものである。本研究では、藤枝セレクション事業の現状を分析するために、アンケート調査を実施して現状を把握し、その上で、改善プランを考えるとともに、プロモーション方法を検討したものである。

２　研究の目的

本研究の目的は、マーケティング、情報学、文化学の専門家の視点から、藤枝セレクションの現状と課題を分析し、藤枝セレクションのコンセプトや審査の手法、適正な認定数などについて、どのようなリニューアルが必要かの提案である。また、藤枝セレクションの発信力強化につながるように提案することである。

３　研究の内容

（１）情報収集、文献分析

日本国内各地の地域活性化、地域プロモーション、地域ブランディングなどの取組みの情報収集を行い、成功事例や失敗事例の分析を行った。また、地域特産品の販売やブランディングなどに取り組むためのポイントをまとめた。

（２）アンケート調査

2020年10月1日から2021年1月17日まで、「藤枝セレクションに関する消費者動向調査」を10～70代の男女250名を対象に実施し、有効回答数127であった。回答者の87.4%は、藤枝セレクションを知らないと答え、わずか14.2%の人が藤枝セレクションの商品を購入したことがあったと回答した。そして、「今後も藤枝セレクションの認定を継続すべきと思いますか」の問いに対して、64.1%の人が「はい」と答えた。

アンケート調査の結果から、藤枝セレクションの取組みが評価されていることが分かった。しかし、藤枝セレクションの存在すら知らず、知名度の低さが浮き彫りとなり、プロモーショ

ン活動の強化が最大の課題といえる。

一方、お土産の購入に関する項目では、「お土産購入の情報源は何ですか」の問いに対して、トップがSNS（41.7%）であった。また、「好きなPR方法は何ですか」について、前項と同様SNSが一番（63.8%）であることも明らかになった。従って、藤枝セレクションのプロモーション手法は、SNSが最も有効である。

（３）藤枝セレクションの動画の制作

藤枝セレクションに関する動画制作を実施した。今回のアンケート結果では、プロモーション活動が弱いといった結果が示されたため、短期間ではあったが、2020年度認定商品を用いてパイロット版の紹介動画を制作した。これらの動画はブラッシュアップし、YouTubeや藤枝市役所の公式サイトにて公開を進めたいと考えている。

４　研究の成果

（１）当初の計画

当初の研究計画では、まず、藤枝セレクションに関する現状と課題を明らかにするため、アンケート調査を行う。そして、藤枝セレクションの認定企業に対してヒアリング調査を実施する。また、北九州市の食の認定ブランド「百万の息吹」などの成功事例を現地に赴いて調査する。さらに、藤枝セレクションの現状と課題を踏まえ、藤枝市と類似している他地域での成功事例を参考に、将来の方向性を見据えた藤枝セレクション事業の改革案を提案する。この藤枝セレクションの認定を受けることによって、次のビジネスチャンスにつながるものにしたいと考えていた。

（２）実際の内容（Ｂ：一部修正）

しかし、コロナ感染拡大の影響を受け、国会図書館や研究所での資料収集ができなくなった。また、藤枝セレクションの認定企業に対してヒアリング調査及び他地域への現地調査も不可能となった。そこで、研究手法を変更することとした。まず、先行事例の文献収集と図書資料の分析を行った。次に、大学生を含む一般人127名（有効回答者数）にアンケート調査（インターネット）を実施し、分析を行った。また、藤枝セレクションの知名度を上げるためのプロモーション手法を検討した。

（３）実績・成果と課題

１）情報収集、文献分析

藤枝セレクションの現状と課題が明らかになった。現状では、藤枝セレクションに認定された商品に対して、「①称号を3年間名乗ることができる。②販売促進、販路開拓への機会の提供や、アドバイスなどの支援が受けられる。③ホームページや冊子でピーアールすることができる。」との特典がある。しかし、企業側から見ればこれらの特典に魅力が欠け、参加企業の減少につながっていると考えられる。

２）アンケート調査

アンケート調査により、藤枝で作られる様々な地場産品の中から、「藤枝の誇り」、「安心の証」、「コトづくり」に優れた藤枝を代表する商品を認定し、藤枝の名を全国に発信するという取り組みが、評価されていることがわかった。しかし、藤枝セレクションの知名度の向上が最大の課題であることも明らかになった。

３）藤枝セレクションのプロモーション手法の検討

一般的にマーケティングのプロモーションの手法は大きく5つの種類がある。広告宣伝、広報活動、販売促進活動、人的販売、口コミ／SNSである。藤枝セレクションのプロモーションについて以下の方法が考えられる。

まず、広告宣伝と広報活動は既に行われているが、その手法は主に紙面媒体として展開されており、範囲や影響力は限定的になっている。そして、販売促進活動や人的販売にも改善の余地がある。例えば、藤枝セレクションの認定商品に関して、告知のポスターを目立つ所に掲示したり、販売員が積極的な推奨販売をしたりし、藤枝セレクションの販売促進会を行ったりすることも考えられる。アンケート調査からわかるように、プロモーションに力を入れることが最大の課題である。そこで、以下のことを提案する。

① PR動画の制作

YouTubeなどを活用したPR動画によるものである。現在、動画コンテンツは世界的にも活用されてきており、瞬時に全世界に情報発信できる有効的なツールとなっている。YouTubeなどを用いて、人気のあるYouTuberなどを起用してコラボレーションすることで、藤枝セレクションを全国や海外に知らしめることが可能である。

② SNSでのPR活動

SNSでのPR活動は、フォロワー数の多いブロガーに藤枝セレクションの商品を活用してもらい、SNSにアップしてもらうことで、藤枝市や藤枝セレクションの認知度を向上させる方法である。そうした人々が日常的に愛用することや、利活用することで消費拡大にもつながると考える。

③ 藤枝出身の著名人の起用

藤枝出身のサッカー選手を藤枝観光大使や藤枝セレクションオフィシャルサポーターに任命するのも一つの方法である。全国大会や世界大会などでも、藤枝セレクションに関する商品を持参してもらい、PRするといった方法も考えられる。

④ アジア向けのPR活動

訪日外国人観光客の主役はアジア人であるため、藤枝セレクションのターゲットは彼らに絞る。公式サイトに多言語で掲載するとともに、静岡県内在住の外国人に自国語で藤枝セレクションを紹介する動画をアップし、アジア人の関心を引く仕掛けを行う。

（４）今後の改善点や対策

１）藤枝セレクションの認定について

藤枝セレクションのコンセプトや審査の手法、適正な認定数などについて検討をしてきた。まず、コンセプトは、藤枝市の独自性を前面に出しており、審査のやり方は妥当性がある。次に、認定数についてである。藤枝セレクションとして毎年11品目を選定することが、応募数減少により消費者への訴求力の逓減化につながっている。応募数減少は、藤枝セレクションの仕組みに問題があるのではなく、応募企業側から見れば特典に魅力が欠けているからである。例えば認定企業に賞金を与えれば、応募へのモチベーションの向上につながると考えられる。そして、認定数に関しては、絶対的な正解はないといえる。地域ブランドとして著名な「神戸セレクション」では2020年度51商品を選定している。一方、同じく有名な地域ブランドである「ヨコハマ・グッズ001」では今期、「市長賞」2点と「審査員特別賞」6点に絞り込んでいる。藤枝市の規模では地域の「定番商品」を創造するのか、新規商品の開発を通じて「イノベーション力」を高めるのが目的か、事業目的との相関によるので再検討の余地がある。

一方、目的の如何に関わらず、藤枝セレクションの客観的な課題は、認知度の低さにある。アンケート調査や他地域の事例と比べると、藤枝セレクションの認知度が格段に低いことが分かった。藤枝セレクションの認定基準や方法を変更しても、知名度が低いため、その影響力や販路拡大につながらないと考えられる。そこで、現時点の認定制度を変えるよりもプロモーションに重点を置くことがベストである。また、コロナウイルスの影響で、藤枝セレクションの認定企業や消費者へのヒアリングが不十分であるため、根拠となる提案が難しい。

２）藤枝セレクションのプロモーション

藤枝セレクションの知名度の低さは、藤枝市の知名度と関連している。藤枝セレクション単体のプロモーション活動を行っても効果が低く、サッカーの街、藤の花の街と一緒にプロモーション活動を展開することが重要である。例えば、藤枝市の四季、観光名所、著名人へのインタビュー、暮らしと藤枝セレクションなどの動画を作成し、藤枝市のホームページやSNSで積極的にPR活動を行うことが考えられる。

また、企業側から見た藤枝セレクション認定特典の魅力度を向上させることも不可欠である。例えば、クラウドファンディングで資金を調達したり、予算を増やしたりして、藤枝セレクションに認定された商品に対して、賞金を与えることが考えられる。また、販路拡大の具体的な方法は、神戸セレクションの取組み（インターネットモール販売会、百貨店販売会）が参考になる。

５　地域への提言

（１）STPの明確化

藤枝セレクションのコンセプトに基づくマーケティング戦略の展開が重要である。すなわち、「どの消費者をターゲットにするのか」「消費者にどのような商品を提供するのか」「何の目的で売るのか」を明確化することである。よく知られているように、マーケティングは、自社の

製品を売り込むための考え方ではなく、市場や顧客に対して必要とされているものを届けるための考え方である。そこで、藤枝セレクションのSTPの明確化が重要である。すなわち、Segmentation（市場の細分化）に関しては、消費者ニーズに基づくグループ分けを明確化し、Targeting（標的市場の決定）では、攻略すべきターゲットを明確化し、Positioning（ポジションの明確化）では、自店や製品の立ち位置を明確化することが重要である。

（２）藤枝セレクションの物産展の開催・出展

大都市圏で積極的に物産展を開催すれば、藤枝の魅力を多くの人にアピールすることができる。また、これらの大都市部にアンテナショップを常設すれば、じっくりリピーターを広げていくことも可能である。

（３）パブリシティの活用

藤枝セレクションの話題を積極的にメディアに提供する。マスメディアからのアプローチを待つのではなく、自らがマスメディアに働きかけて話題を提供することでパブリシティの成果を高めることができる。

（４）ふるさと納税の活用

藤枝セレクション認定商品の「ふるさと納税」の活用法としては、返礼品の還元率を高めることによって、寄付者の関心を集め間接的に藤枝セレクションのプロモーション活動にもつながる。藤枝セレクション認定品を継続的に返礼品として採用すれば、藤枝市税の増加にもつながる。

以上の提言をまとめると、マーケティング活動の強化には、①注目を集める人材、例えば著名YouTuberやブロガー、或いは世界的に活躍している藤枝出身アスリートとのコラボレーション、日常場面での利活用を動画やHP、ブログ、各種SNSで訴求する。②大都市圏での百貨店物産展への参加、インターネットモール販売会、アンテナショップでの恒常的展示によるチャネルの強化、③マーケティング資金の確保、例えばクラウドファンディングの実施、市予算の拡充、ふるさと納税返礼品としての活用ということが考えられる。

６　地域からの評価

藤枝市では、藤枝セレクション事業が抱える課題を解決し、ブラッシュアップを図るため、本研究助成金の公募を実施した。

「藤枝セレクション」の現状を分析し、先進事例を調査・分析することで「藤枝セレクション」の具体的なブラッシュアップ内容について提言する予定だったが、新型コロナウイルス感染症蔓延に伴い、先進地調査（現地調査）や藤枝市が要望する具体的かつ専門的な視点で掘り下げた提言を期限内に充分にできなかった。

STPの明確化やプロモーション方法の提言については、今後の事業に活かし、発信力の強化につなげていきたいと藤枝市から意見をいただいている。

（成果報告書）

温泉水を活用した水耕栽培モデルの探索

筑波大学 生命環境系　蔬菜・花卉学研究室
教　　員：教授 江面　浩

１　要約

井川地域の温泉水（アルカリ性）を活用したハーブ類を含む野菜類の水耕栽培の可能性を調査した。データベース検索や有識者への聞き取り調査からアルカリ性温泉水で生育が期待される４種類の野菜（小松菜、千宝菜1号、むらさきつるな、エンツァイ［空芯菜］）を選定した。井川振興会から提供された温泉水（対象：水道水）を使い、選定した野菜の水耕栽培を行った。温泉水及び水道水に同量の所定量の水耕液肥を添加し、発芽から収穫時までの生育調査を行った。その結果、小松菜、千宝菜1号、エンツァイは、発芽から初期生育（播種後３週間）とも温泉水区と水道水区で同様の生育を示した。一方、生育後半から収穫期（播種後５週間）になると各品目とも温泉水区で顕著な生育遅延がみられ、収穫量が大きく減少した。

以上の結果、３品目の野菜については井川地区の温泉水でも生育・栽培できるが、水耕液成分の最適化や温度制御など工夫が必要と考えられた。なお、生育が認められた３品目の野菜は機能性成分が豊富とされており、今後成分分析などを行い、機能性成分の向上など有用形質が認められば、健康に良い“温泉野菜”などとしてブランド化の期待もできる。

２　研究の目的

静岡市井川地区では、豊富な温泉水を利用した作物の施設栽培を検討している。本研究ではこの豊富な温泉水を利用し、ハーブ類を含む野菜類の高付加価値化を目指した水耕栽培の可能性を検証することを目的とする。

３　研究の内容

静岡市井川地域の温泉水（アルカリ性）を活用したハーブ類を含む野菜類の水耕栽培の可能性を探るため、アルカリ性に強い作物の探索調査を行い、得られた品目の中から種子が入手可能な品目を選び、実施に水耕栽培を行い、生育調査を行った。

４　研究の成果

(1) 当初の計画

市民局・井川支所から相談を受けた当初は、井川地区の温泉水を活用したハーブ類の栽培の可能性を探る内容であった。担当教員が現地に赴き、対象となる温泉水の泉質分析結果を精査した結果、アルカリ性の強い温泉水であることが判明した。そこで、対象作物の範囲をハーブ類から野菜類に拡大し、栽培品目の探索・選定を行うこととした。

(2) 実際の内容（Ａ：予定どおり）とその理由

以下の３つの項目について、調査研究を行った。

１）温泉水の概要：2020年11月24日に担当教員が井川地域を訪問し、井川支所及び井川振興会のメンバーと意見交換を行うとともに、温泉水の成分調査（文献調査）を行った。

２）アルカリ耐性野菜の探索：温泉水の泉質の調査からアルカリ性に偏った水質であることが判明したので、アルカリ性でも生育可能性のある野菜・ハーブ類の探索をデータベースや有識者への聞き取り調査により実施した。

３）温泉水を使った水耕栽培：探索を行った野菜品目の中から種子入手可能な品目を選び、井川振興会から提供された温泉水（田代110地先）を使って水耕栽培を実施した。水耕栽培装置は、ホームハイポニカPLAABO（協和株式会社）を使用し、処方箋に従って温泉水と水道水で水耕液を調合し、筑波大学内のガラス温室で栽培を行った。なお、種子の発芽試験と育苗は、筑波大学内の室内栽培室で行った。栽培と調査概要は以下の通りである。

〇3月5日：播種（培養室：23℃、16時間日長）濾紙を敷いたシャーレに水耕液を入れ静置、水耕液は水道水（もしくは温泉水）+処方水耕原液

〇3月8日：発芽調査、支持体への移植、室内栽培室で育成

〇3月15日：水耕栽培装置、水耕液は水道水（もしくは温泉水）+処方水耕原液、太陽光温室の全室で栽培

〇3月22日：生育調査（外観）

〇3月26日：生育調査（外観、クロロフィル含量［SPAD値］）

〇3月29日：生育調査（外観）

〇4月7日：収穫調査（重量、外観、クロロフィル含量［SPAD値］）

４）考察：得られた結果の解析を行い、今後の課題抽出を行った。その結果を持って、井川地区を再度訪問し（2021年3月30日）、結果の報告を行い、地域への提言と地域からの評価をいただいた。

(3) 実績・成果と課題

１）温泉水の概要：次の２地区の温泉水の水質調査データの収集を行った。特に、作物栽培で重要な指標となるpH値が何の調査地ともアルカリ性であった。通常、植物の栽培には弱酸性水が適しているので、栽培水としての適性が懸念された。

<u>〇調査地１：田代110地先　第一貯湯槽</u>

pH値： 9.4

EC値：83.0 mS/m

成分、分量、組成：省略

<u>〇調査地２：田代1　井川１号</u>

pH値： 8.5

EC値：293.0 mS/m

成分、分量、組成：省略

２）アルカリ耐性野菜の探索：アルカリ性水でも生育可能性のある野菜・ハーブ類の探索をデータベースや有識者への聞き取り調査により実施した結果、以下の品目が抽出された。

＞野菜類：アブラナ科類（小松菜、ブロッコリ、キャベツ、千宝菜など）、リーク、アスパラガス、空芯菜［エンツァイ］（水に浮かぶIpomoea 属で、その通り*I. aquatica*が学名）、熱帯ハス（茎を食べる）、むらさきつるな（赤い茎の品種は結構可塑性高い）

＞ハーブ類：ローズマリー、タイム、マジョラム

＞花卉類：ラベンダー、ボリジ(食用にもなる)、スズラン

３）温泉水を使った水耕栽培：上記より、種子が入手可能な４品目（小松菜［アタリヤ農園］、千

宝菜1号［トキタ種苗］、エンツァイ［サカタのタネ］、むらさきつるな［トーホク種苗］）を選び、井川振興会から提供された温泉水を使って水耕栽培を実施した。その結果、小松菜、千宝菜1号、エンツァイは、発芽から初期生育（播種後３週間）とも温泉水区と水道水区で同様の生育を示した（図１）。一方、生育後半から収穫期（播種後５週間）になると各品目とも温泉水区で顕著な生育遅延がみられ、収穫量が大きく減少した（図２、表１）。

表1　温泉水で栽培した小松菜と千宝菜1号の収穫調査
(播種:3/5、収穫:4/7)

水耕液の種類	品目	調査個体数	平均地上部重量 (g)	平均SPAD値	備考
水道水	小松菜	5	20.3	36.7	
	千宝菜1号	5	27.6	33.5	
温泉水	小松菜	5	9.20	29.6	
	千宝菜1号	5	15.5	25.5	

なお、生育が認められた３品目の野菜は機能性成分が豊富とされており、今後成分分析などを行い、機能性成分の向上など有用形質が認められば、健康に良い“温泉野菜”などとしてブランド化の期待もできる。

４）考察と課題：３品目（小松菜、千宝菜1号、エンツァイ）の野菜については井川地区の温泉水でも生育・栽培できるが、生育後半に生育遅延が顕著になり、水耕液成分の最適化や温度制御など栽培条件の工夫が必要と考えられた。ちなみに、今回の栽培では水道水を使った水耕栽培装置に適した水耕液処方で栽培を行っており、温泉水に合わせた処方改善が必要である。

(4) 今後の改善点や対策

今後の改善点としては、１）温泉水にあった水耕液処方の改良、２）生育が可能と判断された野菜３品目については、他の品種も多数存在し、それらの中からより温泉水による水耕栽培に適した品種の選定を行うことも必要である。また、温泉水によるストレス栽培により、機能性成分の含量が向上している可能性もあり、分析によるそれらの見極めも必要である。

５　地域への提言

生育が認められた３品目の野菜は機能性成分が豊富とされている。例えば、小松菜は栄養価の高い野菜として知られ、βカロテン、ビタミンC、ビタミンE、カルシウム、鉄分、カリウム、葉酸、食物繊維などに優れており、今後成分分析などを行い、機能性成分の向上など有用形質が認められば、健康に良い“温泉野菜”などとしてブランド化も期待できる。

６　地域からの評価

2021年11月24日の温泉水湧水地の現地調査では、井川地区の温泉水を使った作物栽培は難しいと予想されたが、実際の調査研究では、品目を選べば栽培可能な作物があることが見出された。今後、栽培条件の最適化や栽培された作物の特性、特に健康機能性成分の組成などを行い、地域特産作物となりうる可能性が見出された。

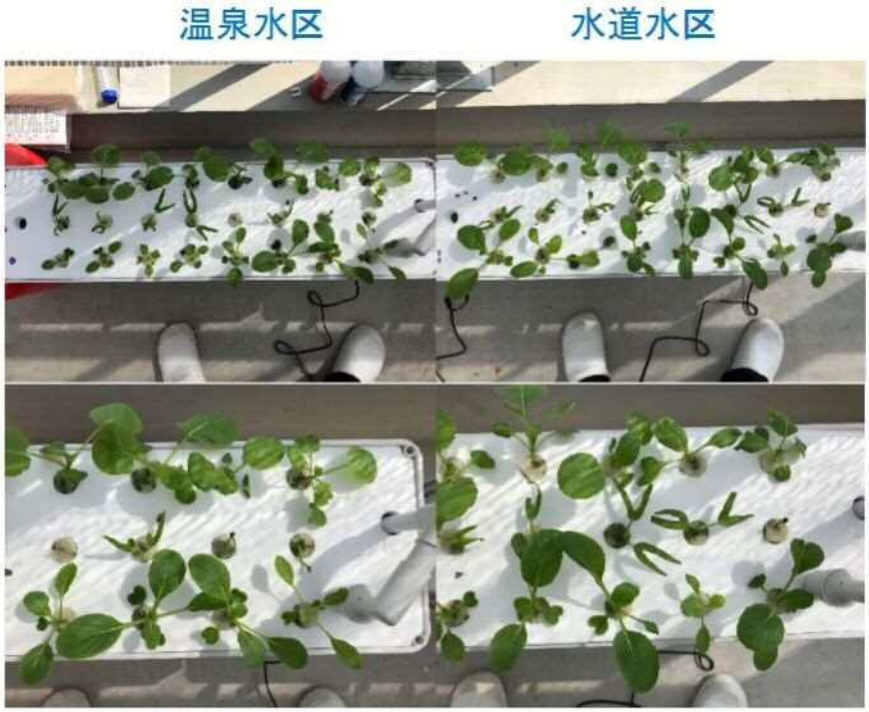


図1　温泉水で栽培した千宝菜1号（上段）、エンツァイ（中段）、小松菜（下段）の生育状況（3/26）

図2　温泉水で栽培した小松菜と千宝菜1号の収穫状況（4/7）

令和２年度
しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業
研究成果報告書

令和３(2021)年３月
しずおか中部連携中枢都市圏
（静岡市・島田市・焼津市・藤枝市・牧之原市・吉田町・川根本町）

（事務局）
静岡市　企画局　企画課　地方創生推進係
〒420-8602　静岡市葵区追手町５番１号
電話： 054-221-1022　FAX： 054-221-1295
E-Mail： kikaku@city.shizuoka.lg.jp